續國譯漢文大成

文學部　八十四

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部 第八十四册（第二十一帙の四）

高青邱詩集 三の四

吉田孝郎氏 寄贈本

昭和廿三年 圖書

309
65

五言律詩

送吳縣令遷松陵

吳縣令の松陵に遷るを送る

山縣彈琴罷。江城露冕初。
夏霖湖更濶。朝日市長虛。
柳下催耕鼓。桑間問俗車。
秋風莫思去。客館有鱸魚。

【字解】【一】山縣　山邊の縣、何處とも分からぬ。【二】彈琴　宓子賤の故事、前に數ば見ゆ。【三】江城　松陵を指す。【四】露冕　華陽國志に「郭賀、字は喬卿、荆州刺史となつて殊政あり。明帝、南陽に到つて巡狩し、三公の服を賜ひ、敕して部を行り、轅を去り、冕を露はし、百姓をして之を見しめ、以て有德を彰はす」とある。【五】夏霖　雨三日以上を霖といふ。

【題義】說明に及ばぬ、但し、吳某の名字は不詳。

【詩意】君は、これまで山邊の邊鄙な小縣に在つて、琴を彈じて治績頗る舉がり、この度、松陵の令に榮轉し、冕を露はして入部することになつた。松陵の地たるや、夏、長雨が續けば、湖面愈よ濶くなり、その頃は、朝日が上つても、市が開かない。何にしろ、水邊であつて、農桑が非常に發達して居るから、柳の下で鼓を鳴らせば、一齊に耕作に赴き、桑間に車を停めて、風俗を問へば、得るところも多いであらう。やがて、秋風の季節に成つても、かの張翰の如く歸り去らうと思はなくても善いので、客館には、鱸魚があつて、舌鼓を鳴らすに足ることと思ふ。

寄沈達卿校理

風雨清明後。春寒未裌衣。
閉門聽鳥盡。入寺看花稀。
獨酌愁難去。相思夢欲飛。
艱難宜數見。何事却長違。

沈達卿校理に寄す

風雨清明の後、春寒くして未だ裌衣ならず。
門を閉ぢて鳥を聽いて盡くし、寺に入るも花を看ること稀なり。
獨酌、愁、去り難く、相思、夢、飛ばむと欲す。
艱難、宜しく數ば見るべし、何事ぞ、却つて長く違ふ。

【字解】【一】清明　二十四節の一、三月の節。陽曆では四月五六日の頃。【二】裌衣　あはせの著物。【三】艱難　世事の愈よ六つかしいこと。【四】長違　長く相遇はぬこと。

【題義】說明に及ばぬ。但し、校理は官名。

【詩意】風雨の中に清明の節を送りし後、春は寒くして、まだ裌衣を著るやうにも成らぬ。ここに、予は、門を閉ぢて蟄居し、鳥の聲を聽き盡したが、時たま寺に往つても、花はまだ咲き出さぬ。獨りで、いくら酒を酌んでも、愁を除き去ることは出來ず、君を思ふと、夢が其地に飛んで行く位。この世事多難の時に當り、數ば相遇ふならば、いささか慰みにもなるが、如何なれば、打絶えて、御目にかかることが出來ないのであるか。

【餘論】この詩は、自家今日の境遇を敍して、面晤の期あらむことを嘱望したので、殊に、後聯は一往情の深きを覺える。

贈呂醫

藥院閉閒朝。煙生積劈燒。
求眞游岳遍。訪病出城遙。
收穀寧煩僕。尋苓或遇樵。
世方多內熱。一匕儻能消。

呂醫に贈る

藥院、閒朝に閉し、煙生じて積劈燒く。
眞を求め岳に游ぶこと遍ねく、病を訪ひ城を出づること遙かなり。
穀を收めて寧ろ僕を煩はさむや、苓を尋ねて或は樵に遇ふ。
世、方に內熱多し、一匕、もしくは能く消さむ。

【字解】【一】藥院　卽ち藥局。【二】積券燒　柳宗元の宋清傳に「疾痢死傷の者、清に就いて藥を求む、錢を持ぜずと雖も、皆善藥を與ふ、積券山の如し。或は識らざるも、遙に券を與へて辭を爲さず、歲終れば、輒ち券を焚く」とある。【三】求眞　眞は仙人。【四】茯苓　苓は茯苓。【五】內熱　莊子に「吾、朝に命を受けて、夕に冰を飲む、我其れ內熱するか」とある。【六】一匕　一さじ、少しばかりの藥。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】藥局は靜かなる朝に閉ぢて、容易に開かない。君は藥を無代價で頒布して、歲の終には、その證書を焚き棄てるとのことで、さすがに、仁者たるに負かない。かつて、仙人を尋ねて、殘りなく五嶽を巡つたこともあるし、患者を見舞ふ爲には、はるかに城外にまで出かける。その間、稻の刈りこみにも、家僕を煩はさずして、自分で田に出かけ、又茯苓を探がす爲に、山に分け入つて樵夫に遇ふこともある。顧みれば、この世に居ると、いろいろの憂き目に遇つて、心中の熱することが多いが、君から一さじの藥を貰つたならば、ひよッと、これを消すことが出來るかも知れない。

次韻陳留公見貽湖上行屯之作

陳留公の貽られし湖上行屯の作に次韻す

湖陰巡壘罷。緩服上仙舟。湖陰、壘を巡つて罷め、緩服、仙舟に上る。

景好看宜晚。詩淸賦爲秋。景は好くして、看、晚に宜しく、詩淸くして、賦、秋に爲にす。

葉應隨鳥散。山欲趁波流。葉は應に鳥に隨つて散ずべく山は波を趁うて流れむと欲す

亦有東游興。空憐未得酬。亦た東游の興あり、空しく憐む未だ酬ゆるを得ざるを。

【字解】【一】湖陰　湖の北岸。【二】緩服　便服、略服、南史沈慶之傳に「劉湛收めらるるの夕、上、門を開いて慶之を召す。慶之、戎服、靴を履み、袴を綽して入る。上見て驚いて曰く、卿、何の意ぞ、乃ち爾かく急裝する。慶之曰く、夜半、陛主を喚ぶ、緩服を尊るさず」とある。

【題義】陳留公は何人か分からぬが、いづれ、張士誠の大官であらう。行屯の屯は屯田、漢書趙充國傳に「分つて要害に屯す」とあり、又「兵耕すを屯田といふ」とある。この詩は、陳留公が湖上の屯田兵營を巡視した詩を貽られたから、それに次韻したのである。

【詩意】君は、湖北に至りて、屯田の營舍を巡檢し、それが濟むと、便服で舟に乘られた。好い景色は、晚に眺めるが宜しく、秋を賦した爲に、詩も自然淸趣である。落葉は、鳥に隨つて散り、山は波を趁うて流るるばかりで、流石に面白い。承はれば、東邊に游ばれるさうであるが、お伴をして、逸すがら、詩を酬ゆることの出來ないのは、いかにも殘念である。

【餘論】後聯は、沈重屈折、自然妙處に到達したものである。

雨後飲西園偶然亭

晚酌櫻桃下。歡來不奈春。
那知醉後客。猶是亂中人。
雨霽飄還細。花寒破未匀。
江皐舊游處。回首莫沾巾。

雨後、西園の偶然亭に飲む

晩に櫻桃の下に酌む、歡來れども、春を奈かむともせず。
那ぞ知らむや、醉後の客、猶ほ是れ亂中の人なるを。
雨霽れて飄つて還た細、花寒くして破れて未だ匀せず。
江皐舊游の處、首を回らすも、巾を沾す莫れ。

【字解】【一】櫻桃　櫻と桃とではない、和名ゆすらむめ、本草綱目に「櫻桃は桃の類に非ずと雖も、その形、桃に肖たるを以て故に之に名づく。その樹、甚だ高からず、その葉、圓にして尖、及び細齒あり、春初、白花を開く、繁英、雪の如く、實を結べば、一枝數十顆」とある。【三】未匀　匀はひとしと訓す、一齊に咲き揃はぬこと。【三】江皐　皐は澤地、江邊に同じ。

【題義】說明に及ばぬ。但し、西園は、自宅に在つて、偶然亭も、無論、その中に在ることと思はれる。

【詩意】日暮、櫻桃の花の下に酒を酌み、大分上機嫌に成つて來たが、この春を十分に樂むことは出來ない。誰か料らむ、醉後の客とは云ふものの、顧みれば亂中の人で、心ゆくばかり酣歌するは、思ひも寄らぬことである。雨は、一寸霽れたが、又ぞろ、細かいのが降つて來るし、花は寒げに見え、咲き出でたとはいへ、まだ十分に揃はない。江邊なる舊游の處などは、定めて荒蕪に歸せしなるべく、そんな事を思つて、涙に巾を沾しては、まことに果しないことである。

鄰家桃花

春色東家出。相窺似有心。
曲垣遮自短。別院閉還深。
影動疑人折。香搖妬蝶尋。
好風時解意。吹片拂羅襟。

鄰家の桃花

春色、東家より出で、相窺ふ、心あるに似たり。
曲垣、遮つて自ら短く、別院、閉ぢて還た深し。
影、動いて人の折るを疑ひ、香、搖いで蝶の尋ぬるを妬む。
好風、時に意を解し、片を吹いて羅襟を拂ふ。

【字解】【一】曲垣　曲つて繞らしたる籬。【二】別院　別に成つて居る一棟。【三】吹片　片は花びら。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】春色なまめかしき桃の花は、ぬッと東家より出でて此方を窺ひ、さながら心ありげに見える。曲れる垣は、中を隔てて居るが、丈が低いから、かくの如く遠慮なく出て來たのであるし、そこに近き鄰家の別院は、深く閉ぢて、人ありとも見えず、つまり、この花は、わが玩賞に任かされて居る。その影の動くときは、人が折りに來たのではないかと疑ひ、香氣の搖ぐ時は、蝶の尋ぬるさへ妬ましいと思ふ。しかし、心地よき春の風が、時時花びらを吹き散らして、襟の邊を拂ふのは、流石に我が意を解するものの如く、殊にしほらしい。

【餘論】これは詠物の體であつて、略ぼ其體製を備へて居るが、なほ平淺を免れぬものである。

和王止仲校理夜坐

王止仲校理の夜坐に和す

池暝花如霧。蒼蒼月照開。
池は暝して、花、霧の如く、蒼蒼として、月照らし開く。

梁空雙燕宿。簾暗一螢來。
梁は空しくして雙燕宿し、簾は暗くして一螢來る。

兵散誰家笛。人違此夜杯。
兵は散ず誰が家の笛、人は違ふ此夜の杯。

如何對清景。愁思却相催。
如何か清景に對し、愁思、却つて相催す。

【字解】【一】池暝　暝は暮るる、黄昏がるるの意。【二】蒼蒼　白くして光彩なきを云ふ、ほの白し。【三】兵散誰家笛　晉書劉琨傳に「琨、晉陽に在つて、胡騎に圍まるる數重、城中窘迫して計なし。琨、乃ち月に乘じ、樓に登つて清嘯す。胡、これを聞いて、皆悽然として長嘆す。中夜、胡笳を奏す、胡又流涕歔欷、懷土の切なるあり。曉に向つて復た之を吹く、胡、竝に圍を棄て走る」とある。これは胡笳であるが、ひとしく吹く物である處から、笛の故事としても適用するので、杜甫の聞笛の詩にも胡騎中宵壓三北走」とある。

【題義】説明に及ばぬ。王止仲は、例の北郭十友の一人で、青邱の熟友である。

【詩意】池の邊は黄昏れて、花は霧の如く、月は出たけれども、ほの白く照らして居る。畫梁は空しくして、唯だ雙燕の宿するあるのみ、簾は暗くして螢が一つ飛んで來た。圍城の賊兵の散じたのは、誰が家の笛を聞いた爲であるか、そして、この夜、君と會飲の期を失つたのは、まことに殘念である。君の詩で見ると、清景に對して、愁思の却つて相催すに堪へぬといふ樣なことを述べてあるが、そは何故であるか、蓋し、時事に感激した爲であらう。

【餘論】前聯は、一寸面白いが、螢は、ちと早過ぎはせぬかと危ぶまれる。

答陳校書客懷

陳校書の客懷に答ふ

同患君尤甚。時難覺意眞。
同患、君尤も甚し、時難、意の眞なるを覺ゆ。

愁邊長夜雨。夢裏少年春。
愁邊長夜の雨、夢裏少年の春。

游遠荒家業。交疏困路塵。
游遠くして家業を荒び、交疏にして路塵に困む。

一杯歌短調。誰聽不沾巾。
一杯、短調を歌ふ、誰か聽いて巾を沾さざらむ。

【字解】【一】同患　世に容れられずして、落魄することが同じだといふ意。【二】時難　今の時の多難なること。【三】路塵　行路の塵。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】今の世に容れられずして居ることは同じであるが、君の方が特に甚しく、刻下の多難に遇うて、愈よ心意の眞なるを感ずる。愁邊には、長夜の雨降りそそぎ、夢中、空しく少年の春を見て、追憶の念、いや增すのみである。加ふるに、遠游して、家業は愈よ荒み、訂交の人なくし

て、異郷に居ると、行路の塵に惱むを免れない。ここに、一杯の酒を傾けつつ、短調の詩を吟ずると、誰が聽いても、巾を沾さぬものは無い。

【餘論】この詩は、前に卷十二、送陳則一の五律、

挾策去誰親。侯門不禮賓。愁邊長夜雨。夢裏少年春。樹引離鄕路。花驕失意人。一杯歌短調。相送欲沾巾。

に比較して、前聯は全く同じで、七八兩句は、わづか二字の差異あるだけである。しかし、この詩では、起句に同患とあるから、前後兩聯が、二人に共通なる境涯を述べたことになつて、感愴は、愈よ深い。その孰れが先後なるかは分からぬが、これに據つて、陳則は、かつて、校書に官したことが推定される。何は兎もあれ、頷聯だけは面白いが、その前後の之に副はぬことは、兩首ともに同じである。

酬余左司

門巷接垂楊。同鄕忘異鄕。門巷、垂楊に接し、同鄕、異鄕を忘る。
兒親欣見熟。僕立厭言長。兒は親んで見て熟するを欣び、僕立つて言の長きを厭ふ。
讀借風牀簡。炊分雨碓粱。讀は風牀の簡を借り、炊は雨碓の粱を分つ。
亂來成久別。能不爲情傷。亂來、久別を成す、能く情の爲に傷まざらむや。

【字解】【一】見熟　顔を見知る。【二】風牀簡　風の吹き度る吟牀に在る書卷。【三】雨碓粱　雨中石臼で搗いた米。【四】能不爲情傷　前にも見えたが、矢張、反語に讀まぬと意味が通じない。

【圖義】詩で見ると、余左司は、作者の鄰家に住して居たが、その内に、他處に移つたものと見える。この時、作者は何處に居たか分からぬが、異鄕とあるから、蘇州ではなく、卽ち北郭であつたらうと思はれる。余左司は卽ち余堯臣、前に卷三、春日懷二十友一の詩の第一に出て居る。

【詩意】門巷の間、垂楊が相接し、君と鄰を同じうして居る處から、異鄕に在ることを忘れて居る。君の家の子供は、顔を見知つて、馴染になつたことを喜び、下僕は、毎毎立ち話をするが、その長いのが厭になる位。書を讀む時は、君の風牀に載せてある簡冊を借り、飯を炊ぐ折は、雨中石臼で搗いた米を分けて貰つた位。しかし、爭亂以來、別離すでに久しく、いかで情を傷ましめざるべき、まことに懷かしさに堪へぬ次第である。

宿道王蘭若

借榻到僧扉。雖安未是歸。榻を借りて僧扉に到る、安しと雖も、未だ是れ歸らず。
暝禽愁雪意。夜篠助風威。暝禽、雪意を愁へ、夜篠、風威を助く。

燈盡思燃帶。衾寒起覆衣。　燈盡きて帶を燃やさむことを思ひ、衾寒くして起つて衣を覆ふ。
不知孤棹去。明夕更何依。　知らず孤棹去つて、明夕更に何にか依らむ。

【字解】【一】夜篠　篠は竹藪。【二】思燃帶　前に卷七、早發三土橋一の詩に見えて居たが、唐書嘉甫無逸傳に「無逸、かつて部を按じて民家に宿し、燈炷盡く、主人將に嗾いで逃めむとす、無逸、佩刀を抽き、帶を斷つて炷となす、その廉介、かくの如し」とある。

【題義】釋氏要覽に「梵言阿蘭若、唐言無諍、一に云ふ閒靜の處」とあつて、蘭若は卽ち寺、この詩は、道王寺に宿して作つたのである。寺の所在は不明であるが、或は吳越游中の事かと思はれる。

【詩意】僧扉を敲いて、一宿を許され、まことに安らかではあるが、家に歸つたのでないから、何となく落ち付かぬ處がある。暮禽は、雪もよひの寒さを愁へて、時時騷ぐことがあるし、夜に入ると、竹藪がざわざわと鳴つて、風威を助ける樣に聞こえる。やがて、燈火が盡きたから、帶をほごして燈心にしやうと思ひ、夜具が薄くして、寒い處から、脫ぎ棄てた衣を其上に掩ひかぶせた。今宵は、これで善いが、孤棹一たび去つて、明夕は何處に宿するか、旅は、まことに寂しいものである。

【餘論】前聯は、冬夜淒寒の神理を刻劃して、極めて新警である。

與詩客七人會飲余司馬園亭

詩客七人と余司馬の園亭に會飲す

情與酒兼和。園亭駐晩珂。　情は酒と兼ねて和らぎ、園亭、晩珂を駐む。
家同榆社近。人比竹林多。　家は同じく榆社に近く、人は竹林に比して多し。
短景催長宴。醒吟雜醉歌。　短景、長宴を催し、醒吟、醉歌に雜る。
亂離歡易失。無厭數相過。　亂離、歡、失ひ易し、厭ふ無かれ、數ば相過ぐるを。

【字解】【一】晩珂　通俗文に「物の飾を珂といふ」とあつて、馬のくつわ、從つて馬の轡に用ひて居る。【二】榆社　史記封禪書に「高祖、はじめて起るとき、豐の枌榆社に禱る。天下、すでに定まるや、御史に敕し、豐をして蠲んで枌榆の社を治めしめ、常に四時を以てし、春は羊豚を以て之を祀る」とあつて、その注に「社は豐の東北に在り、或は曰く、枌榆は鄉名、高祖の里社」とある。つまり鎭守の社。【三】竹林　竹林は七人であるが、この會は、主人と青邱とを加へて九人であるから、竹林よりも多いといつたのである。【四】短景　日の短いこと。

【題義】題下の原注に「居、皆北郭に在り」とあつて、この詩客七人等は、例の北郭十友の人人であらう。

【詩意】日暮、馬を駐め、余司馬の園亭を音なうて會飲をなし、賓主打解けて、情は酒と共に增して和氣藹然として居る。この連中は、いづれも北郭に住んで居て、家は鎭守の社に近く、參同した人の數は、竹林に比して稍や多い。日の短い頃で、長坐の會飲はせき立てられる樣であるが、醒めて吟ずるものと醉うて歌ふものとが、一處に混同して居る。刻下亂離の世の中で、歡會は、兎角失ひ易い

から、折あらば、數ば會を催すが善いので、格別厭だと思ふ人もあるまい。

登西澗小閣

西澗の小閣に登る

層檻構雲牢。清寒灑客袍。
石稜添澗險。閣勢借峰高。
風竹驚棲鳥。霜藤縋飲猱。
欲題因境勝。不敢易揮毫。

【字解】【一】層檻　層は二階三階と重るをいふ、檻は欄干。【二】構雲牢　雲の上に構へて丈夫である、杜甫の詩に棧雲欄干峻、梯石結構牢とある。【三】石稜　石の稜角。【四】縋飲猱　水を飲む猿が縋り付く。

【題義】西澗は、蘇州郭外の西に在るかと思はれる。

【詩意】幾層にもなつて居る欄干は、雲の上に在つて、結構牢固、これに倚ると、清寒の氣が客袍に注ぐ樣である。石は稜角を磨し、澗をして愈よ險ならしめ、閣は峰の上に在るから、一きは高く覺える。風に戰ぐ竹は、林中の宿鳥を驚かしめ、霜を帶びたる藤蔓は、水を飲む猿の縋るに便する。ここに來て詩を題する積りであつたが、境地の勝れたるに因り、うかと筆を揮ひ兼ねて、ひたすら苦吟して居る。

【餘論】前聯は、洗鍊の餘に成つたので、添の字、借の字は、ともに苦心の跡が見える。

江上答徐卿見贈

江上、徐卿の贈らるるに答ふ

煙樹近松陵。扁舟晩獨乘。
江黃連渚霧。野白滿田氷。
往事愁人問。虛名畏客稱。
無才任蕭散。敢望鶴書徵。

【字解】【一】任蕭散　蕭條樗散の境涯に耐へる、つまり不遇を耐へ通す。【二】鶴書　天子よりの詔敕。

【題義】說明に及ばぬ。但し、徐卿は例の徐賁である。

【詩意】煙れる樹色は、松陵に近く、日暮、ひとり扁舟に乘じて、ここまで來た。眺めやれば、霧は洲渚に連つて、江水黃ばみ、氷は田の面一ぱいに張りつめて、野は白く見える。往事淒涼として、人に問はるることを愁へ、虛名を客に稱せられることは、物とはなしに恥かしい。わが才は、もとよ

り不過を耐へ通すことが出來ないので、天子より鶴書を以て徵し出さるることは、決して期待して居らぬ。

除夕客中與家兄守歲

除夕客中、家兄と歲を守る

雨雪遠村中。猿鳴旅館空。
守(一)爐銷夜漏。停(二)燭待春風。
有恨能催老。無文解送(三)窮。
却憐今夜酒。還與弟兄同。

【字解】【一】守爐　圍爐裏の側に坐して居る、范成大に除夕地爐書事の詩がある。【二】停燭　燈火を消す。【三】送窮　韓愈に送窮文がある。

【題義】説明に及ばぬ。守歲とは、除夜に長く起きて居ること。

【詩意】遠い村里には雪の降る模樣、猿が鳴いて、旅館には外に人も居ない。圍爐裏の側に坐して、水時計の聞こえぬ頃ともなり、燈火を銷して、明朝、春風の吹き來るを待つて居る。客恨自ら堪へねば、自然老を催し、送窮文を書き得ないのは、まことに殘念である。さはれ、今夜、弟兄二人同じく酒を酌んだのは、せめてもの心遣りである。

南溪晚歸

流水出(一)雲根。遙通古寺門。
山深僧少俗。人靜市如村。
馬渡知(二)長淺。魚行見不渾。
多情溪上月。歸路照黃昏。

【字解】【一】雲根　巖石を云ふ。【二】長淺　いつても淺い。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】流水は淙淙として、巖石の間より出で、そして、古寺の門に通じて居る。山は深くして、住僧も自然俗を脫し、人は靜にして、市とはいへ、このあたりは村の樣である。馬の渡るのは、いつでも水の淺い其處であるし、魚が通つても、その跡は濁らない。溪上の月は、心ありげに、黃昏の頃、わが歸路を照らして居る。

【餘論】前聯は、あつさりして居るが、棄て難き佳聯である。

丁孝廉惠冠巾

知試山人服。冠巾遠寄重。
佳名因子夏。舊製學林宗。
裹映秋吟鬢。敧宜晩醉容。
朝簪今已解。期上華陽峰。

【字解】【一】山人服 無官隠士の服。【二】寄重 寄贈される。【三】子夏 杜欽の字、小冠を常用したといふので、前に卷九、洽冠梁生の詩中に注して置いた。【四】林宗 郭泰の字、後漢書の本傳に「泰、かつて陳梁に於て雨に遇ひ、巾の一角を折り、時人、乃ち故らに巾の一角を折り、以て林宗巾となす」とある。【五】朝簪 朝冠を載く時に、簪を用ひて之を留める、羊士諤の詩に「應喜殷朝簪」とある。【六】華陽峰 江寧府志に「茅山中、華陽南洞・華陽西洞の諸勝あり」と見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、冠と巾とは二物である。

【詩意】君は、予が官を罷めて、試みに山人の服を著くることを知り、態態遠くから冠巾を寄贈せられた。元來、小冠の名は、むかし杜子夏に始まり、一角を折つた舊製は、郭林宗を學んだものである。この巾で頭を裹むと、秋に逢うて亂れたる詩鬢とうつりが善いし、その冠を敧てた樣は、日暮、酒に醉つた時の身ぶりである。予は、すでに朝簪を解き去り、これから仙を尋ぬる爲に、華陽峰に登る積りであるから、この冠巾は、まことに相適して居る。

丁孝廉、冠巾を惠まる

山人の服を試むるを知つて、冠巾、遠く寄重。
佳名、子夏に因り、舊製、林宗を學ぶ。
裹んでは秋吟の鬢に映じ、敧てては晩酔の容に宜し。
朝簪、今すでに解き、期す華陽峰に上るを。

西園閒興二首

看到竹過鄰。園林獨臥身。
鳥聲閒似野。人意倦知春。
殘雨驚池樹。斜陽照隙塵。
如何堂上客。不及燕來頻。

【字解】【一】竹過鄰 竹が伸びて鄰家に侵入する。【二】隙塵 戸などの隙間に見える塵埃。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】園林に獨臥する身は、何も知らずに居たが、竹の伸びて鄰家に侵入するを見て、晩春の候、生物の發育盛なるに驚いた。鳥の聲は、靜にして、野外に在るが如く、人の心の倦み勝ちなるも、流石に春である。殘雨は、一しきり、颯として池邊の樹に降りそそぎ、斜陽光明かにして、戸の隙間のほこりも見える。如何なれば、堂上の來客は、燕子の頻繁に來るに及ばず、われを音なふことの稀なのであるか。

西園閒興 二首

看て到る、竹の鄰を過ぐるを、園林獨臥の身。
鳥聲、閒、野に似たり、人意、倦んで春を知る。
殘雨、池樹を驚かし、斜陽、隙塵を照らす。
如何か、堂上の客、燕の來る頻りなるに及ばず。

當路闕追攀。端居自掩關。
聽鐘知近寺。看畫憶登山。
曉櫛風林下。宵吟雨閣間。
天應憐我懶。獨與少年閒。

【字解】【一】當路　朝廷の顯官。【二】追攀　訪問する。【三】與少年閒　少年の如く暢氣である。

【詩意】何分、當路の顯官輩を訪問するのも億劫である處から、獨り門を閉ぢ、謹愼して穩臥して居る。鐘を聞いては、この地の寺に近きことを知り、畫を看ては、山に登りたいと思ふ。曉には、風吹き度る林下に於て髮を梳り、夜は、雨降り注ぐ閣中に於て詩を吟じて居る。わが疏懶にして、丸で少年の如く暢氣なることは、天も憫笑して居るであらう。

送謝恭

涼風起江海。萬樹盡秋聲。
搖落豈堪別。躊躇空復情。
帆過京口渡。砧響石頭城。

謝恭を送る

涼風、江海に起り、萬樹、盡く秋聲。
搖落、豈に別るるに堪へむや、躊躇、空しく復た情。
帆は過ぐ京口の渡、砧は響く石頭城。

【字解】【一】搖落　木葉の落ちること。【二】京口渡　揚子江の渡しで、南京の對岸に在る。【三】石頭城　南京の西に在る、前に卷十一、登雨花臺の詩中に詳述して置いた。【四】高堂　父母の敬稱。

【題義】姓譜に「謝恭、字は元功、徽之の弟、詩を能くす、著すところ、蕙庭集あり」と見ゆ。これは、謝恭の鄉に歸るを送つたのである。

【詩意】涼風颯として江海の間に起り、それにつれて、あらゆる木木は、秋聲を發して居る。この落葉の頃に當りて、別をなすのは、まことに辛く、踟躕して、空しく情に勝へぬ。やがて、君は、舟に帆かけて京口の渡を過ぐべく、今しも、砧うつ聲は、石頭城に響いて居る。君の御兩親は、白髮頭になつて、しきりに待つて居られるに相違ないから、旅には出たものの、早く歸つて御機嫌を伺ふのが至當であらう。

【餘論】起首、頗る力あつて、破題は殊に妙である。

爲客歸宜早。高堂白髮生。
客となつて、歸る、宜しく早かるべし、高堂、白髮生ず。

【字解】【一】京口渡　揚子江の渡しで、南京の對岸に在る。【二】石頭城　南京の西に在る、前に卷十一、登雨花臺の詩中に詳述して置いた。【三】高堂　父母の敬稱。

【詩意】涼風颯として江海の間に起り、それにつれて、あらゆる木木は、秋聲を發して居る。この落葉の頃に當りて、別をなすのは、まことに辛く、踟躕して、空しく情に勝へぬ。やがて、君は、舟に帆かけて京口の渡を過ぐべく、今しも、砧うつ聲は、石頭城に響いて居る。君の御兩親は、白髮頭になつて、しきりに待つて居られるに相違ないから、旅には出たものの、早く歸つて御機嫌を伺ふのが至當であらう。

【餘論】起首、頗る力あつて、破題は殊に妙である。

步至東皐

斜日半川明。幽人每獨行。

步して東皐に至る

斜日、半川明かに、幽人、每に獨行。

愁懐逢(一)暮慘。詩意入秋清。愁懐、暮に逢うて慘、詩意、秋に入つて清し。
鳥啄枯(二)楊碎。蟲懸落葉輕。鳥は枯楊を啄んで碎け、蟲は落葉を懸けて輕し。
如何得歸後。猶似客中情。如何か歸るを得たるの後、猶ほ客中の情に似たるを。

【字解】【一】逢暮慘　日暮になると慘然として愈よ甚しいといふ意。【二】枯楊　枯れた柳。

【題義】陶淵明の歸去來辭に登東皐而舒嘯とあり、王績の詩にも東皐薄暮望とある。皐の本義は澤地。この詩は、城外の東なる澤地に散歩して作つたのである。

【詩意】夕日の半川に明かなる頃、幽人は、毎毎、ひとりで出かける。唯ださへ愁に惱む心は、日暮になると、慘然として愈よ堪へず、詩想は、秋に成つてから、自然清く成つた。鳥は、枯れた楊柳の樹を啄んで碎かしめ、蜘蛛は、絲に落葉を懸けて、輕くぶらぶらして居る。如何なれば、すでに故郷に還るを得たる後、兎角落ち付き兼ねて、客中の樣な思を爲すことであるか。

【餘論】前聯は、幽人の神思を巧に剖析したので、一種奇妙の趣がある。

郊墅雜賦、十六首

江水舍西東。鄰家是釣翁。江水、舍の西東、鄰家は是れ釣翁。

路痕深草沒。井脈暗潮通。路痕、深草沒し、井脈、暗潮通ず。
籬隔蔬邊雨。門開竹下風。籬は隔つ蔬邊の雨、門は開く竹下の風。
不因時賣畚。何事入城中。時に畚を賣るに因らずんば、何事か城中に入らむ。

【字解】【一】路痕　通行の路のあつた跡。【二】井脈　井中の水脈、潯陽記に「孫權、自ら井地を標して之を掘り、正に故井を得たり。井、甚だ深く、大江中、風浪あるとき、この井、輒ち動く」とある。【三】賣畚　畚はもつこ、土を運ぶもの。晉書に「王恬、少にして、畚を鬻ぐを以て業と爲す。かつて、老人あり、貴く其畚を買うて直なし。恬、その家に至る、深山に、一老父、胡牀に踞して坐するを見る。十倍にして、畚の直を償ひ、人を遣して之を送らしむ。恬、出でて顧視すれば、乃ち當高山なり」とある。

【題義】郊墅は郊外の別墅。これは、多分、作者が青邱に居た頃の作で、見聞するところを手當り次第に賦詠したから、雜賦と題したのであらう。

【詩意】江水は、我が家の西東を繞つて流れ、鄰に居るのは、釣を業とする老翁である。村中の路は、わづかに跡を留めて、深草これを沒し、井中の水脈は、暗潮と通じて居る。籬の外は菜畑で、折しも、雨降りそそぎ、門は竹の下に開いて居て、風が絶えず戰いで居る。時時、畚を賣る爲に、城中に入ることもあるが、さうでなければ、決して、かの紅塵の中には往かぬ積りである。

【餘論】青邱ともあらうものが、手內職に、畚を造つて賣るなどいふことは、萬萬無いことで、これは、一寸假借したに過ぎぬ。

此鄉堪避地。亂後戶翻增。
俗美嫌欺客。年豐愛施僧。
帶星耕處軛。照雪紡時燈。
且作求田計。元龍豈我能。

この郷、地を避くるに堪へたり、亂後、戸、翻つて増す。
俗は美にして客を欺くを嫌ひ、年は豐にして僧に施すを愛す。
星を帶ぶ耕處の軛、雪を照らす紡時の燈。
且つ求田の計を作す、元龍、豈に我能くせむや。

【字解】【一】俗美　人氣の善いこと。【二】年豐　豐年で收穫が多かつた。【三】耕處軛　軛はくびき、牛馬の頸に駕するもの。【四】求田　三國志に「許汜、劉備と語つて曰く、汜、陳元龍を見る、自ら大牀に上り、客は下牀に臥す。備曰く、天下大に亂る、君、須らく國を憂へ、家を忘るべし、乃ち田を求め、舍を問ひ、言采るべきなし。もし、我、百尺樓に臥せば、君を地下に坐せしめむ、奚ぞ但だ上下牀の間のみならむや」とある。【五】元龍　陳登の字。

【詩意】ここは亂を避くるに最も善い地であつて、その爲に、亂後でも、他とは反對に、戸數が夥しく增加して來た。元來、人氣が善くて、外客を欺くことを嫌ひ、おまけに、豐年であつた爲に、好んで坊主にまで布施をする。尤も住民も勉强するので、耕す時には、星を帶びて野らに出て、馬牛を車につけ、絲を紡ぐ燈火は、夜おそくまで、雪に映つて見える。予には、とても、陳元龍の眞似は出來ぬから、世の人なみに、矢張、田地でも買ひ殖やす計をして居るのである。

幽事向誰誇。孤吟對晚沙。

幽事、誰に向つてか誇らむ、孤吟、晚沙に對す。

浣衣江動月。繫艇岸垂花。
行蟻如知路。歸鳧自識家。
一尊茅屋底。隨意答春華。

衣を浣へば、江、月を動かし、艇を繫げば、岸、花を垂る。
行蟻、路を知るが如く、歸鳧、自ら家を識る。
一尊、茅屋の底、隨意に春華に答ふ。

【字解】【一】幽事　清幽なる事がら。【二】晚沙　沙は水邊の沙地。【三】歸鳧　歸り行く家鴨。【四】春華　春景色。

【詩意】江村清幽の事どもは、誰に向つて誇るべきか、唯だわれ獨り知るのみで、現に孤吟して、日暮に川の方を眺めて居る。衣を浣へば、漣波が起つて、江心に月を動かし、小舟を繫がうとすると、岸には、花が垂れて居て、何處に致さうかと思ひ惑ふばかり。忙しげに地を這ふ蟻どもは、路を知る樣でもあるし、歸り行く家鴨は、自然、その家を識別して居る。身は茅屋の中に坐して、一樽を開き、春景色を空しうさせじと、ひとりで興がつて居る。

【餘論】後聯は、春江日暮の景色を寫して、詩中に畫ある心持がする。

春泥桑下路。孤策自扶行。
身賤知農事。心閒見物情。
鳥鳴風欲起。牛飯月初生。

春泥、桑下の路、孤策、自ら扶けて行く。
身賤しくして農事を知り、心閒にして物情を見る。
鳥は鳴いて、風起らむと欲す、牛は飯して月はじめて生ず。

漸喜無人識。何煩易姓名。　漸く喜ぶ人の識るなきを、何ぞ姓名を易ふるを煩はさむ。

【字解】〔一〕孤筇　筇は杖。〔二〕牛飯　牛が飼料を食ふ。

【詩意】雨後、桑の下かげの路は、まだぬかるみで、乾かないにも拘はらず、ひとり杖に扶けられて、散歩をする。元來、この身、貧賤なる儘、自然、農事を知つて居るし、ここに居ると、心靜かなるに因つて、萬物の眞情を觀察することが出來る。朝に鳥が鳴くと、風起らむとし、夕に牛が飼ばを食ひ畢る頃には、月がそろそろ上り初める。人に識別されることもなく、尋常百姓の間に交つて居ることの出來るのは、まことに喜ぶべく、特に姓名を改めて韜晦する必要もない。

移家到渚濱。沙鳥便相親。　家を移して渚濱に至り、沙鳥、便ち相親む。

地僻偏容懶。村荒却稱貧。　地は僻にして偏に懶を容れ、村は荒れて却つて貧と稱す。

犬隨春饁女。雞喚曉耕人。　犬は隨ふ春饁の女、雞は喚ぶ曉耕の人。

願得無愁事。閒眠老此身。　願はくは愁事なく、閒眠、この身を老ゆるを得む。

【字解】〔一〕渚濱　江岸。〔二〕沙鳥　水邊を飛ぶ鳥。〔三〕春饁　饁は食を饋る、卽ち辨當を運ぶ。〔四〕雞喚　喚は呼び醒ます。

【詩意】わが家を江濱に移し、そこで、自然、水禽と相親む樣になつた。地は幽僻にして、疏懶の此身を容るるに適し、村が荒廢して居る處から、われも、貧民と稱して居る。春の野らに女が辨當を運ぶと、犬が之に隨つて行くし、朝早く耕作に出る人をば、雞が呼び起して與れる。ここに在つて、格別心配な事もなく、暢氣に橫になつた儘、年を取りたいものである。

紛紛謝人役。寂寂戀吾居。　紛紛として人役を謝し、寂寂として吾が居を戀ふ。

細雨春雩後。斜陽社飲餘。　細雨春雩の後、斜陽社飲の餘。

岸花飛趁蝶。池葉墮驚魚。　岸花飛んで蝶を趁はしめ、池葉墮ちて魚を驚かす。

好了公家事。休令吏到廬。　好し、公家の事を了し、吏をして廬に到らしむるを休めよ。

【字解】〔一〕人役　世間並の仕ぐさ、趨走送迎の事ども云ふ。〔二〕春雩　雩は雨乞ひ。〔三〕社飲　鎭守の祭禮に就いて會飲すること。〔四〕好了公家事　官に對する責任を果たす、主として納稅の事を云ふ。

【詩意】世間並の紛紛たる趨走送迎の事は、すつかり御免蒙り、寂寂たる我が幽居を慕うて、ここに移つて來た。春の雨乞は、幸に效果があつて、細雨しとしとと降り、鎭守の祭の宴會は、夕日の傾く頃にも及んだ。岸邊の花が散ると、蝶は之を追うて飛び、池上の葉が一ひら落ちると、魚は驚いて水

底に逃げ入る。平生見るところは、ざつとこんなもので、流石に田舎は暢氣である。そこで、官に差し出す納税など、滞りなく畢つて、税吏などが此廬に來ぬ樣にしたいと、それのみを念じて居る。

路迂橋斷處。門靜犢眠時。
孤墅藏羣柳。諸田灌一陂。
僮閒春作少。婦懶午炊遲。
誰道花源好。還令太守知。

路は迂なり橋斷ゆる處、門は靜かなり犢眠るの時。
孤墅、羣柳に藏れ、諸田、一陂に灌せらる。
僮は閒にして春作少く、婦は懶にして午炊遲し。
誰か道ふ、花源好く、還た太守をして知らしむと。

【字解】【一】路迂　まはり路なする。【二】犢眠　犢は子牛。【三】一陂　陂は堤であるが、その堤で圍まれた用水池をも指す。【四】春作　春の野良仕事。【五】花源　桃花源の略。【六】太守知　桃花源に往つた漁人が歸り來し後、ありしことを太守に報知し、仍つて太守が人を遣したが、路に迷うて往かれなかつたといふことが、陶淵明の桃花源記に見えて居る。

【詩意】橋が落ちたから、まはり路をせねばならぬこととなり、門は靜にして、子牛が其處に眠つて居る。ひとつ家は、羣がる柳の中に隱れ、多くの田は、一個處の用水池から灌漑される。家僕は、閒暇であつて、春の野良仕事の少きを喜び、妻君は疏懶で、なかなか起きないから、眞晝に飯を炊ぐことも自然遲くなる。ここは、桃花源に似て、浮世離れをして居る處であつて、まことに好いから、太守などに知らして貰ひたくないと思つて居る。

【餘論】前聯は、田舍の好畫圖と評すべきものである。

虛閣近鳴湍。應宜把一竿。
雨傷春麥爛。風折晚蒲乾。
抱甕臨江汲。攜書入寺看。
自慙何獨幸。世難此偸安。

虛閣、鳴湍に近く、應に一竿を把るに宜しかるべし。
雨は春麥を傷けて爛れしめ、風は晚蒲を折つて乾かしむ。
甕を抱いて、江に臨んで汲み、書を攜へて寺に入つて看る。
自ら慙づ、何ぞ獨り幸なる、世難、ここに偸安。

【字解】【一】虛閣　人なき小閣。【二】鳴湍　湍は早瀨。【三】抱甕　莊子に「子貢、漢陰を過ぎ、一丈人を見る。方に圃畦を爲らむとし、隧を鑿つて井に入り、甕を抱いて出でて灌す。子貢曰く、ここに械あり、一日に百畝を灌す、夫子爲すを欲せざるか。圃を爲るもの曰く、械事あるものは必ず機心あり、吾、爲さざるなり」とある。【四】世難　爭亂の世。【五】偸安　ここに隱れて安きを偸む。

【詩意】小閣は、聲を立てて鳴る早瀨に近くして、人もなく、一竿を把つて釣を垂れるには、持つて來いといふ處。雨が餘り降つた爲に、春の麥は損害されて腐り、風は、遲くまで殘つて居た蒲の穗を折つて乾かして仕舞つた。畑に水を灌ぐ爲には、甕を抱いて江に汲み、時たま書卷を攜へ、寺の閒靜な處で、閱讀することがある。ここに世の多難に遇ひながら、われ獨り此に來て、安らかに暮らして

行けるのは、まことに有り難いことである。

亂渚交交白。平蕪漫漫青。亂渚、交交として白く、平蕪、漫漫として青し。
賣薪沙店遠。祈穀水祠靈。薪を賣つて沙店遠く、穀を祈つて水祠靈なり。
密雨浸蓑重。微風過網腥。密雨、蓑を浸して重く、微風、網を過ぎて腥し。
江邊多酒伴。春去不曾醒。江邊に酒伴多く、春去るも、かつて醒めず。

【字解】【一】亂渚　亂は風曲出入甚しきを云ふ。【二】交交　交錯せる貌。【三】平蕪　草の生ひ茂れる平郊。【四】漫漫　ひろくして際涯なき貌。【五】沙店　水邊の茅店。【六】酒伴　酒飲み仲間。

【詩意】江の汀岸は、屈曲して、波光白く、岸上の平郊は、漫漫として、草が青い。薪を賣る田舍店は遠く、水邊の社は、五穀の豐作を祈ると靈驗がある。こまかな雨は、蓑に浸み透つて重く、微風が乾してある網を吹き過ぎると、腥い樣な氣がする。この江邊には、酒飲み仲間が多く居る爲に、春が去つても、依然飲み續けて、かつて醒めたことが無い。

入夜潮侵戶。經秋雨壞垣。夜に入つて、潮は戶を侵し、秋を經て、雨は垣を壞る。

里人淳少訟。田父醉多言。里人淳にして訟少く、田夫醉うて言多し。
稻蟹燈前聚。莎蟲機下喧。稻蟹、燈前に聚まり、莎蟲、機下に喧し。
自應耽野趣。不是戀鄉園。自ら應に野趣に耽るべく、これ鄉園を戀ふるならず。

【字解】【一】淳少訟　淳樸であるから訴訟沙汰が少い。【二】稻蟹　蟹は稻の熟する頃が味も善く、又一番多く捕れるので、これを稻蟹と稱する。なほ、その詳は、前に卷十二、賦三得蟹二送三人之官の詩中に述べて置いた。【三】莎蟲　きりぎりす、詩經に六月莎雞振羽とある。

【詩意】夜になると、潮の聲が響いて、戶を侵すが如く、秋を經て、雨頻りに至りし爲に、垣根が壞れて仕舞つた。一體、この村の人は、淳樸であるから、訴訟沙汰は極めて少く、田舍老爺は、親切であるが、醉ふと兎角話がくどくて困まる。秋になると、蟹が遠慮なく燈前に這ひ聚まり、きりぎりすは、機の下で、かしましくすだく。予は、野趣に耽つて之を愛すること甚しき爲めでもあらう、最早、鄉園を戀しいとも思はない樣に成つた。

欲沽嗟市遠。煙火隔江波。沽はむと欲して、市の遠きを嗟す、煙火、江波を隔つ。
客到寒齋少。人歸晚渡多。客は寒齋に到ること少く、人は晚渡に歸ること多し。

汙書燈燼落。驚枕艣聲過。書を汙して燈燼落ち、枕を驚かして艣聲過ぐ。
豈敢愁荒寂。時危免負戈。豈に敢て荒寂を愁へむや、時危くして戈を負ふを免る。

【字解】【一】欲沽　無論酒を買ふこと。【二】燈燼　燈心の燼えかす。【三】荒寂　村家の景色の寂しきを云ふ。【四】負戈　戈を擔いで從軍する。

【詩意】酒を買はうと思ふが、市の遠いのには閉口で、煙火は江波を隔てて、即ち向ふ岸である。この客な書齋を音なふ客は、極めて少いが、日暮、渡船場に赴く人は、なかなか多い。燈火の燃え屑が落ちて、書物に斑點を付けることもあるし、艣聲近く過ぎて、眞夜中に枕を驚かすこともある。村里の荒れはてて寂しい位は、何でもないので、ここに居ればこそ、危時に際して、徵集を免れ、戈を擔がずに濟んだ次第である。

野色迴蒼蒼。開門葉滿塘。野色迴にして蒼蒼たり、門を開けば、葉、塘に滿つ。
僧來雙屐雨。漁臥一船霜。僧は來る雙屐の雨、漁は臥す一船の霜。
靜裏修香傳。閒中錄酒方。靜裏、香傳を修し、閒中、酒方を錄す。
平生當世意。到此坐成忘。平生當世の意、ここに到つて坐に忘を成す。

【字解】【一】蒼蒼　ほの白き貌。【二】葉滿塘　葉は落葉。【三】香傳　宋の洪芻は、香譜を作り、葉廷珪は名香譜を著はした。【四】酒方　酒の釀造法。【五】當世意　當世を救濟せむとする大志。

【詩意】秋、すでに盡きて、一帶の野色、ほの白く、門を開いて、一寸出て見ると、落葉は隄に一ぱいである。僧は足駄を穿いて、雨中に來り、漁人は、霜降る夜、舟の上で寢て居る。身は閒靜なるまま、香の譜を編成したり、酒の釀造法を書き留めたりして居る。むかしは、人竝に獨力で當世を救濟しやうといふ樣な大志もあつたが、かうなると、丸で忘れたるが如く、われながら腑甲斐なきことである。

紅樹南江近。青山北郭遙。紅樹、南江近く、青山、北郭遙なり。
江清目渺渺。林冷髮蕭蕭。江は清くして目渺渺、林冷かにして髮蕭蕭。
食鱠知晨釣。聽歌識暮樵。鱠を食うて晨釣を知り、歌を聽いて暮樵を識る。
尋常送歸客。不過水西樓。尋常、歸客を送るも、水西の樓を過ぎず。

【字解】【一】暮樵　日暮に歸つて來る樵夫。【二】尋常　普通の場合。

【詩意】紅葉せる木の岸に連れる南江は近けれども、青山の麓なる北郭は、餘程遠い。江水は清くし

て、目も迴かに、林は冷かにして、そこに往くと、髪がそそけ立つ位。鮪を食つて、これは、今朝釣つた魚だといふことを知り、歌を聽くと、その樵夫は、顏を知つて居るものであつた。普通の場合には、客の歸るを送つても、水西の樓より先に往くことはない。

何處可徘徊。林間共水隈。　何の處か徘徊すべき、林間と水隈と。
夜歸家犬識。春睡野禽催。　夜歸、家犬識り、春睡、野禽催す。
有地唯栽藥。無村不見梅。　地あり、唯だ藥を栽る、村として、梅を見ざるはなし。
興來慙獨飲。時喚老農陪。　興來つて獨り飲むを慙ぢ、時に老農を喚んで陪せしむ。

【字解】【一】徘徊　散歩。【二】水隈　水邊に同じ。【三】慙獨飲　慙は勿體ないと思ふ。

【詩意】散歩をするには、何處が善いかといへば、林間と水邊とである。夜歸つて來ると、飼犬は、暗がりでも、われを見知つて居るし、春のどけき頃、野禽の聲を聞いて居ると、自然ねむたくなる。あき地があれば、藥草を栽る、このあたり、村として、梅の無い處はない。興來りし時、ひとりで飲むのは、勿體ないから、時時、老農を呼んで來て、御相伴をさせる。

狂多愛出游。日日問江頭。　狂多くして出游を愛し、日日、江頭を問ふ。
小草皆春意。遙山自晚愁。　小草、皆春意、遙山、自ら晚愁。
酒中時有得。物外復何求。　酒中、時に得るあり、物外、復た何をか求めむ。
不詠騷人調。蘼蕪任滿洲。　騷人の調を詠せず、蘼蕪、洲に滿つるに任かす。

【字解】【一】狂多　うかれる氣味。【二】物外　萬物の外に此身を置く。【三】騷人　騷は離騷、もと屈原が作つたもの。漢代以後は、騷と賦とを區別し、前者は主觀的感想、後者は客觀的描寫を旨とする樣になつた。そこで、騷人といへば、屈原一流の主觀的詩人といふ義である。【四】蘼蕪　草の茂み。

【詩意】うかれ氣味の場合が多く、好んで出游を爲し、日日江頭に往つて見る。名もなき小草も、皆春意を含んで咲き出でむとし、遠くの山山は、日暮、愁を帶びた樣である。酒を飲んで居る間、ふと思ひ付くこともあるし、身を物外に置けば、慾望などは絶無である。しかし、屈原一流の騷人の調を以て賦詠することを爲さざるに因り、草の茂みの洲上に滿つるに任かせる外はない。

【餘論】小草の二句は、和平冲澹、自然高尙の趣がある。

居似臨邛宅。耕非鄠杜田。　居は臨邛の宅に似たり、耕は鄠杜の田に非ず。

已償輸税米。未覓賣文錢。　すでに輸税の米を償ひ、未だ賣文の錢を覓めず。
把卷憐長日。看花愧少年。　卷を把つて長日を憐み、花を看て少年に愧づ。
翛然閉門處。楊柳桔槔邊。　翛然として門を閉づる處、楊柳、桔槔の邊。

【字解】【一】臨邛宅　漢書司馬相如傳に「文君、長卿に謂つて曰く、ただ偶に臨邛に如け、兄弟に從つて借貸するも、猶ほ以て生を爲すに足る。何ぞ自ら苦むこと、かくの如きに至らむ、と。相如、ともに偶に臨邛に之く」とある。【二】鄠杜　宋書地理志に「隃西路、鄠杜南山、土地膏沃」とあり、一統志に「鄠杜は、右扶風の縣名、今鳳翔に屬す」とあり、杜甫の詩に杜曲今有三桑麻田一とある。【三】輸税米　税として上納する米。【四】賣文錢　原稿料、陸龜蒙の詩に唯我有レ文無三賣處一、筆鋒銷盡亂池芝とある。【五】翛然　高靖の語。【六】桔槔　はね釣瓶。

【詩意】わが居るところは、古しへの司馬相如の臨邛の侘び住居に似て居るが、耕すところは、地味豐沃なる鄠杜あたりの田とは丸で違ふ。租税として上納する米は、すでに、差し出したが、まだ溜まつて居る原稿料を貰はないから、嚢中の寂寞たるを免れない。書卷を手にしては、日の長いのが至極宜しいが、花を看ては、老年の身で浮かれるのも似合はぬ處から、少年輩に對して、愧ぢ入るばかり。そこで、翛然高踏、ひとり門を閉ぢて蟄居するので、はね釣瓶の高く見える邊には、柳が茂つて居る。

【餘論】前聯は、一寸面白く、青邱當日の境涯も、これに因つて、略ぼ推測される。

采香徑

晨妝出采芳。零露溼紅裳。　晨妝、出でて芳を采れば、零露、紅裳を溼す。
種徙山中品。熏傳海外方。　種は山中の品を徙し、熏は海外の方を傳ふ。
抱筐歸蕙徑。焚鼎薦蘭堂。　筐を抱いて蕙徑に歸り、鼎に焚いて蘭堂に薦む。
未足娛君寢。西施體自香。　未だ君の寢を娛ますに足らず、西施、體、自ら香し。

【字解】【一】采芳　花を摘む。【二】紅裳　裳は下衣。【三】山中品　山中の珍品。【四】海外方　外國の奇方。【五】蕙徑　蕙は蘭の一種、一莖一花、卽ち山蘭。【六】蘭堂　木蘭等の香木で造つた堂宇。【七】體自香　飛燕外傳に「帝、燕燕に語つて曰く、后、異香ありと雖も、婕妤の體、自ら香ばしきに如かず」とあつて、それは、飛燕姉妹の事であるが、ここでは、西施に轉用したのである。

【題義】題下の原注に「香山の旁に在り、吳王、香を此に種ゑ、美人をして之を采らしむ」とある。

【詩意】吳宮の女どもは、曉早く妝をなし、ここに來て花を摘むが、まだ乾かぬ露は、定めて、香は卽ち香草であらう。紅裳を溼したであらう。その花は、山中の珍品を徙したもので、これを焚きしめることは、海外の奇方を傳へたのである。宮女どもは、摘んだ花を入れた箱を抱いて、山蘭の種ゑてある細路より歸り、やがて、それを精選し、鼎に焚く樣にして、御奥の蘭堂に差し出す。しかし、折角ながら、これでは、

君王の御寢を娛ましめるに足らないので、御側に居る西施は、その體、自然に香ばしく、もとより、花の匂ひ以上である。

響屧廊

廊虛應屧鳴。響細識腰輕。
誰道吳强國。唯消擧足傾。
苔間滅古跡。月下歇餘聲。
此夕人空聽。山僧曳履行。

【字解】【一】應屧　屧は下駄。【二】唯消　この消は用ふの義。

【題義】題下の原注に「靈巖山に在り、吳王、西子をして屧を此に步せしむ。寺中、今、圓照塔前の小斜廊を以て之と爲す」とある。靈巖山は卽ち館娃宮の在りしところ。この廊は、謂はゆる鶯ばりの廊といつた樣なものであつて、人が步くと、自然に鳴るので、吳王の當時は、隨分、珍らしいものであつたらうと思はれる。

【詩意】長廊は、格別の仕掛もなく、下駄で步くと、自然鳴り出し、その響の細きに因つて、步く人の腰の輕いことを識別する。誰か料らむ、吳は一大强國であつたのに、唯だ西子が足を擧げて、此を步いた爲に、傾けられて、滅亡し終らむとは。今は、西施の足跡も、苔の間に無くなり、月下には、餘聲だに無い。そして、山僧が履を曳いて步くのが聞こえるが、丸で似ても付かず、愈よ古しへをしのばしめるのである。

臨頓里、十首

聞說橋東地。高人舊隱居。
養生應有道。覓擧絕無書。
愛救黏絲蝶。嗔驚出水魚。
時尋戴顒宅。自駕短轅車。

【字解】【一】高人　陸龜蒙を指す。【二】覓擧　擧げらるるを覓む、登庸されむことを願ふ。【三】戴顒宅　前に卷十二、過戴居士宅の詩中に見えて居たが、南史に「顒は安道の子、宅は剡縣剡山の下に在り、乃ち都超千緡を捐てて築くところ。又徙つて吳下に居る、士人、ともに爲に室を築き、石を疊し、花を栽ゑ、徑を辟き、琴尊遺訪するもの、盡日なし」とある。【四】短轅車　卢記に「王丞相琺、曹夫人の性甚だ忌なるを以て、乃ち密に別館を營み、衆妾羅列す。曹氏、聞いて大に怒り、自ら出でて尋討す。王、亦た遽に駕を命じ、乃ち盧柄を以て牛を驅り、先づ至るを得たり。蔡司徒謨、聞いて之を笑ひ、ことさらに王公に詣り、謂つて曰く、

朝廷、公に九錫を加へむと欲す、と。王、信に然りと謂ひ、自ら讖志を紱す。蔡曰く、餘物を聞かず、唯だ短轅犢車、長柄麈尾あるを聞くのみ、と。王大に愧ぢ」とある。つまり、短轅車は、手輕で、且つ快走する車であらう。

【題義】題下の原注に「城東に在り、舊と吳中の勝地たり、陸魯望の居るところなり。皮陸、詩十首あり、これを詠ず。予、悉く其韻に次す。蓋し、昔賢の高致を彷彿せしむと云ふ」とある。それから、姑蘇志に「吳王の時、かつて東夷を遂うて軍を此に頓し、宴を設けて之を餉す、故に名づく。今臨頓橋あり」と見えて居る。この十首は、すべて陸龜蒙に次韻したので　つまり、龜蒙その人を追慕したるに出で、又時としては、その人に代つて作つた樣な口吻を爲して居る。

【詩意】臨頓橋の東は、むかし、陸龜蒙といふ高人の隱居した處である。この人は、生を養ふ爲に至道を得たらしく、又登庸を願うた書などは決して作つたことはなく、まことに、高操を以て知られた人であつた。蜘蛛の巢にからまつた蝶を見ると、好んで之を救ひ、水から出た魚を面白半分に驚かす人があると、腹を立てて、叱り飛ばした。それから、時たま、戴顒の如き知名の士を尋ねむとし、ひとりで、短い轅の車に乘つて出かけることがある。

應愛山齋好。秋風不捲茅。
鑿渠侵蟋穴。移樹帶禽巢。

應に山齋の好きを愛すべし、秋風、茅を捲かず。
渠を鑿つて、蟋穴を侵し、樹を移して、禽巢を帶ぶ。

人世眞浮梗。吾生豈繫匏。
不逢皮從事。誰結歲寒交。

人世、眞に浮梗、吾が生、豈に繫匏ならむや。
皮從事に逢はずんば、誰か歲寒の交を結ばむ。

【字解】【一】不捲茅　茅は屋根に葺いた茅。【二】蟋穴　蟋の穴。【三】浮梗　水に浮んで居た小枝、漂泊定めなきを云ふ、萬白の詩に「中生江海同三浮梗」とある。【四】繫匏　論語に「吾豈に匏瓜ならむや」とある、ぶら下つて居る匏、孫逖の詩に「時清豈繫匏」とある。【五】皮從事　一統志に「皮日休・羅隱・顏萼・吳融、皆龜蒙の益友たり、而して、皮隨の唱和、尤も多し」とあり、唐書皮日休傳に「咸通八年、進士に第す。崔璞、蘇に守とし、軍事判官に辟す」とある。【六】歲寒交　如何なる患難に遇ふも、決して變らぬ交際。

【詩意】陸龜蒙は、山齋の洵に宜しきを愛して居たので、それは、隨分堅固に出來て居て、秋風が吹き暴れても、屋根に葺いた茅を飛ばして仕舞ふ樣なことはなかつた。溝を鑿つては、自然、蟻の穴を侵害し、木を移植する時には、鳥の巢の付いた儘であつた。人の一代は、浮べる小枝の如くであるが、吾が生涯は、ぶら下つて居る匏の樣であつても、詰まらぬことと思ふ。幸に、皮從事に遇つたから善かつたものの、斯人に非ざれば、誰と共に歲寒の至交を結ばうか。

載酒攜山榼。安琴製石牀。
鳧眠皆傍母。蜂去自從王。

酒を載せて山榼を攜へ、琴を安んじて石牀を製す。
鳧は眠つて、皆、母に傍ひ、蜂は去つて、自ら王に從ふ。

穀雨收茶早。梅天曬藥忙。　穀雨、茶を收むる早く、梅天、藥を曬らすこと忙はし。
不扶靈壽杖。筋力老能强。　靈壽杖に扶けられず、筋力老いて能く强なり。

【字解】【一】山樏　粗製の酒樽。【二】從王　爾雅翼に「蜂は千百を以て數ふ、中に大なるものあり、王となす、羣蜂、これを舁し、その往くところに從かす」とある。【三】穀雨　寒食の後、夏の初の季節。【四】靈壽杖　廣志に「九眞、靈壽杖を出す」とあり、その註に「靈壽は木の名、竹に似て枝節あり、長さ八九尺、圍三四寸に過ぎざれども、自然杖制に合し、制治を須ひず」とある。

【詩意】酒を載せて游行する爲に、粗製の樽を攜へ、琴を安置する爲に、石の牀を造つた。家鴨の雛は、眠る時、皆母の傍に聚まり、蜂は飛び去つて、その王に從つて居る。穀雨の頃、大急ぎで茶の芽を摘み、入梅の中、折折晴れたるに乘じて、藥を乾す忙がしさ。しかし、こんな事ばかりして居るから、靈壽の杖の厄介にもならず、筋力は、老いても愈よ丈夫である。

自少圖名意。誰言世不知。　少より名を圖るの意、誰か言ふ、世知らずと。
僧求開寺記。客送買山資。　僧は求む開寺の記、客は送る山を買ふの資。
細雨魚生子。斜陽燕哺兒。　細雨、魚、子を生じ、斜陽、燕、兒を哺す。
平然無事迫。辛苦爲尋詩。　平然、事の迫るなく、辛苦、詩を尋ぬるが爲めなり。

【詩意】少壯の頃から、功名に志して居たので、世間の人は、まんざら知らないでもない。今は、此に隱居すると、坊さんが來て、寺の緣起を書いて呉れろといふし、又特志の人があつて、賴みもせぬのに、山を買ふ資金を提供して呉れた。細雨しとしと降る中に、魚は子を生じ、夕日影の中に在つて、燕は其雛に哺んで居る。平生、事の迫るなく、唯だ詩を作る爲めばかりに辛苦して、しきりと心を惱まして居る。

斬伐憑樵斧。經綸在釣車。　斬伐は樵斧に憑り、經綸は釣車に在り。
薄雲還露月。小雨不妨花。　薄雲、還た月を露はし、小雨、花を妨げず。
酒債應多處。詩名自一家。　酒債、應に多處なるべく、詩名、自ら一家。
虛煩時主召。懶脫故衣麻。　虛しく、時主の召を煩はす、故衣の麻を脫するに懶し。

【字解】【一】釣車　深い處で釣を垂るるときは、竿を用ひずして、絲を小さな車に捲く樣にしてある。東坡の詩に風靜平湖響二釣車一とある。【二】時主　その當時の太守。【三】故衣麻　故麻衣といふに同じ、古き麻衣。

【詩意】もとより、隱居高臥の身、斬伐といへば、斧で木を切り倒すことであるし、經綸といへば、釣車で絲を扱ふことである。薄雲、時に散じて、月を露はすも宜しく、小雨は、花を散らさぬから、

降つてもかまはぬ。酒代の負債は、方方に在つただらうし、詩名は、自ら一家を成して居た。どうかすると、當時の太守から召し出されたこともあつたが、古い麻衣を著かへるのが面倒臭いといつて、つい其儘に畢つて仕舞つた。

【餘論】薄雲、小雨の一聯は、人好きのする佳聯である。

長物元無有。何勞犬護扉。
借看高士傳。學製道人衣。
窓破容螢入。船空載鶴歸。
定緣幽事繞。不是宦情微。

【字解】【一】長物　揚を取る樣な邪魔物、晉書王恭傳に「かつて、會稽より都に至る。王忱、これを訪ひ、恭の坐するところの六尺の簟を見、忱、その餘あるを問ひ、因つて之を求む。恭、輒ち以て之を送り、遂に簟上に坐す。忱、聞いて大に驚く。恭曰く、晉、平生、長物なし、と。その簡率、かくの如し」とある。【二】高士傳　晉書皇甫謐傳に「謐、高士・逸士・列女等の傳を著す」とあり、唐書藝文志に「習鑿齒、襄陽耆舊傳五卷、又逸人高士傳五卷を著す」とある。それから、唐書の陸龜蒙傳に「人の書を借り、篇帙埃外すれば、必ず爲に斠讎刊正す」とある。【三】道人　世捨て人。

【詩意】もとより長物がある譯でもないから、泥棒が來ても取るものはなく、犬をして戸を護らしめるにも及ばない。平生、高士傳などを借りて讀み、又世捨て人の衣服を製することを學んだ。窓は破れた儘であるから、螢は勝手に這入つて來るし、船に餘地あるに因り、鶴を載せて歸つて來る。陸龜蒙が此の如く清高な生涯をしたのは、その居處を繞つて、幽事頗る多きに起因し、必ずしも、宦情微にして、出仕することが厭であつたといふ譯ではなからう。

【餘論】窓破の一聯も、前の二三の佳聯と略ぼ相若くものである。

澹泊心情在。蕭疏鬢影殘。
引泉規作沼。留笋待成竿。
自洗沾泥屐。誰收挂壁冠。
毛公新有約。月夜禮天壇。

澹泊、心情在り、蕭疏、鬢影殘す。
泉を引いて沼を作るを規り、笋を留めて竿を成すを待つ。
自ら洗ふ、泥に沾ふの屐、誰か收む、壁に挂けたるの冠。
毛公、新に約あり、月夜、天壇に禮す。

【字解】【一】規作沼　規は規畫の規、はかる、沼は池。【二】挂壁冠　陸游の詩に那得三重彈二挂壁冠一とある。【三】毛公　前に卷五、毛公壇の題下に注して置いたが、漢の劉根といふ人が道を得、身に長毛を生じたから、世人がかく呼んだのである。

【詩意】心情澹泊にして、世の汚穢に染まず、年老いては、鬢の毛も蕭疏として薄くなつた。泉を引いて池を作ることを計畫し、筍の中で一番素直なのを殘して、やがて、釣竿にする積り、泥に汚れた

下駄は、自分で洗ふし、壁に挂けて置いた冠は、誰に始末をして貰ふでもない。仙人の毛公と新に約を訂したるに因り、月夜、わざわざ天壇に出かけて、拜を爲すことさへある。

沐罷便輕幘。消搖詠晩天。
清風蘇病鶴。驟雨禁鳴蟬。
舊史堆緗素。新經錄洞玄。
誰知城郭裏。別自有林泉。

【字解】【一】沐罷　沐は髪を洗ふ。【二】輕幘　輕い頭巾。【三】消搖　逍遙に同じ。【四】詠晩天　日暮に朗詠する。【五】緗素　白絹をいふ、むかしは、多く紙に代用した。北史高道穆傳に「詔して、祕書、圖籍及び典書、緗素多く零落を致す、道穆をして、帳目を總集し、次第を編比せしむべし」とある。【六】洞玄　道經の名。黄庭内景經に「治生の道、了に煩はしからず、但だ洞玄と玉篇とを修するのみ」とある。

【詩意】髪を洗ひ終ると、輕い頭巾を戴き、日暮、逍遙して朗詠する。清風は、病鶴を蘇らしめ、驟雨は、鳴く蟬をして、はたと止ましめた。古い歴史は、緗素が堆をなして澤山あるし、道家の新しい經典としては、洞玄經が一番手頃である處から、それを寫して所有し、すべて、日夕、研鑽の資に供して居る。紅塵十丈の城郭の中でありながら、別にかういふ林泉の勝あるは、誰も知らぬことであらう。

汩汩泉通圃。蕭蕭柳映門。
折花搖樹影。踏藕損蓮根。
飢鴨呼歸艦。新蠶試浴盆。
屋前高石在。知是鬱林孫。

【字解】【一】汩汩　ひたひたと流れる貌。【二】踏藕　藕は蓮根であるが、ここでは唯だ蓮と見れば善い。【三】歸艦　艦は小舟。【四】浴盆　浴は蠶の孵化せしこと、それを初めは盆の上に載せてある、王周の詩に村女浴蠶桑柘綠とある。【五】鬱林　姑蘇志に「鬱林石は婁門に在り、吳の時、鬱林太守陸績、政を詘めて歸る。官廉にして裝なし。舟、輕くして、海を道する能はず。石を取つて重みと爲す、世、その廉を愛し、鬱林石と號す、績は龜蒙の遠祖」とある。

【詩意】泉はひたひたと流れて畑に通じ、柳は蕭蕭として門に映じて居る。花を折つては、樹影を搖かし、蓮を踏んでは、その根を損せむことを恐れて居る。飢ゑた家鴨は、歸り行く小舟を見ては呼びかけ、新にかへつた蠶は、まだ盆の上に載せてある。家の前には、丈の高い石があるが、それは、先祖の陸績が、重みとして舟に載せて來た名代の鬱林石の孫ででもあらうか。

茶租催未得。菊餌服還能。茶租、催して未だ得ず、菊餌、服すること還た能くす。
行古時人笑。文工造化憎。行は古くして時人笑ひ、文、工にして造化憎む。
貧留漁艇載。老謝鶴書徵。貧、漁艇を留めて載せ、老、鶴書の徵すを謝す。
誰識先生樂。悠然臥枕肱。誰か識らむ先生の樂、悠然、臥して肱を枕にす。

【字解】【一】茶租　唐書陸龜蒙の傳に「茶を嗜む、圓を顧清山下に置き、歲ごとに、租茶を取り、自ら品第を列す」とある。茶租も租茶も同じで、上納の茶であるから、精選したものであらう。【二】菊餌　金壇の注には、列仙傳に「文寶、柏を取る、數十年、輒ち之を乘つ。後、柏老いて年九十餘、復た寶を見る、年更に壯。寶、敎へて、菊の地膚桑上の寄生松子を服し、以て氣を益さしむ。柏、亦た更に壯、復た百餘歲」とあるのを引いて居る。これは、菊その物を食つたのではなく、菊の傍に在る桑の木の寄生菌を食つたのである。但し、楚辭に餐二秋菊之落英一とあり、又南陽縣に菊水があつて、菊の下を流るる谿水を飲んで村民が長生したといふことがある。【三】文工　陸龜蒙傳に「松江の甫里に居り、論撰するところ多し。文成れば、稿を篋中に寘し、或は年を歷て省みず、好事者に盜み去らる。書を得れば熟觀し、乃ち錄して、鏗比動勃、朱黃手を去らず」とある。【四】鶴書徵　同傳に「李蔚・盧攜素、ともに善し、國に當るに及びて、召して左拾遺に拜す、詔、方に下つて龜蒙卒す」とある。【五】枕肱　論語に「水を飲み、肱を枕にす、樂、その中に在り」と見えて居る。

【詩意】上納の特製茶は、催促しても、まだ山の方から屆けて來ないが、菊を服することは、怠らず遣つて居る。平生の行爲は、今樣でない處から、時人が笑ふけれども、一向頓著せず、詩文は、追追上達して、造化の憎惡を受ける位。貧なれども、なほ一葉の漁舟を留めて、これに乘り、年老いては、鶴書で召し出されても、御斷りする外はない。誰も知るまいが、先生の樂といつた處で、悠然、肱を枕にして、勝手に橫臥する位のことである。

【餘論】この詩は、原注にも見えた通り、陸龜蒙の韻に次したものであるから、今參考の爲に、原作を下に附記することにする。しかし、龜蒙は、元と皮日休に次韻したので、皮の作は、卽ち左の通りである。

臨頓爲二吳中偏勝之地一、陸魯望居レ之、不レ出二郛郭一、曠若二郊墅一、余每相訪、款然惜レ去、因成二五言十首一、奉レ題二屋壁一

一方蕭灑地。之子獨深居。繞レ屋親栽竹。堆レ牀手寫書。高風翔レ砌鳥。暴雨失レ池魚。暗識歸山計。村邊買二鹿車一。

籬疏從二綠槿一。簷亂任二黃茅一。壓レ酒移二谿石一。煎レ茶拾二野巢一。靜窓懸二雨笠一。閒壁挂二煙匏一。支遁今無レ骨。誰爲二世外交一。

繭稀初上簇。醅盡未レ乾レ牀。盡日留二蠶母一。移レ時祭二麴王一。趁レ泉澆レ竹急。候レ雨種レ蓮忙。更葺園中景。應レ爲二顧辟疆一。

靜僻無二人到一。幽深每自知。鵲來添二口數一。翠到益二家資一。壞塹生二魚沫一。頹簷落二燕兒一。空將二綠蕉

葉。來往寄二閒詩一。

夏過無二檐石一。日高開二板扉一。僧雖レ與二筒簟一。人不レ典二蕉衣一。鶴靜共眠覺。鷺馴同釣歸。生公石上月。何夕約譚微。

經レ歲岸二烏紗一。讀レ書三十車。水痕侵二病竹一。蛛網上二衰花一。詩任レ傳二漁客一。衣從レ遞二酒家一。知君秋晚事。白幘刈二胡麻一。

寂歷秋懷動。蕭條夏思殘。久貧空二酒庫一。多病束二魚竿一。玄想凝二鶴扇一。清齋拂二鹿冠一。夢魂無二俗事一。夜夜到二金壇一。

閉レ門無二一事一。安穩臥二涼天一。砌下翹二飢鶴一。庭陰落二病蟬一。倚レ杉閒把レ易。燒レ朮靜論レ玄。賴有二包山客一。時時寄二紫泉一。

病起扶二靈壽一。翛然强到レ門。與レ杉除二敗葉一。爲レ石整二危根一。薜蔓任レ遶レ壁。蓮莖臥枕レ盆。明朝有二忙事一。召レ客斲二桐孫一。

緩レ頰稱レ無レ利。低レ眉號レ不レ能。世情都太薄。俗意就レ中憎。雲態不レ知レ驟。鶴情非レ會レ徵。畫臣誰奉レ詔。來レ此寫二姜肱一。

次に陸龜蒙の作は、左の如く、相當に心力を盡した佳作である。

襲美見レ題二郊居一十首、因次韻酬レ之、以伸二榮謝一

近來唯樂レ靜。移レ榜故城居。閉打修レ琴料。時封謝レ藥書。夜停江上鳥。晴曬篋中魚。出亦圖二何事一。無レ勞レ置二棧車一。

倩レ人醫二病樹一。看二僕補二衡茅一。散髮還同レ阮。無レ心敢慕レ巢。簡便書二露竹一。尊待破二霜匏一。日好林間坐。煙蘿近欲レ交。

倭僧留二海紙一。山匠製二雲牀一。嬾外應レ無レ敵。貧中直是王。池平鷗思喜。花盡蝶情忙。欲レ問新秋計。菱絲一畝涼。

故山空自擲。當路竟誰知。祇有二經時策一。全無二養拙資一。病深憐二灸客一。炊レ晚信二樵兒一。漫欲レ陳二風俗一。周官未レ採レ詩。

禍地能容レ壍。玄關距有レ扉。靜思瓊版字。閒洗鐵銙衣。鳥破二涼煙一下。人銜二暮雨一歸。故園秋草夢。猶記綠微微。

水影沈二魚器一。鄰聲動二緯車一。燕輕捎二墜葉一。蜂懶臥二燋花一。說レ史評二諸例一。論レ兵到二百家一。明時如不レ用。歸去種二桑麻一。

禹穴奇編缺。雷平異境殘。靜吟對二籙檢一。歸興削二帆竿一。白石堪レ爲レ飯。青蘿好作レ冠。幾時當二斗柄一。同上步二罡壇一。

强起披レ衣坐。徐行處暑天。上レ階來鬬レ雀。移レ樹去驚レ蟬。莫レ問鹽車駿。誰看醬瓿玄。黃金如可レ

化。相近買二雲泉一。
野入二青蕪巷一。陂侵二白竹門一。風高開二栗刺一。沙淺露二芹根一。迸鼠緣二藤桁一。飢烏立二石盆一。東吳雖レ不レ改。誰是武王孫。
疏慵眞有レ素。時勢盡無能。風月雖レ爲レ敵。林泉幸未レ憎。酒杯經レ夏闕。詩債待レ秋徵。祇有二君同一癖。閒來對二曲肱一。

春申君の廟

封レ吳開(一)巨壤。相レ楚服二强鄰一。吳に封せられて巨壤を開き、楚に相として强鄰を服す。
名重二三公子一。謀疏(二)一婦人。名は三公子より重く、謀は一婦人に疏なり。
畫幃留二古像一。珠履(三)絶二遺塵一。畫幃、古像を留め、珠履、遺塵を絶つ。
簫鼓時迎祭。還憐舊邑民。簫鼓、時に迎祭、還た憐む舊邑の民。

【字解】【一】開巨壤　廣大なる地域を開いた。【二】三公子　賈誼の過秦論に「齊に孟嘗あり、趙に平原あり、楚に春申あり、魏に信陵あり」と見ゆ。そして、春申君を除いて、他の三人は、その國王の一族であるから、三公子といつたのである。【三】一婦人　史記春申君傳に「楚の考烈王、子なし、春申君、これを患ふ。趙人李園、春申君に事へむことを求め、その女弟を進む、卽ち春申君に幸せらる。身むあるを知り、園、乃ち其女弟と謀り、間に乘じて春申君に說いて曰く、妾、自ら身むあるを知る、しかも、人知るなし。君、妾を王に進むれば、王、必ず妾を幸せむ。妾、天に賴つて、子男あらば、是れ君の子、王となるなり、と。春申君、これを然りとし、乃ち李園の女弟を出し、讒んで舍して、これを楚王に言ふ。王、召して之を幸し、遂に子男を生み、立つて太子となし、園の女弟を以て后となし、園、事を用ふ。春申君の語洩れむことを恐れ、陰に死士を發ひ、春申君を殺して、以て口を滅す」とある。春申君は、ここに至りて、心術甚だ正しからず、李園の兄妹に欺かれ、他日楚國を席の間に奪はうとして、却つて、憐鴟に掘つたのである。【四】珠履　春申君傳に「客三千人、その上客は、皆珠履を履む」とある。

【語義】題下の原注に「子城內の西南に在り、卽ち舊の城隍神廟なり。楚、春申君を吳に封ず、故に之を祀る」とあり。一統志に「宋時、祈禱應あるを以て、英濟王に封ず、元、城隍廟となす」とある。

【詩意】春申君は、吳に封せられて、廣大なる地域を開き、身は楚國の宰相となつて、兵馬强盛なる諸鄰國をも服さしめた。その名は孟嘗・平原・信陵等の三公子より重かつたが、李園の女弟に對した謀は、あまりに疏漏で、まんまと喃著せられ、その爲に、暗殺されて仕舞つたのは、まことに氣の毒の至である。ここの廟では、模樣ある幃の中に、その木像を祀つてあるが、當日、上客が珠履を穿いて居たといふものの、遺塵だに其跡を絶つて仕舞つた。ここに、舊邑の人民が、二千年前の昔をしのび、歲時伏臘、簫鼓を鳴らし、その魂魄を招いて、今でも祭をするのは、まことに、感心なことである。

吳女墳

魚燈照(一)豔魄。夜冷珠(二)衣薄。魚燈、豔魄を照らし、夜は冷かにして珠衣薄し。

白玉土中埋。紅蘭霜後落。
不乘臺上鳳。空舞橋邊鶴。
韓重未歸來。泉宮秋寂寞。

【字解】【一】魚燈　皇覽に「秦の始皇、穴内に葬り、人魚膏を以て燭となし、久しきに度つて滅せず」とある。【二】珠衣　寶玉を綴つてある衣。【三】白玉　美人の體軀を形容して云ふ。【四】臺上鳳　前に數ぶ見えたが、秦の穆公の女、弄玉が其夫蕭史と共に臺上より鳳に乘じて昇天せしことを云ふ。【五】橋邊鶴　題鶴の項に見ゆ。【六】韓重　同上。【七】泉宮　泉は黄泉、墳墓を云ふ。

【題義】題下の原注に「闔門外に在り。闔閭の女なり、童子韓重を悅び、得ざるに因つて死す、王鶴を市に舞はしめて之を送る、今、舞鶴橋あり」とある。しかし、吳越春秋に見ゆるは、これと異にして「闔閭の女を勝玉といふ。王、夫人及び女と會して蒸魚を食ふ。王、前に半を嘗めて女に與ふ。女、怒つて曰く、王、魚を食うて我を辱かしむ、と。乃ち自殺す。闔閭、これを痛み、闔門外に葬り、池を鑿ち、土を積み、文石を椁となし、題湊を中となし、金鼎・玉栖・銀尊・珠襦の寶を以て女に送り、乃ち白鶴を市に舞はし、民をして隨觀せしめ、男女をして鶴と俱に羨門に入らしめ、因つて、機を發して之を掩ふ」とある。その葬を厚うしたのは、さることながら、罪もない市人を羨門内に閉ぢこめて殺したのは、何の積りか、蓋し、殉死させたといふ意味であらうが、關係もない者どもに、如何にも酷く當つたものである。なほ上の舞鶴の故事から、蘇州の別名を鶴市といつて居る。次に錄異傳には「吳王の夫差の小女を玉といふ、韓重と交り、私に妻たるを許す。重、齊魯に學ぶ、父母、昏を王に求む、王、怒つて與へず、玉、氣を結んで死す、闔門に葬る。重歸り、哭泣して往いて弔ひ、玉を墓側に見、明珠を贈らる。重、王を見て之を說く、王、その冢を發いて珠玉を盜みしを怒る。脫して墓所に走り、玉に訴ふ。玉、因つて梳妝して王に見ゆ、王、驚愕悲喜。夫人、これを聞き、出でて之を抱けば、煙の如く然り」とある。そして、闔門の女は、普通瓊姬と稱して居るが、後には、これと紫玉を混じて同一人の如く看做して居る。顧崧齡の姑蘇詠古詩注には、これを辨じて「瓊姬、自來、竝に指して紫玉と作すの說あるなし。余、紫玉の墓、樂府傳ふるところを以て、定めて爲に墓に名づく。而して、志書載せず、甚しきは、紫玉の事を以て、誤つて、闔閭の女の墓に注するものあるに至る、尤も荒悖と爲す。元の高槎軒の女墳の詩、遂に其誤に仍り、後人の訾議を免れざるを致す。今、瓊姬を以て卽ち紫玉となすもの、古書に在つては、原と據るところなし。蓋し、その夫差の女たり、且つ瓊字の義、紫玉と字義略ぼ通ずるを以て、遂に想うて當に然るべきの說を爲す、古を稽ふるもの、泥んで之を議する勿れ」とあつて、頗る妥當の見解である。

【詩意】人魚膏の燈火は、美人の豔魄を照らし、夜冷かなる時、珠衣の薄きを覺えるであらう。白玉の軀は、すでに土中に埋められ、さながら、紅蘭が霜後に凋れたと一般。瓊姬は、彼の弄玉と異にし

て、臺上より鳳凰に跨つて昇仙することもなく、死後、唯だ橋邊に鶴を舞はしめただけである。おまけに、生前に相愛して居た韓重の未だ歸り來らざりし時は、黄泉の下に在つて、寂寞たる秋に堪へられなかつたであらう。

【餘論】この詩は、仄韻を用ひて居るが、元來、近體には仄韻は無い筈、もし有るとすれば、變體である。且つ、この詩は、第五句の末字鳳が仄字であつて、嚴密に云へば、平仄式に協はぬから、五言古詩と見るのが至當であつて、ここに編入したのは、斷じて不倫である。

眞娘墓

金釵葬小墳。楊柳寺前村。
已斷花間信。空歸月下魂。
山鶯留曲韻。草露帶啼痕。
車馬逢寒食。還來酹酒樽。

眞娘の墓

金釵、小墳に葬る、楊柳寺前の村。
すでに花間の信を斷ち、むなしく月下の魂を歸らしむ。
山鶯、曲韻を留め、草露、啼痕を帶ぶ。
車馬、寒食に逢ひ、還た來つて酒樽を酹す。

【字解】(一) 曲韻　歌曲の餘韻。(二) 啼痕　淚の痕。

【語義】題下の原注に「虎邱寺に在り、西吳の名妓なり」とある。なほ、眞娘の墓に就いては、前に卷六、賦二得眞娘墓一送二蟾上人之一虎邱一の詩の題下にも引いて置いたが、唐の李紳の詩序に「眞娘は吳の妓人、歌舞名あるもの、死して武邱寺前に葬る、吳中の少年、その志に從ふなり、墓に花草多く、以て其上を蔽ふ」とあつて、これより以上、詳細なる記述は、絶對に無いのである。

【詩意】金釵の名妓は、小さな墓に葬られ、その場處は、虎邱寺前、楊柳茂れる村である。美人、一たび去つて、花間、信すでに絶え、唯だ魂が月下に歸り來ることがある位のものである。山に啼く鶯は、その歌聲の餘韻を留め、草葉の露は、淚の痕かと疑ふばかり。それでも、千古知名の女であるから、今でも、寒食の節に、ここに車馬を駐め、酒を地に灑いで、懇に之を弔ふ人がある。

鱸鄉亭

獨上鱸鄉亭。秋風南浦生。
載誦黄花句。遙思張步兵。
天空白水遠。日墮赤楓明。
我亦東歸客。一壺宜醉傾。

鱸鄉亭

ひとり上る鱸鄉亭、秋風、南浦に生ず。
載ち黄花の句を誦し、遙に思ふ張步兵。
天は空しくして白水遠く、日墮ちて赤楓明かなり。
われ亦た東歸の客、一壺、宜しく醉うて傾くべし。

【字解】(一) 鱸鄉亭　題詠の項に注する。(二) 載　すなはち。(三) 黄花句　張翰の雜詩に、黄花如散金の句がある。この黄

花は、菊でなくて菜の花。この句あるに因つて、菜の花を黄花と稱することが分かる。又晉書藝文傳の論に「季鷹、一時に縱誕、名爵を遺へず、黄花の什、清・神府に發す」とある。【四】張步兵　張韓を指す、晉書の本傳に「韓、清才あり、善く文を屬し、しかも、縱任拘はらず、時人號して江東步兵と爲す」とある。

【題義】題下の原注に「吳江に在り、陳文憲公の詩語を以て名づくるなり」とある。これは、前に卷十、送張倅之雲間の起首、鱸鄉亭前楓葉稀の句下に詳說して置いたが、姑蘇志に「亭は、吳江に在り、宋の熙寧中、林肇建つ、蓋し、陳瓘、秋風斜日鱸魚鄉の句を取る」とある。なほ張翰が吳中の蓴羹鱸魚の膾を思うて、官を辭して歸里し、その爲に、禍を免れたといふことは、常套の故事で、前にも數ば見えたから、ここに述ぶるまでもない。

【詩意】ひとり鱸鄉亭に上れば、渺渺たる南浦に秋風の生ずる時節であつた。ここに、黄花如散金といふ古句を誦して、その作者の張翰を思ひ出す次第。今しも、晴天空濶、白水遠く開け、夕日は落ちかかつて、紅葉が一きは明るく見える。われも亦た東に歸らうとする途中であるから、ここで、醉ふまで一壺の酒を傾けることに致さう。

堯峰院

堯帝何年到。名猶在此峰。

堯峰院

堯帝、何の年か到る、名は猶ほ此峰に在り。

巖留千尺井、寺廢兩時鐘。巖は千尺の井を留め、寺は兩時の鐘を廢す。

僧出因尋菌。人來爲看松。僧の出づるは、菌を尋ぬるに因り、人の來るは、松を看む。

白雲深洞裏。聞有聽經龍。白雲深洞の裏、聞く經を聽くの龍ありと。

【字解】【一】兩時鐘　金榻の注にも之を缺いて居るから、善くは分からぬが、夜半、卽ち五更と四更との鐘を撞かぬことだらうと思はれる。つまり、地僻にして、近傍に居民少く、この必要が無いからである。【二】尋菌　菌は、蕈。【三】看松　松は後に見ゆる偃蓋松であらう。【四】聽經龍　幽怪錄に「無言和尙、法華經を講ず、老翁あり、立つて聽き畢り、風雲に乘じて去る、衆、驚いて之を問へば、曰く、再水の龍なり」とある。

【題義】姑蘇志に「橫山府城の西南二十里、姑蘇山東に在り、唐の免水院あり、今、堯峰寺と稱す。淸輝軒・碧玉沼・多境巖・寶雲井・白龍洞・觀音巖・偃蓋松・妙高峰・東齋・西隱の十景あり、今、竝に廢す」とある。

【詩意】ここは、堯帝が何の年にか來られたといふので、今でも峰に其名を負はせて居る。巖の間には、千尺も深い井が掘つてあつて、水には困まらぬし、寺では、夜半以後、ふた時は鐘を撞かぬことになつて居る。坊さんの寺を出て行くのは、林中に蕈を探がすからであるし、人が態態來るのは、名だたる偃蓋松を見むが爲めばかりである。白雲たなびく深洞の中には、讀經を聽聞する龍が居るとのことで、さすがに靈異の淨境である。

慧聚寺、次張祐韻

煙斂城初出。潮來野欲呑。
危樵緣磴角。倦衲憩松根。
刹表藏林寺。鐘聞隔水村。
畫龍飛去久。空掩殿堂門。

慧聚寺、張祐の韻に次す

煙斂まつて、城、初めて出で、潮來つて、野、呑まむと欲す。
危樵は磴角に緣り、倦衲は松根に憩ふ。
刹は表す林に藏るるの寺、鐘は聞こゆ水を隔つるの村。
畫龍、飛び去ること久しく、空しく掩ふ殿堂の門。

【字解】【一】危樵　あぶない處を通る樵夫。【二】倦衲　退屈して居る僧。【三】刹表　刹は伽藍。【四】畫龍　張僧繇が畫いた此寺の四柱に畫いたといふことは、前にも見えて居るが、飛び去つたといふことは見えぬ。尤も、僧繇は絶代の名手で、種種神怪の說が傳はつて居るから、或は此の如き軼聞があるのかも知れぬ。

【題義】慧聚寺は、前に卷五に、孟郊の韻に次した五言八句があつたが、もしかすると、これも同時の作で、唐の張祐の韻に次したのである。祐、或は祐に作れるは、字形の相似たるより起つたことで、今に一定しない樣であるが、ここでは祐にして置く。そして、原作は、左の通りである。

寶殿依山險。凌虛勢欲呑。畫簷齊木末。香氣壓雲根。遠景窓中岫。孤煙竹裏村。憑高聊一望。
歸思隔吳門。

慧聚寺の記事は、前に詳述して置いたから、ここには重ねて掲出することを見合はせる。

【詩意】眺めやれば、煙收まつて、城が初めて見え出し、潮が差して來ると、野を呑まむずる勢である。危路に慣れたる樵夫は、石段の角を通り、無聊に困まつて居る坊さんは、松の根元に休憩して居る。伽藍の屋根が見えて、林中に寺の藏れて居ることが分かり、鐘の聲は、水を隔てたる對岸の村までも聞こえる。四柱に畫いた龍は、むかし、飛び去つたことがあるといふので、今では、殿堂の門を嚴重に閉してある。

【餘論】破題の二句は、對仗精當、意象宏濶、頗る面白いが、肝腎の兩聯は平淺にして、殘念ながら、これと釣り合はぬ樣である。

石屋

雙崖立幽關。一洞開深宇。
青嶂近爲鄰。白雲閒作主。
不受杜陵風。可避河朔暑。
華棟幾回新。渠渠獨千古。

石屋

雙崖、幽關を立て、一洞、深宇を開く。
青嶂、近く鄰を爲し、白雲、閒に主となる。
杜陵の風を受けず、河朔の暑を避くべし。
華棟、幾回か新に、渠渠、ひとり千古。

【字解】【一】深宇　奥深い住宅。【二】杜陵風　杜甫に茅屋爲三秋風所破歌がある。【三】河朔暑　奥略に「袁紹、三伏には、

晝夜酣飲して、以て暑を避く、故に、河朔、避暑の飲あり」とある。【四】 鄣棟　立派な棟木。【五】 渠堰　廣大な堰、詩經に於レ我乎夏屋渠堰とある。

【題義】 題下の原注に「天平山に在り」と見え、つまり、山中の一洞窟である。

【詩意】 雙崖屹立して相迫まり、さながら幽關を立てたるが如く、一つの洞窟の中に、奥深い住宅を開いて居る。青嶂は、近く鄰を爲し、白雲は、さながら、主人の樣である。ここにさへ居れば、杜甫が秋風の爲に屋根を吹き飛ばされたといふ樣な心配もなく、酒を飲まなくても、河朔の暑さは、容易に避けることが出來る。世間の宮殿などは、幾たびも改築して、棟を新にするが、ここばかりは、渠渠として廣く、ひとり千古に度り、少しも、手入れを爲すにも及ばない。

【餘論】 この詩も、仄韻であるが、第一句の平仄が合はぬから、前の吳女墳と同じく、五古に入れる方が至當であらう。

贈竹里子

竹里子に贈る

弭[一]楫望迷林[二]。閒爲淇澳吟[三]。楫を弭めて迷林を望み、閒に淇澳の吟を爲す。
君家不可見。但聽煙中禽。君の家、見るべからず、但だ煙中の禽を聽く。

日落浦雲遠。雨餘江水深。日落ちて浦雲遠く、雨餘、江水深し。
非同抱清節。歲晏復誰尋。同じく清節を抱くに非ざれば、歲晏、復た誰か尋ねむ。

【字解】 【一】 弭　かぢを止める、張協の七命に弭レ櫂乘レ波とある。【二】 迷林　蒼茫として望眼迷ひ易き林、つまり、遠林。【三】 淇澳　詩經に淇澳の詩があつて、瞻二彼淇澳一、綠竹猗猗とある。これは、衛の武公の德を贊したのであるが、これを吟ずるのは、竹里の號に因み、矢張、その人をなつかしく思ふ意を帶びて云ふのであらう。【四】 歲晏　歲晚に同じ。

【題義】 竹里子は、如何なる人か分からぬ。

【詩意】 江上に楫を停めて遠林を望み、君の號に因んで、淇澳の詩を朗吟して、頻りに景慕の意を寄せて居るが、君の家は、何處とも分からず、但だ煙中に鳴く鳥の聲を聞くのみである。日は落ちて、浦頭の雲は遠く、雨あがりで、江水は極めて深い。君と予と、同じく清節を抱いて居るから、交誼も自然深いので、もし然らざれば、この歲晚に當りて、誰か又相尋ねるものがあらうか。

【餘論】 この詩の前聯は對偶ではなくて、平仄も壞れて居るし、第二第六の兩句も、第五字を故らに平にしてある。されば、本當の律體としては、まだ十分に成形せぬもので、五古に入れる方が善い。現に五古の中には、かういふ詩が幾らもあつた。

送金判官之吳江

金判官の吳江に之くを送る

送客常苦愁。送君愁最劇。　客を送つて、常に愁に苦み、君を送つて、愁、最も劇。
地爲江上縣。近我鄉中宅。　地は江上の縣たり、わが鄉中の宅に近し。
霜晴橘熟秋。水冷楓飄夕。　霜は晴れて、橘、秋に熟し、水は冷かにして、楓、夕に飄る。
難逐去帆東。京華坐微役。　去帆を逐うて東し難し、京華、微役に坐す。

【字解】〔一〕微役　つまらぬ官職。

【題義】説明に及ばぬ。但し、京華坐微役の句を見れば、青邱が南京に居た時分の作に相違ない。

【詩意】客を送るに際しては、いつでも、愁に堪へられぬが、今日、君を送るに當りては、その愁が最も劇しい。君の赴任せられる吳江は、江上の縣であつて、わが田舍の宅に近い處である。今しも、霜天高く晴れて、柑橘の類は秋に熟し、江水は冷かにして、夕には紅葉が飄つて落ち、まことに景色も好からうと思はれる。しかし、身は都に在つて、つまらぬ官職を帶び、その爲に、君の舟を逐うて、一處に東に行くことの出來ないのは、いかにも殘念で、さればこそ、愁は最も劇しいのである。

【餘論】この詩は、仄韻である上に、前半と後半とは、平仄を異にして、一種の拗體を成し、且つ第三句の末字を平聲にしないから、聲律は、大分崩れて居て、矢張、五古に入るべきものである。

漁

泛泛蒼波裏。全家寄一船。　泛泛たる蒼波の裏、全家、一船に寄す。
曾來屈澤畔。或到杏壇邊。　かつて屈澤の畔に來り、或は杏壇の邊に到る。
蓑帶春江雨。榔鳴晚浦煙。　蓑は帶ぶ春江の雨、榔は鳴る晚浦の煙。
得魚尋水店。換酒不論錢。　魚を得れば、水店を尋ね、酒に換へて、錢を論せず。

【字解】〔一〕屈澤　屈原の居る澤畔、楚辭の漁父に「屈原、すでに放たれて澤畔に行吟す、漁父見て之に問ふ」とある。〔二〕杏壇　前に卷九、會三宿成均一の詩中に引いて置いたが、莊子の漁父に「孔子、緇帷の林に游び、杏壇の上に休坐す。弟子、書を讀み、孔子、絃歌して琴を鼓す。曲を奏して、未だ中ならず、漁父といふ者あり、船を下つて來り、左手は膝に據り、右手は頤を持して以て聽く」とある。〔三〕榔鳴　潘岳西征賦に「鳴榔厲響」とあつて、その注に「鳴榔とは、以て魚を驚つなり」とある。〔四〕水店　水邊の酒店。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】滄波の裏に泛泛として浮び、家族殘らず一つの船に乘つて居る。かつて、屈原の行吟せる澤畔に來たこともあるし、孔子の休んで居る杏壇の邊に往つたこともある。春江雨降る時、蓑は濡れて、しとどになり、浦上に煙生ずる夕、榔を鳴らして魚を毆つことがある。かくて、魚を捕ふれば、早速、水邊の茅店を尋ね、いくらでも構はぬから酒に換へ、それを飲んで樂んで居る。

【餘論】後聯は、措辭明靚で一寸面白い。

浮生何處好。只在水雲鄉。
椰起鳴秋月。綸收向夕陽。
箬篷幽夢熟。銅斗醉歌長。
不是煙波樂。那能與世忘。

【字解】【一】箬篷　竹の皮で編んだ篷。【二】銅斗　銅製の器、酒を汲むに用ふ。孟郊の詩に銅斗飲三江水一、手拍三銅斗一歌とある。

【詩意】浮世は何處が好いか知らぬが、漁夫は、只だ水雲の鄉にのみ住んで居る。秋月の下には、椰を鳴らして魚を敲ち、夕陽西に斜なる頃、絲を始末して釣を罷める。竹で編んだ篷の下で、幽夢は穩かに熟すべく、銅斗を拍きつつ、醉中心のどかに歌つて居る。もし煙波の樂を縱にするに非ざれば、どうして、世俗と長しへに相忘れることが出來やうか。

樵

慣識山中路。崎嶇每獨尋。
慣れて山中の路を識り、崎嶇、每に獨り尋ぬ。
穿雲衝過虎。伐樹起棲禽。
雲を穿つて過虎を衝き、樹を伐つて棲禽を起たしむ。
斧礪溪邊石。衣懸谷口林。
斧は礪ぐ溪邊の石、衣は懸く谷口の林。
逢仙休看奕。甲子易駸駸。
仙に逢ふも奕を看るを休めよ、甲子、駸駸たり易し。

【字解】【一】崎嶇　險阻な路。【二】過虎　過ぎ行く虎。【三】逢仙　前に卷十一、醉樵の詩中にも引いたが、晉の王質といふ樵夫が、山中に於て童子の碁を圍むに遇ひ、これを見て居ると、やがて、斧の柄が腐つて仕舞つたので、驚いて村に歸つて見ると、數十年を經過し、自分の知つて居た人は、大抵死んで居たといふことで、述異記に見えて居る。【四】甲子　卽ち干支、歲月といふに同じ。【五】駸駸　早く過ぎ行く貌。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】往來に慣れて、山中の路を能く見わけることが出來るので、險阻な路も、每每、ひとりで行く。ある時は、雲に穿ち入つて、通行する虎に衝突せむとし、ある時は、木を伐り倒して、その上に巢を構へて居る鳥を驚き起たしめる。斧は溪邊の石で礪ぎ、衣は谷口の林に懸けて置く。たとひ、仙人に逢つた處で、碁を打つて居るのを見ない方が善いので、世間の歲月は、遠慮なく、駸駸として行き過ぎて仕舞ふ。

【餘論】結二句は、許渾の世間甲子須臾事、逢二著仙人一莫レ見レ棋と同義である。

山中朝佩斧。遠路入煙蘿。
伐木驚禽起。穿雲畏虎過。
石根供倦憩。谷口應高歌。
莫看仙人奕。歸來恐爛柯。

【字解】【一】佩斧　斧を腰にさす。【二】煙蘿　煙れる蔦かづら。【三】石根　石の根元。【四】倦憩　疲れて休息する。

【詩意】朝に斧を腰にさして山中に分け入り、遠い路をたどつて、煙れる蔦かづらの間に分け入つた。木を伐り倒して、鳥の飛び起つに驚き、雲を穿つて、虎の通過するのに出合つた。石根は、疲れた時に休息すべく、谷口に於ては聲高に歌を唱へて居る。仙人に逢つても、碁を打つて居るのを見ぬが宜しく、歸つて來ると、恐らくは、その柄が腐つて居るであらう。

【餘論】この詩は、後聯以外、前首と全く意象を同じうし、いづれか改本であらうと思はれる。しかし、ともに凡作で、必ずしも優劣すべきものではない。

耕

江皐聞布穀。荷耜出柴門。
江皐に布穀を聞き、耜を荷うて柴門を出づ。

春暖鳥雙快。朝晴綠樹繁。
春は暖にして鳥雙快、朝に晴れて綠樹繁し。

深耕行別隴。待饁望前村。
耕を深くして別隴を行き、饁を待つて前村を望む。

自得龐公計。遺安與子孫。
自ら龐公の計を得たり、安を遺して子孫に與ふ。

【字解】【一】江皐　江邊の澤地。【二】布穀　鳥の名、前に卷十一、五禽言、脫却破袴の詩中にも見えて居る。【三】荷耜　耜は鋤。【四】烏雙　水牛、東坡の詩に却下二鵰山一入二蔡州一、爲買烏雙三百尾とあつて、その自注に「蔡州、水牛を出す」とある。【五】深耕　深く土を掘り起すこと。【六】待饁　饁は耕當。【七】龐公計　前に卷三、詠二隱逸一の中にも見えたが、後漢書逸民傳に龐公の言を記して「世人、皆子孫に遺すに危さを以てす、今、ひとり之に遺すに安きを以てす。遺すところ、同じからずと雖も、未だ嘗て遺すところなくんばあらざるなり」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】江邊の澤地に布穀の鳴くのが聞こえる頃、鋤を肩にし、柴門を出でて野らに出かける。折から、春は暖にして、水牛も元氣が善いし、朝空は晴れて居て、綠樹は、現に茂つて居る。土を掘り起すこと深くして、序に外の隴にも及び、亭午頃になると、辨當を持つて來るのを待ち兼ねて、前村の方を望んで居る。すでに、安きを以て子孫に遺し、見事、龐公の計を得たものだといつて聊か自負して居る。

春郊起東作。耒耜出柴荆。　春郊、東作を起し、耒耜、柴荆を出づ。
柳下烏䴊健。桑間布穀鳴。　柳下、烏䴊健、桑間、布穀鳴く。
家人供遠餉。刺史勸深耕。　家人、遠餉を供し、刺史、深耕を勸む。
已卜豐年候。朝來好雨晴。　已に豐年の候を卜し、朝來、好雨晴る。

【字解】【一】東作　東の野らで仕事をする。【二】遠餉　遠くから辨當を運ぶ。【三】刺史　太守。

【詩意】時節が善くなつて、春の郊外に農作が始まるといふので、朝早く、鋤鍬を擔いで柴門を出て往つた。柳の下には、水牛が、さも逞しげに見え、桑の間には、布穀の鳥が囀つて居る。家人は、遠路を厭はず、辨當を運び、太守は、態態巡檢して、成るべく土を深く掘り起す樣にといつて、しきりに、世話を燒いて居る。朝來、好雨はじめて晴れ、まことに、手始め宜しく、これでは、豐年を卜することが出來ると云つて喜んで居る。

牧

一笛去茫茫。平郊綠草長。
但知牛背穩。應笑馬蹄忙。

牧

一笛、去つて茫茫、平郊、綠草長し。
但だ牛背の穩なるを知る、應に馬蹄の忙しきを笑ふべし。

度隴衝朝雨。歸村帶夕陽。
相逢休挾策。回首恐亡羊。

隴を度つて朝雨を衝き、村に歸つて夕陽を帶ぶ。
相逢ふ、策を挾むを休めよ、首を回らして、亡羊を恐る。

【字解】【一】度隴　隴は隴。【二】挾策　書物を取り出す、莊子に「臧と穀と、二人相與に羊を牧して、ともに、その羊を亡ふ。臧に奚事かと問へば、策を挾んで書を讀む。穀に奚事かと問へば、博塞して以て游ぶ。二人の者、事業同じからざれども、その羊を亡ふに於ては均しきなり」とある。

【語義】說明に及ばぬ。

【詩意】牧童は、一管の笛を吹き鳴らしつつ、遠くに去つたが、行く手の平野には、青い草が正に長じて居る。彼は、牛背に坐することの安穩なるを知つて、世人が忙がしげに馬を走らして居るのを笑ふであらう。朝の雨を衝いて隄の上を過ぎ、夕日を帶びて村に歸つて來る。牧童は、正直に、牛羊の番をさへして居れば善いので、生意氣に、書物などを讀んで居ると、羊を亡ひ、主人に對して相濟まぬことになるから、篤と注意するが善い。

自矜黃犢健。登隴共揮鞭。
笛弄將斜日。蓑披欲斷煙。
歸鴉流水外。疏樹舊莊前。

自ら矜る黃犢の健なるを、隴に登つて共に鞭を揮ふ。
笛は弄して、將に斜日ならむとし、蓑は披いて、斷煙ならむと欲す。
歸鴉流水の外、疏樹舊莊の前。

應笑侯門客。騎驢走歲年。

【字解】【一】黄犢　犢は子牛、黄は幼稚の形容、必ずしも其色が黄いといふのではない。【二】舊莊　莊は村莊、即ち田舍屋敷。【三】歲年　唯だ年といふに同じ。

【詩意】子牛の健なるが自慢で、これと共に、隄に登つて、鞭を揮つて居る。笛を弄すれば、日將に斜ならむとし、蓑を著ると、雨中の煙が斷れて飛ぶ樣である。その行く先は、歸鴉の羣れ飛ぶ流水の外か、疏樹に圍まれたる舊莊の前かである。牧童は、かくの如く暢氣であるから、王侯の門に客たるものが、驢馬に跨つて、年中忙がしげに奔走するのを笑つて居るであらう。

夜起觀月

一春夜多雨。今宵初月明。
窓間幽夢覺。起憶故園行。
露下花微萎。煙中鳥忽鳴。
誰同賞清景。惆悵倚前楹。

【字解】【一】故園行　故郷に還る。【二】前楹　楹は柱。

夜起きて月を觀る

一春、夜、雨多く、今宵、初めて月明。
窓間、幽夢覺め、起つて憶ふ故園の行。
露下、花、微に萎み、煙中、鳥、忽ち鳴く。
誰か同じく清景を賞せむ、惆悵、前楹に倚る。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】この春は、兎角、夜、雨勝であつたが、今宵は、珍らしくも明月であつた。窓間に幽夢醒むるとき、起つて、故郷に歸りたいと思つた。露の下には、花が少しく萎み、煙の中には、何の鳥か知らぬが鳴き出した。誰も、一處に清絶なる此景色を賞するものがないから、惆悵の餘、ひとり、柱に倚りかかつて、沈吟するのみである。

【餘論】この詩は一種の拗體で、第一句の平仄が合はぬ。そして、前聯は流水の對をなし、わざと散體を以て之を行つたのであるが、窓間の字は、後聯の露下・煙中と同じ語法であるから、甚だ面白くない。もしかすると、失檢の率作であるかも知れない。

贈劉醫師

君有抱朴意。高齋長晏如。
壺中仙姥酒。案上神農書。
蒸朮曉煙裏。斸苓春雨餘。
起疾多傳妙。慚予才自疏。

劉醫師に贈る

君、抱朴の意あり、高齋、長しへに晏如。
壺中仙姥の酒、案上神農の書。
朮を蒸す曉煙の裏、苓を斸す春雨の餘。
疾を起して多く妙を傳ふ、慚づ予が才自ら疏なるを。

【字解】【一】抱朴意　晉書葛洪傳に「自ら抱朴子と號し、因つて以て書に名づく」とある。朴は純朴、老莊の謂はゆる道の本體、それを抱いて居るといふ譬。【二】高齋　樓上の書齋。【三】仙姥酒　前に卷九、蔡經宅の題下にも引いたが、姑蘇志に「良や久しくして酒壺く。王遠、左右を遣し、復た千錢を以て、餘杭の姥に與へ、乞うて酒を酤ふ。須臾にして信還る、一油瓮を得たり、酒五斗ばかり。使傳ふ、餘杭の姥答へて言ふ、恐らくは、地上の酒、尊飲に中らざるのみ」とある。【四】神農書　神農は赭鞭を以て草木を鞭ち、百草を嘗めて初めて醫藥を造つた人で、醫者の元祖である。そこで、神農に託した醫書なども可なりある。【五】蘄茝　茯苓を掘る。

【題義】説明に及ばぬ。但し、劉某の名字は不詳。

【詩意】君は、古しへの抱朴子の樣な考を懷き、ひとり樓上の書齋に坐して、いつでも、暢氣で居る。壺中には、餘杭の仙姥から取り寄せたかと思はるる美酒があるし、机の上には、神農氏の名を署した醫書がある。曉煙の裏に朮を蒸し、春雨の晴れた揚句には茯苓を掘りに出かける。病者を療治することは、まことに上手であるが、予が才疏にして之を學ぶことの出來ないのは、まことに慚愧に堪へぬ次第である。

【餘論】起句四字皆仄なるは、古人に例があるから、先づ善いとして、第四句は下三字が平、結二句は平仄を誤つて居る。これは、純粹の五律と見ず、半古半律の者として、矢張、五古に入れる方が或は穩當かも知れぬ。

舟中早行

隆隆津鼓動。江火留餘閃。
人家未起耕。近水寒扉掩。
船開鳧鴨散。樹吐煙霏斂。
東郭去方遙。青山見孤點。

【字解】【一】隆隆　太鼓の聲、梅堯臣の詩に漁陽三疊音隆隆とある。【二】津鼓　渡し船の相圖の太鼓、陳孚の詩に、渡頭動三津鼓とある。【三】船開　舟が漕ぎ出る。【四】孤點　唯だ一つ點在する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】渡し場の太鼓は、隆隆として鳴り出したが、江上の火は、なほ餘閃を留めて居る。人家では起きて耕作にも赴かず、水邊では、寒扉を掩うた儘、まだ眠つて居る。舟を漕ぎ出すと、鳧の羣が驚いて散じ、木から吐き出した薄煙は、いつしか收まつた。東郭は、すでに遙に隔り、青山の唯だ一つ當面に點在するのが見えて來た。

【餘論】仄韻でありながら、第一句、第五句、ともに末字を平聲にせず、第三第四兩句は對偶を爲さずして、平仄も變であるし、第六句は、一寸首を撚ねる樣で、その上句との對仗は、矢張確當でない。

要するに、これは、體式上、五古に入るべきものであらう。

春日懷諸親舊

楊柳燕差差。鄰家換火時。
春寒添客思。夜雨滅花枝。
涉世悠悠夢。懷人的的思。
出游無舊侶。空館獨題詩。

【字解】【一】差差　不揃の貌、入れ違ひになる貌。【二】換火　寒食の後で、新に火を取ること。【三】的的　はつきりして居る貌。

【題義】説明に及ばぬ。但し、以下二三首と共に、晩年婁江に居た時分の作であらう。

【詩意】柳のまはりには、燕子が交互に飛び、今しも、春の終に近く、寒食も過ぎて、鄰家では、丁度、火を換へた時である。春の寒いのにつけて、自然、客愁を添へ、昨夜の雨は、いくらか花を散らした樣である。世を涉つた跡は、夢の悠悠たるが如く、人を懷ふ思は、的的として明かである。出でて游行しやうとしても、舊友なければ、氣も進まず、相變らず、人げなき家に燻つて居て、ひとり詩を題するのみである。

【餘論】前聯は、從容迫らざる名聯である。

江上見逃民家

江上、逃民の家を見る

清時無虐政。何事竟拋家。
鄰叟收飢犬。途人折好花。
林空煙不起。門掩日將斜。
四海今安在。歸來早種麻。

【字解】【一】清時　太平の御世。【二】拋家　家屋を棄つぼかして置く。【三】種麻　普通桑麻といふので、田産の義に用ひて居る。

【題義】逃民は、夜逃げをした者。この詩は、江上なる其家を見て作つたのである。

【詩意】今しも、太平の御世であつて、格別の虐政もないのに、何事に因つて、かくは、家屋を棄てたまま、逃亡したのであるか。鄰りの親爺は、置いてきぼりになつて飢ゑて居る犬を氣の毒がつて、連れて行き、途ゆく人は、遠慮なく、好花を折つて居る。林は空しうして、炊煙起らず、門は閉ぢた

儘で、日は斜ならむとして居る。四海の廣き、何處に居るか知らぬが、早く歸り來り、桑麻を種ゑて、田產を謀つては如何か、何といつても、住み慣れた故郷に勝る處は外に無いものである。

曉晴、東皐步眺

江明片雨收。樹暗一村幽。
籬落疏麻長。田畦曲水流。
禽聲初變夏。麥氣欲成秋。
閒步看時物。今朝散旅憂。

【字解】【一】片雨　小雨に同じ、岑參の詩に「江上片雨收」とある。【二】禽聲　謝靈運の詩に「園柳變鳴禽」とある。【三】麥氣　月令に「孟夏の月、靡草死し、麥秋至る」とある。【四】時物　時節がらの景色。

【題義】　說明に及ばぬ。

【詩意】　小雨すでに收まつて、江水いとも明かに、樹色なほ暗くして、一村極めて靜幽。籬落の邊には、疏らに植ゑた麻が大きくなり、田畦の間には、曲りくねつて野水が流れて居る。鳥の聲は初めて夏に變じ、麥の秋になつて、一種の匂ひがする。ここに、今朝散步して、時節がらの景色を眺め、どうやら、旅中の憂を散ずることが出來た。

【餘論】　後聯は、作者得意の筆墨である。

賦得戟門送陳博士

聖廟儼王宮。重關盛衞同。
儒官趨內外。武仗列西東。
乍啓鳴鐘始。將扃撤俎終。
莫言墻九仞。還有此能通。

戟門を賦し得て、陳博士を送る

聖廟は、王宮よりも儼に、重關、盛衞同じ。
儒官、內外に趨り、武仗、西東に列す。
乍ち啓いて鳴鐘に始まり、將に扃ぢむとして、撤俎終る。
言ふ莫れ、墻九仞と、還たこの能く通ずるあり。

【字解】【一】聖廟　孔子を祀つた廟で、國子學の中に在る。【二】盛衞　嚴重に護衞する。【三】武仗　武器を持つて居る隊伍。【四】將扃　扃は門を鎖ぢる。【五】撤俎　俎豆を撤す、御供へ物を撤去する。【六】墻九仞　墻は周圍の塀。

【題義】　戟門は、ここでは孔廟の正門。周禮の天官掌舍に「壇を爲る、壝宮、棘門」とあつて、その注に「棘門は、戟を以て門となす」とある。次に通典に「晉の武帝、初めて國子博士を置く、歷代皆有り」と記し、泳化類編に「洪武の初、國子學と名づけ、博士・助敎・學正・學錄・典書・典錄の官を置く」とある。博士は、もとより學位ではな

く、官名で、教授の義、國子博士は、卽ち大學教授である。この詩は、戟門、卽ち孔廟の正門を賦して、教授陳某の上京を送つたのである。

【詩意】孔子廟は、王宮よりも儼然として莊嚴であるし、門は幾重にもなつて居て、いづれも、嚴重に護衛して居る。儒冠を戴ける教授連中は、その內外に趨走し、武器を持つて居る隊仗は、西東に列して居る。その戟門の開くは、鐘を鳴らすに始まり、その閉づるは、俎豆を撤すると共に終る。孔廟の周圍の塀は高くして、容易に入ることは出來ないが、唯だ教授の職に居るものは、自由に通行することが出來るので、まことに尊いものである。今、君も、教授の職に任せられたのであるから、精精勉强して、遺つて貰ひたい。

櫻桃

密綠映圓紅。枝頭的的同。
熟迎梅實雨。落値柳花風。
美女名偏稱。流鶯啄未空。
憶曾春薦後。捧賜出深宮。

櫻桃

密綠、圓紅に映じ、枝頭、的的として同じ。
熟して梅實の雨を迎へ、落ちて柳花の風に値ふ。
美女、名、偏に稱ひ、流鶯、啄んで未だ空しからず。
憶ふ曾て春薦の後、賜を捧げて深宮を出でしことを。

【字解】【一】密綠　櫻桃の葉の密生したるをいふ。【二】圓紅　櫻桃の實の熟したるをいふ。【三】的的　鮮明の貌。【四】美女　十六國春秋に「鄭氏、名は櫻桃、晉の冗僕射鄭世達の家妓なり、中に在つて妓中に優し、石虎、甚だ寵愛す」とあり、李商隱の詩に何因古樂府、亦有三鄭櫻桃一とある。【五】流鶯　高誘の淮南子注に「含桃は櫻桃なり、その鳥に含食せらるるを以て、故に含桃といふ」とある。【六】春薦　禮記に「仲夏の月、羞むるに含桃を以てし、先づ寢廟に薦む」とあり、漢書叔孫通傳に「惠帝、かつて出でて離宮に游ぶ。通曰く、古しへ、春嘗の果あり、方今、櫻桃初めて熟す、願はくは、陛下、取つて宗廟に獻ぜよ、と。上、これを許す。諸果の獻、これより興る」とある。【七】捧賜　拾遺錄に「後漢の明帝、月夜に於て、羣臣を照圃に宴す。太官、櫻桃を薦め、赤瑛を以て盤と爲し、羣臣に賜ふ。月下、これを視れば、盤、桃と同色、羣臣皆笑つて曰く、これ空盤」とある。

【題義】櫻桃は、ゆすら梅で、前に數ばば見えたから、ここには詳說せぬ。漢より以後、これを宗廟に薦め、それから羣臣にも頒ち賜はつたので、唐人にも、その賜を拜した詩が、頻頻として見えて居る。この詩は、卽ち櫻桃を詠じたのである。

【詩意】櫻桃の樹を見ると、茂れる葉の綠なるが、圓かなる紅實に映じ、殊に枝頭に在るのは、的的として、はつきり見える。その熟するは、梅の實の熟する入梅の雨に先ち、そして、落つるものは、柳花の風に値ひ、つまり、初夏の候である。むかし、鄭櫻桃といふ美妓があつて、さながら其名を負はしたのは、名實相稱うて、まことに、ふさはしく、それから、流鶯は好んで啄むが、未だ食ひ盡さずして殘つて居る。おもへば、さきに京師に在るや、宗廟の春薦、すでに畢りし後、これを頂戴して、深宮より退出したことがあつた。

金進士葵軒

幽園夏雨歇。葵綠乍翻風。
獨向羣芳後。閒依萱草叢。
敷榮午簟側。流馥夜窓中。
應有傾陽意。將君心正同。

【字解】【一】葵綠　葵の綠なる葉。【二】萱草　わすれぐさ。【三】敷榮　花の咲き出でたるを云ふ。【四】流馥　香氣を流す。【五】傾陽　太陽の方に向く、說文に「黃葵、常に葉を傾けて日に向ひ、その根を照らさしめず」とある。

【題義】この詩は、進士金某の葵軒に題したので、多分、その人は、葵を愛して栽培し、仍つて、軒にも命じたのであらう。

【詩意】物しづかなる庭園に於て、夏の雨の霽れし時、綠なる葵の葉は、風に翻つて居る。葵は、春の花どもの後に在つて、ひとり萱草の叢に依り、そして、竹むしろの側に咲き出でて、晝、その妍を專にし、浮動する香氣は、夜、窓の中に流れ込む。葵の葉は、常に太陽の方に向くといふので、丁度、晨夕、天子に盡さうと念じて居る君の心と同じ樣である。さればこそ、君は、これを以て軒に命じたので、如何さま、これに孤負せぬ樣に有りたきものである。

金進士の葵軒

幽園、夏雨歇み、葵綠、乍ち風に翻る。
ひとり羣芳の後に向ひ、閒に萱草の叢に依る。
榮を敷く午簟の側、馥を流す夜窓の中。
應に傾陽の意あるべし、君と心正に同じ。

【餘論】槎軒集には、閒依萱草叢の下に山艾葉映綠、海榴花競紅の一聯があつて、五言古に編入してあるといふが、實は、山艾の句の前に、更に一聯あつて、五言排律となるべき筈である。もしかすると、後者は、作者未完の草稿があつたのを其儘に存し、ここに揭出したのは、平仄の都合上、山艾の一聯を刪り去つて、純然たる五律としたのであらう。

次倪雲林韻

雲林已白頭。猶有晉風流。
愛寫滄洲趣。閒來玄館游。
茶煙秋淡淡。竹雨暮修修。
欲向南溪水。長留青翰舟。

倪雲林の韻に次す

雲林、すでに白頭、なほ晉の風流あり。
滄洲の趣を寫すを愛し、閒來、玄館に游ぶ。
茶煙、秋淡淡、竹雨、暮に修修。
南溪水に向つて、長しへに青翰の舟を留めむと欲す。

【字解】【一】晉風流　晉の竹林七賢以下、清談者流の風流。【二】滄洲　海中の仙境。【三】玄館　浮世に遠ざかつた隱宅。【四】青翰舟　說苑に「鄂君の子晳之、舟を新波の中に浮べ、青翰の舟に乘ず」とある。ここでは、唯だ字面だけを借り、立派な遊山船といふ意に用ひたのである。

【題義】倪雲林、名は瓚、元末に著名なる畫家で、前にも青邱の次韻があつた。但し、この詩の原作は、雲林の全集を檢しても分からない。

【詩意】倪雲林は一代の名家、白髪頭になつても、依然として晋時の風流を存し、好んで滄洲の趣を畫き出し、閑なる折折は、隱宅に來て游んで居た。茶の煙は、秋に入つて淡く、竹に注ぐ雨は、日暮修修たる聲を爲して居る。時には、南溪の水中に、立派な小舟を繫ぎ留め、詩酒の逸興を縱にせむと思つて居た。

【餘論】前聯は、一寸散體を眞似た處であらう。

登南樓看雨有懷

清曉看江雨。獨登江上樓。
人煙與草樹。蕭瑟滿城秋。
砧響寒稍急。鴻聲哀更流。
故人隔楚塞。西望忽成愁。

南樓に登り、雨を看て懷あり

清曉、江雨を看、ひとり登る江上の樓。
人煙と草樹と、蕭瑟たり滿城の秋。
砧響、寒稍や急、鴻聲、哀更に流る。
故人、楚塞を隔て、西望、忽ち愁を成す。

【字解】〔一〕蕭瑟　物さびしき貌。〔二〕楚塞　古しへの楚地の城塞。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】清清しき曉に江天の雨降り注ぎ、まことに心持の善い處から、ひとり、江邊の高樓に登つた。眺めやれば、人煙と草樹とは、わいだめもなく、滿城の秋は、流石に物さびしい。砧うつ響は、寒いにつけて、稍や急なるが如く、雁の聲は、哀しげにして、流れる樣である。わが友は、古しへの楚地に居て、相去ること遠く、西望すれば、忽ち愁を成すばかりである。

晚霽、獨酌南樓

倦客豈遷客。故鄉非異鄉。
鱸肥蓴菜紫。雁到柳條黃。
湖濶已秋雨。樓高猶夕陽。
登臨何必賦。把酒據胡牀。

晚霽、獨り南樓に酌む

倦客、豈に遷客ならむや、故鄉、異鄉に非ず。
鱸肥えて蓴菜紫に、雁到つて柳條黃なり。
湖濶くして、已に秋雨、樓高くして、猶ほ夕陽。
登臨、何ぞ必ずしも賦せむや、酒を把つて胡牀に據る。

【字解】〔一〕倦客　久しく流浪して居る旅客。〔二〕遷客　左遷された人。〔三〕登臨何必賦　文選、登樓賦の注に「宮陽縣の城樓、王仲宣、これに登つて賦す」とある、仲宣、名は槃。〔四〕據胡牀　晉書に「庾亮、武昌に在り、南樓に登り、胡牀に據つて謔詠竟夕」とある。

【題義】說明に及ばぬ。

【詩意】身は久しい流浪から歸つて來た旅客であるが、幸にして左遷された逐客ではなく、ここは元來生まれ故鄉であつて、異鄉ではない。今しも、鱸魚方に肥えて、蓴菜は紫色をなし、雁が北から

飛んで來て、柳の枝も黄ばんで居る。湖水は濶く、秋雨を經て水嵩の増したことは明かであるし、樓は高くして、まだ夕日の光が殘つて居る。ここに登臨したからといつて、何も必ずしも、賦を作らなくとも善いので、酒を把つて胡牀に據り、談詠して夜を終れば、それで澤山である。

【餘論】後聯は、意を用ひざれども、自然の巧對である。

追挽恭孝先生二首

恭孝先生を追挽す　二首

閩洛遺風在。河汾舊業傳。
書攻藏簡後。易究出圖先。
曉禁辭持槖。寒廳戀坐氈。
臨危誰復似。身與敕俱全。

閩洛、遺風在り、河汾、舊業傳ふ。
書は攻む、簡を藏するの後、易は究む、圖を出すの先。
曉禁、槖を持するを辭し、寒廳、氈に坐するを戀ふ。
危きに臨んで、誰か復た似たる、身、敕と俱に全し。

【字解】【一】閩洛　金履の按に「學者、濂洛關閩と稱す。濂は周敦頤を謂ふ、字は茂叔、濂溪先生と稱す。洛は程顥を謂ふ、字は伯淳、明道先生と稱す。弟頤、字は正叔、伊川先生と稱し、河南に居る。關は張載を謂ふ、字は子厚、關中鳳翔郿縣橫渠鎮の南に僑寓す、故に橫渠先生と稱す。閩は朱子を謂ふ、字は元晦、父松、延平尤溪の尉たり、熹を生む、崇安に寓居す、晩に建陽の考亭に徙る」とある。閩洛といへば、朱子と程明道とを併稱したので、宋學理學の開祖といふ意味に用ひて居る。【二】河汾　隋書王績傳に「績の兄通は、隋末の大儒なり、徙を河汾の間に築め、六經を做作し、又中說を爲つて論語に擬す」とある。【三】藏簡　孔安國の尚書序に「秦の始皇、先代の典籍を滅し、書を焚き、儒を坑にす。我が先人、用つて其家書を屋壁に藏す、漢興り、濟南の伏生、年九十を過ぎ、その本經を失ひ、口づから以て傳授す、わづかに二十餘篇。その上古の書たるを以て、これを尚書と謂ふ。百篇の職、世、闕くを得るなし。魯の共王に至り、好んで宮室を修め、孔子の舊宅を壞し、以て其居を廣め、壁中に於て、先人藏するところの古文虞夏商周の書、及び論語・孝經を得たり」とある。【四】出圖先　槖辭に「河、圖を出し、洛、書を出す、聖人これに則る」とある。【五】曉禁　禁は宮中。【六】持槖　南史劉杳傳に「博く羣書を總ぶ、沈約・任昉以下、遺忘する毎に、皆訪問す。周捨、杳に問ふ、尚書は槖荷槖を著け、相傳へて義を擧ふと云ふ、寬に何の出づるところ。杳曰く、張安世傳に云ふ、槖を持し、筆を管す、孝武皇帝に事ふる數十年と。章昭・張寔の注、并に曰く、槖は囊なり、筆を管して以て顧問を待つ」とある。【七】寒廳　廳は奥座敷。

【語義】恭孝先生は、王彝の父の諡號で、名は允中。彝は、春日懷二十友一詩にも見え、北郭十友の一人である。婁堅の王常宗小傳に「王彝、字は常宗、その先は蜀人、元末、父恭孝先生崑山縣學訓導となり、因つて東下し、留まつて家す」とあり、姑蘇人物傳に「王彝の父允中、崑山に教授し、遂に崑に居り、又嘉定に徙る。少にして貧、書を天台山中に讀み、孟長文に師事す、長文は金履祥の弟子たり、故に學に端委あり」と見えて居る。この詩は、王允仲を追輓したので、追輓とは、死んだ當座でなく、幾年かの後、これを弔ふことである。

【詩意】先生は、閩洛の遺風を存して、道學の深奥を極め、又河汾の舊業を傳へて、弟子どもを教育された。書經に就いては、孔氏の壁中に簡冊を藏したのを發見した後から研究を爲し、易に就いては、はるかに淵源に溯つて、まだ河水から圖を出さぬ前にも及んだ。はじめは、宮中に出仕し、槖を持して諮問に應じて居たが、やがて之を辭して田舍の訓導となり、寒げなる奥座敷に青氈を敷いて、その

上に坐し、却つて、その方を心易いと思つて居た位。騒亂に際して數ば危きに臨んだが、天子から、詔勅を下されて、その身を全うしたのは、他に比類なきことであつて、これを見ても、その學問德望の度越して居たことが分かる。

北闕書空上。東川敎自陳。
可當衰亂日。復喪老成人。
堂靜懸魚絶。墳荒下馬頻。
傳家欣有子。執筆際昌辰。

【字解】【一】北闕　宮中の正殿。孟浩然の詩に北闕休上書とある。【二】東川　蜀の東邊、王允中の故郷であらう。【三】懸魚　漢記に「羊續、廬江太守となる。丞、魚を饋る、受けて食はず、これを懸く。後、復た饋る、續、前の懸魚を出して之を示す。丞、慚ぢて止む」とある。【四】有子　子は後を嗣ぐに堪へたる子。黄堅の王常宗小傳に「洪武二年、海内文學の士を徵して、元史を爲修す。先生、高太史啓と同じく召に應ず。史成つて、當に翰林に官するを得べし、疾を以て乞うて歸る」とある。【五】執筆　北史李彪傳の贊に「筆を執り、言を立て、遂に良史を成す」とある。【六】昌辰　太平の世。

【詩意】先生は、屢ば北闕に上書されたが、效果なかりしに因り、東川に在つて敎授された。國家の衰亂は、仕方がないとして、その上に、かういふ老成人を無くすのは、いかにも殘念の事であるが、先生は、遂に崑山に來つて、そこで逝去された。堂は靜にして、貫つた儘で懸けて置いた魚も、最早絶えて仕舞ひ、墓は荒廢甚しけれども、その遺德を慕ひ、馬を下つて、態態拜禮をする人は、頻頻として多かつた。唯だ幸なのは、跡を嗣いだのが、立派な息子であつて、明初太平の世に召し出され、筆を執つて史を修し、從つて、大に家名を揚げたことである。

題宋迪晚煙歸舍圖

宋迪の晚煙歸舍の圖に題す

落日下嵐嶺。行人逢已稀。
隔煙望田舍。映水掩荆扉。
鳥亂夕林暗。草多秋徑微。
家人應候我。賣畚郭中歸。

【字解】【一】嵐嶺　地名ではなく、嵐は山氣、卽ち山氣立ちこめたる峠の路であらう。【二】荆扉　いばらで編つた木戸。【三】候我　わが歸るを待つて伺ふ。【四】賣畚　畚はもつこ、王猛が畚を賣つたことは、前に郊墅雜賦に見えて居る。

【題義】圖繪寶鑑に「宋の宋迪、字は復古、進士を以て第に擢んでられて郎となる。李成を師とし、山水を畫くに、運思高妙、筆墨清潤」とある。この詩は、宋迪の筆に成れる晚煙歸舍の圖に題したの

である。

【詩意】夕日の斜なる頃、山氣立ちこむる峠を下つて行くと、路ゆく人に遇ふことも、最早稀である。煙を隔てて、わが草小屋を望むと、ありあると水に映つて、荆扉を掩うて居る。歸鳥は亂れ飛んで、夕の林、ほの暗く、草は生ひ茂つて、秋の小徑は、かすかで分からぬ位。家人どもは、春を賣つて、わが城中から歸つて來るのを待つて居るであらう。

【餘論】畫中に寫されて居た人に代つて作つた樣な工合で、すべてが、動的に且つ時間的に出來て居るから、畫の靜的に且つ空間的なるに對して、自然重複せず、兩兩相待つて、愈よ其趣を發揮するのである。

贈東菴道者

雙樹夾成戸、一溪流繞家。
掃林留迸筍、汲水帶浮花。
經勸里人讀、藥從山客賒。
已無喧寂念、默坐對鳴蛙。

東菴道者に贈る

雙樹、夾んで戸を成し、一溪、流れて家を繞る。
林を掃うて迸筍を留め、水を汲めば浮花を帶ぶ。
經は里人に勸めて讀ましめ、藥は山客より賒る。
すでに喧寂の念なく、默坐して鳴蛙に對す。

【字解】【一】雙樹　釋譯名義集に「娑羅樹、東西南北、四方各雙、故に雙樹といふ」とある。【二】掃林　林を掃除する。【三】迸筍　地から勢よく出た筍、張籍の詩に迸筍斜穿戸とある。【四】藥從山客賒　山中の人から藥材を買つて貯へて置く。

【語義】說明に及ばぬ、但し、道者は如何なる人か分からぬ。

【詩意】娑羅樹は、相竝んで自然に門戸をなし、一溪淙淙、家を繞つて流れて居る。林を掃除しても、勢よき筍だけは殘して置き、水を汲むと、桶の中に落花が浮んで居る。平生、敎化を務め、里人に勸めて聖經を讀誦せしめ、山中の人から、藥材を買つて、貯へて置く。道者は、ひたすら修養を積んで、喧寂を超越して居る處から、蛙の聲の騷がしきを聞いても、默坐して打澄まして居る。

樂圃、三首

林塢通幽閑。山明雲出溪。
門無俗客至。池有水禽啼。
對酌山花下。行吟野竹西。
石牀春寂寂。苔色映青藜。

樂圃　三首

林塢、幽閑に通じ、山は明かにして、雲、溪を出づ。
門に俗客の至るなく、池に水禽の啼くあり。
對酌す山花の下、行吟す野竹の西。
石牀春寂寂、苔色、青藜に映ず。

【字解】【一】林塢　塢は隈。【二】幽閑　二字ともに靜かなる貌。【三】對酌山花下　李白の詩に兩人對酌山花開とある。【四】

青藜　あかざの杖。

【題義】姑蘇志に「樂圃は、清嘉坊北に在り、朱長文の居るところ、中に高岡・清池・喬松・壽檜あり。この地、錢氏に在つては金谷園たり。その父光祿卿、はじめて之を得たり。長文、營んで以て圃となし、幷せて、自ら記を作る。鄉人、その名德を尙び、知州章岵、表して樂圃坊となす。蓬經堂・華嚴菴・招隱橋・見山岡・琴臺・鶴室・墨池・筆溪、及び西圃草堂、共に二十景あり。元末、張適、室を上に築き、題して樂圃林館といひ、高季迪・倪元鎭・陳麟・謝恭・姚廣孝と賡和して、十詠を爲す」とあつて、この詩は、取りも直さず、その當時唱酬の作であらう。

【詩意】林や塢は、靜幽なる處に通じ、四邊の山は、はつきりして、雲が溪谷を出るのも、よく見える。門には俗客の至るなく、池には水禽が啼いて居る。或は山花の下に對酌し、或は野竹の邊を行吟し、幽興は殊に多い。石牀の上、落花跡だになく、春の寂寂たる頃は、苔色青青として、あかざの杖に映ずるのみである。

【餘論】篇中、山の字の重複が第一に目に付く樣である。

開軒時野眺。山色翠迢遙。
屏結霜中檜。圖開雪裏蕉。

軒を開いて、時に野眺すれば、山色、翠迢遙たり。
屏は霜中の檜を結び、圖は雪裏の蕉を開く。

煖煙初扇圃。野水欲平橋。
曳杖閒來往。時挑酒一瓢。

煖煙、初めて圃を扇り、野水、橋に平かならむと欲す。
杖を曳いて閒に來往、時に挑ぐ酒一瓢。

【字解】【一】野眺　野を眺める。【二】屏結　屏は屏風で、その上に畫いてある。【三】圖開　かけ物を掛ける。【四】雪裏蕉　夢溪筆談に「予が家藏するところ、摩詰の畫、袁安臥雪の圖、雪中の芭蕉あり」と見え、もと王維の創意である。【五】扇圃　扇はあふる、陶淵明の春風扇二微和一の扇と同義。【六】欲平橋　橋と水平になる。【七】時挑　挑はかかげる。

【詩意】軒窓を開いて、野もせを眺むれば、山色翠遙に、ぼうッと霞んで居る。屏風には、霜を帶びた檜が畫いてあるし、かけ物を廣げると、雪中芭蕉の幅であつた。暖かなる煙は、畑地を扇るが如く、野水は漲つて、橋と平になつて居る。そこで、杖を曳いて來往し、時たま、酒の入れてある一瓢を杖頭に挂けることがある。

幽居無灑掃。風景自翛然。
紅溼花間雨。青分柳外煙。
山窓捫蝨坐。石榻枕書眠。
自得閒中趣。栽花疊錦川。

幽居、灑掃なく、風景、自ら翛然。
紅は溼ふ花間の雨、青は分かる柳外の煙。
山窓、蝨を捫つて坐し、石榻、書を枕して眠る。
自ら閒中の趣を得たり、花を栽ゑて錦川を疊む。

【字解】【一】灑掃　水を打つたり掃除したりする。【二】偉然　自然俗を超えたる貌。【三】捫蝨　しらみを撚れる、晉書に「桓温、關に入る。蝨、褐を被つて之に捫し、蝨を捫つて當世の事を談じ、旁に人なきが若し」とある。【四】疊錦川　川は平地の義、錦を敷き詰めた地の樣にする。

【詩意】幽居は、格別、掃除もしないが、天然の風景は、翛然として俗を離れて居る。花間の雨は、紅に溼ひ、柳外の煙は青色分明。山に對する窓に倚つては、蝨を撚りつつ坐し、石造の榻に臥しては、書を枕しつつ眠ることがある。すでに、閑中の幽趣を得たから、この上は、花を栽ゑて、錦を敷き詰めた地の樣にしたいと思つて居る。

送人戍梁谿

人の梁谿に戍するを送る

沙寒馬屢嘶。曉度錫山西。
古壘殘兵衞。荒田健婦犂。
雨多弓力軟。霜重鼓聲低。
路近非邊塞。香閨莫夜啼。

沙寒くして、馬、屢ば嘶き、曉に度る錫山の西。
古壘、殘兵衞り、荒田、健婦犂く。
雨多くして弓力軟、霜重くして鼓聲低し。
路近くして邊塞に非ず、香閨、夜、啼く莫れ。

【字解】【一】健婦犂　留守をして居る壯健なる家婢などが代つて田畑を耕す。杜甫の兵車行に、「縱有二健婦把二鋤犂一、禾生二隴畝一無二東西一」とある。【二】雨多弓力軟　雨が多いと膠が融けて弓が弛むから、その力が弱くなる。【三】霜重鼓聲低　霜が澤山降つて寒いと、手がかぢかんで、太鼓を敲いても力が入らぬから、その聲が自然低い。

【題義】梁谿は前に卷四、贈二惠山醫僧一の詩中に注して置いたが、無錫の附近である。明史薛張士誠傳に「元の至正十六年九月、太祖、徐達等を遣して、常州を攻む、士誠、兵を遣して來り援けしむ」とあつて、この詩は、その時、常州方面に派遣された兵士を送つたのである。

【詩意】曉早く錫山の西を通過すると、滿地、沙寒くして、馬が屢ば嘶く。古壘には、殘兵が守つて居るだけで、餘程、手薄であるから、早く赴いて援けねばならぬし、不在になつても、丈夫な下婢などが居て、荒田を鋤くから、格別、心配には及ばない。雨が降り續く爲に、弓の力は自然弱くなり、霜が重くして、鼓の聲だに高く響かぬ折折は、流石に、征戍の苦を覺えるであらう。しかし、君の行くところは、つい近國で、邊塞ではないから、香閨に獨り寢を爲す妻女は、夜半に泣かずとも善からうと思ふ。

五言排律

月夜游太湖

月夜、太湖に游ぶ

欲尋林屋隱。還過洞庭游。

林屋の隱を尋ねむと欲し、還た洞庭を過ぎて游ぶ。

遠水初涵夜。長天盡作秋。
湖如青草潤。月似白蓮浮。
萬壑風傳笛。三更斗挂舟。
葉應隨鳥散。山欲趁波流。
浩蕩吾何適。鴟夷不可求。

【字解】【一】林屋　洞名、前に卷五、太湖の詩中に見ゆ。【二】洞庭　即ち太湖、普通に謂ふ洞庭ではない。【三】青草　湖名、荆州記に「巴陵に青草湖あり」と見ゆ。【四】白蓮　虛仝月蝕の詩に初疑白蓮花、浮出龍王宮」とある。【五】風傳笛　李中の詩に風笛起漁舟」とある。【六】斗挂舟　斗は北斗。【七】浩蕩　水の廣き貌。【八】鴟夷　范蠡すでに吳を滅せし後、越を去り、鴟夷子皮と號して、五湖に浮んだといふことで、前に卷五、太湖の詩中に詳說して置いた。

【題義】說明に及ばぬ。太湖は、前に卷五、太湖の題下に注して置いた。

【詩意】林屋洞中に住む隱者を尋ねむが爲に、又立ち戻つて、太湖に浮んだ。遠水漫漫として、夜色を涵し、長天漠漠として、秋ならぬ隈もない。この湖は、青草湖と同じ樣に潤く、冴えた月は、白蓮花の浮び出でた如く見える。萬壑、靜にして、風は笛の音を傳へ、三更に及ぶと、北斗が舟に當つて輝いて居る。落葉は、鳥に隨つて飛ぶであらうし、山は、波を趁うて流るるばかり、鴟夷子、すでに去つて、その跡、尋ぬべからず、この廣い湖水の中で、われは、何方に往くべきかと、低徊して思ひ惑ふばかりである。

【餘論】葉應隨鳥散」の五字は、前に次韻陳留公」の詩中に見えて居たのみならず、斷じて、畫景であつて、この場合には相應しくない。一時の間に合せに、舊句を塡めて置いた儘、他日更に再思するを忘れると、往往かういふ事になるので、後生小子の宜しく注意すべきことである。

詠夏氷

寒收凝凍井。晚薦納涼宮。
抱潔存天質。銷炎奪化工。
氣蒸金盌潤。色映玉盤空。
弱藻含猶在。纖塵隔未通。
非山寧可倚。是水復當融。
照夜何須月。驚秋詎待風。
製屏應不隱。作珮定難攻。

夏氷を詠ず

寒、收まつて凍井を凝らし、晩に薦めて涼宮に納る。
潔を抱いて天質を存し、炎を銷して化工を奪ふ。
氣は金盌を蒸して潤ひ、色は玉盤に映じて空し。
弱藻、含んで猶ほ在り、纖塵、隔てて未だ通せず。
山に非ず、寧ろ倚るべけむや、これ水、復た當に融くべし。
夜を照らす何ぞ月を須ひむ、秋を驚かす詎ぞ風を待たむ。
屏を製せば應に隱れざるべし、珮を作す定めて攻め難し。

容貌清誰竝。仙肌瑩自同。　容貌、清、誰か竝ぶ、仙肌、瑩、自ら同じ。
宜涵筠簟素。愁逼桂爐紅。　宜しく筠簟の素を涵すべく、桂爐の紅に逼らむことを愁ふ。
願解行人渴。分貽道路中。　願はくは、行人の渴を解き、分つて道路の中に貽らむ。

【字解】【一】金盌　銅製の鉢。【二】翦蓬　しなやかな蓬。【三】非山寧可倚　遁鑑に「或は陝郡の逃士張永に勸めて、楊國忠に謁せしむ。永曰く、君が寵、楊右相に倚る、泰山の如し、吾は以て氷山となすのみ。もし、皎日、すでに出づれば、君が寵、恃むところを失ふなきを得むや、と。遂に嵩山に隱る」とある。【四】佩珮　珮は佩玉、腰下の飾り。【五】容貌清誰竝　晉書衛玠傳に「玠、風神秀異、妻父樂廣、海內の重名あり、識者以爲へらく、婦翁氷清女壻玉潤と」とある。【六】仙肌　莊子に「藐姑射の山に神人あり、肌膚、氷雪の如し」とある。【七】筠簟　竹で編んだ涼簟、卽ちたかむしろ。【八】桂爐　肉桂等の香木を焚く香爐。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】今は夏で、寒氣すでに收まりしに、これは、凍れる井の中で凝結したものらしく、晩に之を獻上して、お涼みの御殿に差し上げる。その純潔を抱けるは、天然の性質であるし、暑さを銷すことは、造化の工をも奪はむばかり。冷氣は、銅の鉢を蒸して、表面までも潤ひが廻はり、純色が玉盤に映ずると、透明なる爲に、有れども無きが如くである。よく見ると、中には水中の藻を含んで居るが、こまかい塵埃でも、隔つて、その內部に入ることはない。これは、楊國忠を氷山に譬へたのと異にして、もとより山で無いから、倚ることも出來ず、本來、氷であるから、再び融けて仕舞ふ。夜を照らすには、何も月を借りるに及ばず、秋を驚かすにも、風を待つ必要なく、その明瑩なるは、さながら、月の如く、その清涼なるは、風にも勝つて居る。それで屏風を造つた處で、透明であるから、隱れることは出來ないであらうし、珮玉に造らうとしても、細工が六つかしい。誰か容貌の清げなること、これと相竝ぶべき、ただ藐姑射仙人の肌膚のみは、瑩くことが、自然、同じ樣である。竹むしろの純素なるを涵すには宜しいが、名木を焚いて赤くなつて居る香爐の傍に置けば、やがて、自然解かされるであらう。それよりも、願はくは、旅人の喉の乾いたのを醫せしめむが爲に、隨處の道路に分贈したいものである。

【餘論】元來、詠物の詩は、その巧妙なものでさへ、謎語に類して居るのに、これは、對偶を以て行つたのだから、一しほ、六つかしく、且つ、これだけ篇幅を長くするだけの材料もないのである。青邱の才を以てしても、精精、こんなもので、格別取り立てて論ふべき價値もない。唯だ非山寧可倚の四句だけは、刻劃に過ぎて居るが、新警工緻、篇中の警策である。

題黃鶴山人畫

黃鶴山人の畫に題す

何處畫相同。湘南與峽東。　何の處か、畫と相同じ、湘南と峽東と。

江來落日外。山出杪秋中。
綠桂騷人宅。青蓮釋子宮。
鐘鳴樵谷暗。船散市橋空。
風樹驚猿落。煙蕪去鳥通。
平生游楚興。對此轉無窮。

江は來る落日の外、山は出づ杪秋の中。
綠桂、騷人の宅、青蓮、釋子の宮。
鐘は鳴つて樵谷暗く、船は散じて市橋空し。
風樹、驚猿落ち、煙蕪、去鳥通ず。
平生、楚に游ぶの興、これに對して、轉た窮まりなし。

【字解】【一】湘南　湘水の南、長沙一帶の地。【二】峽東　峽は宜昌以上に於ける揚子江の上流。【三】杪秋　杪は樹枝の末端、從つて、季の義に用ふ。季秋、卽ち晩秋。【四】綠桂　楚辭の招隱士に桂樹生兮山之幽とある。【五】騷人　前に詳說して置いたが、屈原始に其末派。【六】青蓮　白蓮に同じ。【七】釋子宮　僧寺、禪菴に同じ。【八】樵谷　樵夫の入る深谷。【九】市橋　その近くに市場が開かれる橋。【一〇】煙蕪　煙こめたる草原。

【講義】圖繪寶鑑に「王蒙、字は叔明、吳興の人、趙文敏の甥なり。山に館す、故に黃鶴山樵と號す。山水を善くし、甚だ巨然の用墨法を得たり」とある。この詩は、卽ち王叔明の畫山水に題したのである。

【詩意】この畫と同じ樣な風景は何處かと云ふと、湘南に非ざれば峽東であつて、大江の水が、落日の外より來り、幾多の山が、晩秋の晴れ空の中に出て居るのは、全くさうである。桂樹の茂れるは、騷人の居宅なるべく、白蓮の花咲き匂ふは、いづれ庵室であらう。夕ぐれ鐘が鳴ると、木こりの往來する深谷も暗くなり、商船の散する頃には、今まで市の開いて居た橋畔に、人も居ない樣になる。風に搖れる木からは、驚いた猿がころげ落ち、煙を罩めたる草原には、歸り去る鳥が自由に飛んで行く。予は、平生、湘南より峽東にかけて、古しへの楚地に游びたいと思つて居たので、今、この圖に對すると、無窮の興味を覺える。

【餘論】起結各二句を除いて、中間八句は、專ら畫中の景を敍述したのであるが、遠近を兼ね、有無を併せ、無論、畫に無いものまでも倩ひ來つて說明して居るので、これならば、題畫の本旨にも叶ふべく、且つ起結も、これが爲に、自然振ふを覺える。

賦得履、送衍上人

履を賦し得て、衍上人を送る

穩稱游方脚。新編楚岸蒲。
滑欺峰頭石。危怯世間途。
輕曳愁妨蟻。高飛笑化鳧。
上堂聲每衆。度嶺影還孤。
著處朝行道。拋時夜結趺。

穩に游方の脚に稱ひ、新に楚岸の蒲を編む。
滑は峰頭の石を欺き、危きは世間の途を怯る。
輕曳、蟻を妨げむことを愁へ、高飛、鳧に化せむことを笑ふ。
堂に上つて、聲、每に衆く、嶺を度つて、影、還た孤なり。
著くる處、朝に道を行き、拋つ時、夜、趺を結ぶ。

空山欲相訪。落葉去踪無。　空山相訪はむと欲す、落葉、去踪なし。

【字解】【一】 游方僧　然るべき處に出かける、行脚。【二】 楚岸蒲　揚子江岸に生ずる蒲。南史張孝秀傳に「匡山に入り、行を修し、道を學び、常に穀皮巾を冠し、蒲履を躡む」とある。【三】 滑欺峰頭石　滑の字は履に就いて云ふのではなく、下の石に就いてゐるので、卽ち滑り易き峰頂の石をも壓倒して、何の苦もないといふ意にせねばならぬ。從つて、下の危怯世間途も、世間の途の危きを怯れるといふ義。【四】 妨蟻　蟻を踏み潰す、宋史程頤傳に「頤遊講、色太だ莊、繼ぐに諷誦を以てす。帝が宮中に在つて、盧して蟻を避くるを聞き、問ふ、是ありや。曰く、然り、誠に之を傷けむことを懲るのみ。頤曰く、この心を推して、以て四海に及ぼすは、帝王の要道なり」とある。【五】 化鳧　王喬が雙鳧に化したのを網を張げて捕へて見た處が、履であつたといふこと、前に卷九、洞庭山の詩中に見ゆ。【六】 結趺　兩足を組んで坐禪をする。【七】 落葉去踪無　韋應物の詩に、落葉滿二空山一、何處尋二行跡一とある。

【題義】 衍上人は、前に數ば見えて居た。この詩は、何處か知らぬが、上人の飛錫するを送る爲め、わざと變つた趣向を著け、履を詠じて、餞行の意を寓したのである。

【詩意】 然るべき方に行脚する其足に最も善く適合する樣に、新に江岸の蒲を編んで造つたのが、卽ちこの履である。これさへあれば、峰頂の石の滑り易きも、何の苦もないが、浮世の危き行路には、矢張、辟易する。これを輕く曳きずるのは、蟻を踏み潰さない用心であるし、勢よく高く飛ぶ時には、王喬の履が鳧に化したといふ傳說も、物の數ならじと覺える。これを穿いて、しづしづと僧堂に參入する時には、善男善女、歡迎の聲、賑はしく、峠の路を過ぎ行く時は、伴もなくて、影だに寂しい樣である。この履を穿けば、朝に道を行き、これを拋てば、夜、兩足を組んで坐禪をする。そこで、空山の中に分け入つて、君を訪はうと思つても、落葉は履の跡を埋め、何處といつて尋ねることが出來ぬであらう。

聞蛙　　蛙を聞く

何處多啼蛤。荒園暑潦天。
何の處か啼蛤多き、荒園暑潦の天。

股跳泥活活。形蔽草芊芊。
股は跳つて泥活活、形は蔽うて草芊芊。

野遠呼相應。窪深樂自專。
野遠くして、呼べば相應じ、窪深くして、樂、自ら專にす。

斜陽漁罩外。細雨客燈前。
斜陽漁罩の外、細雨客燈の前。

莫問官私地。聊占水旱年。
官私の地を問ふ莫れ、聊か占む水旱の年。

晴思蒲葉渚。涼憶稻花田。
晴には思ふ蒲葉の渚、涼には憶ふ稻花の田。

高士聽空愛。遷人食未便。
高士聽いて空しく愛し、遷人食うて未だ便ならず。

灑灰誰解去。安我夜窓眠。
灰を灑いで誰か去るを解し、わが夜窓の眠を安んせむ。

【字解】【一】 蛤蟆　東坡の詩に稻涼初啼ゝ蛤とあつて、その注に「嶺南、蝦蟇を呼んで蛤となす」とある。又本草に「その聲を大にすれば蛙といひ、その聲を小にすれば、蛤といふ」とある。【二】 暴涼天　夏、雨が降つて出水する頃。【三】 股跳　白居易の「泥蛙入ゝ戶跳」とある。【四】 窪深　窪ばくぼみ。【五】 漁罩　罩はかご、魚を捕ふるに用ふる竹又は荊の籠。【六】 官私地　晉書に「惠帝、華林園に在り、蛙聲を聞き、左右に問うて曰く、この鳴くものは官の爲めにするか、私の爲めにするか。賈凰對へて曰く、官地に在るものは官の爲めにし、私地に在るものは私の爲めにす」とある。【七】 水旱年　吳中田家五行に「三月三日、蛙聲を聽く、午前鳴くものは高田熟し、午後鳴くものは低田熟す」とあり、韋孝標の詩に田家無二五行一、水旱卜二蛙聲一とある。【八】 蒲葉清　王建の詩に蛙鳴蒲葉下とある。【九】 高士聽空愛　南齊書に「孔稚珪、字は德璋、風韻清疏、世務を樂まず、門庭の內、草萊剪らず、南に山池あり、春日蛙鳴く。或は之に問うて曰く、陳蕃たらむと欲するか。稚珪笑つて曰く、われ此を以て兩部の鼓吹に當つ、何ぞ必ずしも陳仲舉に效ふを期せむ」とあつて、陳蕃に惡蛙說ありしが故に云ふ。【一〇】 遲人食未便　南方では蛙を食用に供したが、左遷された北人は、なかなか食へないといふ意。遲人は韓愈、愈の柳柳州の食蝦蟇に答ふる詩に、余初不ゝ下ゝ咽、近亦能稍稍、常恐染二夷一、失二平生好樂一とある。【一一】 還灰　周禮の鍾氏に「蠶鼠を去るを掌る、牡鞠を焚き、灰を以て之に還げば死す」とある。

【題義】 說明に及ばぬ。

【詩意】 何處が一番多く蛙が鳴くかといへば、荒れた庭園で、就中、夏、雨が降つて水が溜まる其頃である。蛙は股を働かして活活たる泥中を跳り、芊芊たる草の茂みの中に其軀を隱して仕舞ふ。野の遠きも、呼んで相答へ、さながら掛け合を爲す樣であるし、窪みの深い處に引ッ込んで、ひとり、その樂を專にして居る。魚を捕ふる籠に夕日の映ずる時、客舍に在つて細雨に坐する折からなど、聊か風情ある樣にも覺える。その鳴くのは、何も地に因つて官私の別があるのでもないが、三月三日の午前午後とに因つて、高下の田の成熟を卜する位のことは出來る。天晴れた時ならば蒲の葉生ふる汀、涼しき夕ならば稻の花咲く青田など、いづれも、ふさはしい樣に思はれる。孔稚珪の如き高士は、兩部の鼓吹に代用するといつて、これを聞くことを愛したが、韓退之の樣な遷客は、なかなか之を食ふ氣になれぬといつて咿ちて居た。誰か灰を灑いで之を追ひ去らしめ、わが夜窓の眠を安らかにすることが出來るか。何分、夜中に鳴き立てるのは、安眠の妨害となつて、閉口の外はない。

聖壽節早朝

天啓聖圖昌。流虹叶夢祥。
飛龍起江左。戰馬放山陽。
御柳垂閶闔。仙桃熟建章。
遠人陳貢篚。近侍浥爐香。
金鏡千秋錄。瑤池萬歲觴。
小臣歌拜手。堯日正舒長。

【字解】【一】 聖圖　聖主の遠圖、杜甫の詩に、聖圖天廣大、宗紀日光輝とある。【二】 流虹　帝王世紀に「少昊の母を女節といふ。

貴帝の時、大星あり、虹の如く、下つて華渚に流る、女節、夢に之に接し、意感じて少昊を生む」とある。【三】飛龍　昌の乾訃九五に飛龍在レ天とあつて天子になること。【四】江左　江南。【五】放山陽　書經に「馬を華山の陽に歸らしむ」とあつて、山陽は即ち華山の陽の時。【六】閶闔　宮門。【七】仙桃　漢武内傳に「七月七日、王母至る、自ら天廚を設け、又侍女に命じて、更に桃果を索む。須臾にして玉盤を以て、仙桃七顆を盛つて王母に呈す。母、四顆を以て帝に與へ、三顆は自ら食ふ。帝、その核を收めて、これを種ゑむと欲す。母曰く、この桃、三千年にして一たび實を生ず、中夏土薄し、これを種うるも生ぜず」とある。【八】建章　漢宮の名。【九】貢饉　饉は箱。【一〇】爐香　香爐の煙。【一一】金鑑千秋錄　唐書張九齡傳に「千秋節、公卿、竝に寶鑑を獻ず。九齡、事畢十章を上り、千秋金鑑錄と號し、以て諷諫を伸ぶ」とある。【一二】瑤池　穆天子傳に「西王母を瑤池の上に觴す」とある。【一三】萬歲觴　後漢書班超傳に「超上疏して曰く、目に西域の平定を見る、陛下、萬年の觴を擧げ、勳を祖廟に薦め、大喜を天下に布かむ」とある。【一四】拜手　手をついて拜を爲す。【一五】堯日　堯の時代の如き長閑な日。

【題義】聖壽節は卽ち天子の誕辰、今で云へば天長節。明典彙に「洪武二年九月十八日、聖壽節前一日、丞相汪廣洋、百官を率ゐて、慶賀の禮を行はむことを請ふ」とあつて、それが愈よ實施せられ、その當日、百官は、朝早く參入したので、青邱は、その頃、史官であつたから、矢張、末班に參するを得、因つて、この詩を作つたのである。

【詩意】天は、聖主の遠圖を啓いて昌ならしめむと欲し、因つて、わが天子をして、この土に生まれしめ、大星が虹の如く流れるといふ佳兆は、母儀の夢を感動せしめた。やがて、飛龍天に在るが如く、江南の地に勃興して、帝位に卽かれ、四海の羣兇、盡く平定したるに因つて、戰馬を華山の南に放たれた。今しも、太平の世に當り、御柳は宮門に垂れ、仙桃は殿庭に熟し、遠方の蠻夷どもは、貢物を納れた箱を列べて差し出し、近侍の朝臣は、殿上に趨走して、香爐の煙を衣に焚きしめて居る。今日の佳節に當りては、宜しく、古しへの張九齡に倣うて、千秋金鑑錄の如きものを呈上すべく、そして、瑤池に於ては、萬歲を壽ぐ杯を薦められることであらう。唯だ微賤の小臣たる私は、歌ひつつ、謹んで拜を爲し、堯の時代の樣に長閑に永き此日に遇うたことを特に感喜する次第で御座りまする。

【餘論】これより以下數首、ともに朝廷の典儀に關した詩であつて、青邱の才を以て、新興の朝に當つたのであるから、その作あるは、もとより當然である。篇篇、ともに、流石に博大昌明の氣象に滿ちて居るが、往往、形式的に流れ、性靈の流動を缺いて居るのは、設題の性質上、亦た已むを得ぬことと思ふ。

洪武二年十月、甘露降後庭柏樹、上出示侍從、臣啓獲預觀嘉瑞、因賦詩頌之

洪武二年十月、甘露、後庭の柏樹に降る。上、出して侍從に示す。臣啓、嘉瑞を觀るに預かるを獲たり、因つて詩を賦して之を頌す

和氣融爲液。中宵墜碧天。　和氣、融けて液と爲り、中宵、碧天より墜つ。

光(二)溥高柏上。瑞發内庭前。光は溥たり高柏の上、瑞は發す内庭の前。
見(三)日朝還泫。經風晩盡堅。日を見て、朝、還た泫たり、風を經て、晩、盡く堅し。
芳穠蜂蜜滑。的皪(四)蚌(五)珠圓。芳穠、蜂蜜滑かに、的皪、蚌珠圓かなり。
厚澤歌(六)難喻。沈痾(七)飲易痊。厚澤、歌うて喻し難く、沈痾、飲んで痊え易し。
願言同聖德。濡沃遍周(八)埏。願はくは言に聖德を同じうし、濡沃周埏に遍からむことを。

【字解】【一】和氣　陽和の氣、五經遺義に「和氣精液、凝つて露となる」とある。【二】光溥　何法盛の晉中興書に「甘露は仁澤なり、その潤ること脂の如く、その甘きこと飴の如く、青老敬を得れば、松柏、これを受く」とある。【三】朝還泫　泫は露の潤ふ貌。【四】芳穠　香氣あつて、どろどろして居ること。【五】蚌珠　眞珠を云ふ。【六】歌難喻　歌うても十分に言ひ盡せない。【七】沈痾　不治の痼疾。【八】飲易痊　洞冥記に「東方朔、玄露青露を得、青琉璃器に盛り、各五合を承け、以て武帝に獻ず。帝、飲れば、老者曾少く、疾者曾愈ゆ」とある。【九】周埏　正韻に「埏は地際なり、八埏は地の八際」とある。世界中殘る隈なくといふ義。

【題義】洪武二年十月、甘露が皇宮後庭の柏樹の上に降つたといふので、主上は、それを取つて、侍從に示された。予高啓も、亦たこの嘉瑞を拜見することが出來たから、この詩を賦して、それを頌したといふ意。宋濂の甘露頌の序に「洪武二年十月十三日、膏露、乾清宮後苑の蒼松に降る。上、特に中官に敕し、折つて禁林の諸臣に示さる」とあるのと併せ觀ると、後庭は乾清宮、卽ち天子正殿の後苑、靑邱は柏樹といひ、宋濂は蒼松といひ、これは何れが正しいか、一寸分からぬ。

【詩意】乾坤に磅礴したる陽和の氣は、融けて液となり、夜中に碧天から降り注いだ、それが卽ち甘露であつて、その光は、溥溥として、高い柏樹の上に止まり、かばかり、奇しき絕代の祥瑞が、内庭の前に現はれたのは、御目出たいことである。甘露は、日光に逢つても、朝の中は、猶ほ溼うて居たが、やがて、風に當つた爲に、晩には、すつかり堅く成つて居た。その香ばしくして、どろどろして居ることは、蜂蜜の滑かなるに比すべく、かたまつて的皪たるは、眞珠の圓かなるに似て居る。その厚澤は、とても歌つた處で、十分に盡し難く、不治の痼疾も、これを飲めば、全癒する。願はくは、ここに、天子の聖德と同じく、萬物を霑して、世界中、到らぬ隈も無い樣にしたいものである。

冬至車駕南郊

冬至、車駕南郊

駕動(一)百靈訶。齋宮午(二)夜過。駕動いて、百靈訶し、齋宮、午夜過ぐ。
禮行因(三)日至。樂奏合(四)雲和。禮の行はるるは、日至に因り、樂は奏して、雲和に合す。
配(五)祖崇周典。祈(六)年陋(七)漢歌。祖を配して周典を崇び、年を祈つて漢歌を陋とす。
璧(八)陳孤月滿。燎(九)發衆星羅。璧は陳して孤月滿ち、燎は發して衆星羅す。

秩秩威儀盛。穰穰福祉多。　秩秩として威儀盛に、穰穰として福祉多し。
慶成應預喜。四海沐恩波。　慶成つて、應に預かり喜ぶべし、四海、恩波に沐す。

【字解】【一】駕動　天子の御車が御出かけになる。【二】百靈訶　多くの神神が護衛して居る、玄桃の七觀に五嶽賛裏、百靈護訶とある。【三】齋宮　お祭をする宮殿。【四】午夜　夜半。【五】日至　太陽が冬至線に來る、卽ち冬至。【六】雲和　琴の名、周禮春官大司樂に「雷鼓、雷鼗、孤竹の管、雲和の琴瑟、雲門の舞、冬日、地上の圜邱に於て之を奏す」とある。【七】配祖　主として天を祀り、且つ先祖を合祀する。【八】周典　禮記の祭法に「后稷を郊祀して、以て天に配し、文王を明堂に宗祀して、以て上帝に卽す」とある。【九】新年　年の豐ならむことを祈る。【一〇】漢歌　漢書禮樂志に「武帝、郊祀の禮を定め、乃ち樂府を立て、十九章の歌を作り、正月上辛を以て、事を甘泉圜丘に用ひ、童男女七十人をして俱に歌はしむ」とある。【一一】雙陳　周禮大宗伯に「蒼璧を以て天に禮し、黃琮地に禮す」とある。【一二】燎薪　周禮大宗伯に「實柴とは、牲を柴に實たして之を燔くなり、槱燎とは、柴を燔き、煙を升らしめ、以て其誠を達するなり」とある。【一三】秩秩　順序立つて居る貌。【一四】穰穰　繁多にして盡きざる貌。

【題義】この詩は、冬至の日、天子、南郊に幸して、天を祀られた盛儀を記したのである。明典彙に「洪武二年冬至、昊天・上帝を圜丘に祀り、仁祖を奉じて、位に配す」とある。

【詩意】鳳輦が一たび出ると、百神、これを呵護し、その齋宮に到著されたのは、夜半を過ぐる頃であつた。ここに、郊祀の禮を行はれるのは、丁度、冬至に當つたからであるし、樂を奏して、雲和の琴瑟に合はせる。その祖先を配祀されたのは、周家の典禮を重んじて、これに準據されたのであるし、來年の豐穰を祈ることに就いて、漢の郊祀歌などは、取るにも足らぬものと成つて仕舞つた。その蒼璧を供へた時は、一輪の月が正に滿ちたるが如く、燎火を焚くのを見ると、多くの星が羅列して居る樣である。これを一概すると、威儀秩秩として盛に、福祉穰穰として多く、まことに莊嚴の極、そこで、さしもの御祭が、滯りなく濟むと、いづれも、これに參與したことを喜悅せざるなく、四海の際涯までも、恩波に沐浴することであらう。

禁中雪

君王元尙儉。臺殿忽瓊瑤。
環素凝宮沼。飛花綴苑條。
坊雞驚曙早。仗馬喜寒驕。
金扇開時看。丹墀掃後朝。
台司呈賀表。樂部奏仙謠。
須信陽光近。都先別處消。

禁中の雪

君王、元と儉を尙ぶ、臺殿、忽ち瓊瑤。
環素、宮沼に凝り、飛花、苑條を綴る。
坊雞、曙の早きに驚き、仗馬、寒に驕るを喜ぶ。
金扇開く時に看、丹墀掃うて後に朝す。
台司、賀表を呈し、樂部、仙謠を奏す。
須らく信すべし陽光近づき、すべて先づ別處より消ゆるを。

【字解】【一】環素　純白色の圓環。【二】坊鑣　宮中に飼はれて居る鑣。【三】仗馬　儀仗の用馬。【四】金扉　黄金製の殿扉、龍都剣の製に「駕春游」詩に雙鳳鳴開金翅扉とある。【五】丹墀　赤い敷瓦を張り詰めた階下の地。【六】台司　章莊の詩に玉函瑤檢下二台司一とある。漢では、司徒・司空・太尉を三司となし、これを天上の台星に比して台司といつたので、今でいへば内閣。【七】樂部　今の雅樂部。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】君王は、元來、節儉を旨とせられるが、上天は之に感じ、瓊瑤を以て臺殿を飾つて見せられた。宮内の池沼は、寒に凝つて、圓環の如く、苑中の枝條は、花を綴つて、觸るれば飛ばむとして居る。宮中の雞は、夜の早く明けたことに驚き、儀仗の用馬は、却つて元氣よく寒氣に驕る樣である。宮人は、金扉を開いた時に、初めて此景色を見たであらうし、やがて、丹墀の雪を掃ひ除けてから、早朝の儀式を行はれる。台司よりは、逸早く、諸方から差し出した賀表を一まとめにして捧呈し、樂部に於ては、特に目出たい歌に合せて、音樂を奏する。しかし、太陽が出かけると、この宮中を除いて、外の處から消えて行くに相違ないので、禁中の雪景は、もとより、この世の物ならず、天も心あつて、成るべく長く留めて置きたいと思ふからであらう。

封建親王賜百官宴

親王を封建し、百官に宴を賜ふ

漢運初興日。周藩竝建年。

漢運、はじめて興るの日、周藩、竝び建つの年。

辨方分社土。當陛列宮縣。

方を辨じて社土を分ち、陛に當つて宮縣を列す。

上相傳金册。中官闢綺筵。

上相、金册を傳へ、中官、綺筵を闢く。

誓期山作礪。恩瀉酒如川。

誓は期す、山の礪と作るを、恩は瀉いて、酒、川の如し。

仙李千枝茂。天潢幾派連。

仙李、千枝茂り、天潢、幾派か連る。

百僚咸醉喜。拜舞赤墀前。

百僚、咸な醉喜、拜舞す赤墀の前。

【字解】【一】周藩竝建年　史記周本紀に「功臣謀士を封じ、師尚父を首封となし、營丘に封じて齊といひ、弟周公旦を曲阜に封じて魯といひ、召公奭を燕に封じ、弟叔鮮を管に、叔度を蔡に封じ、餘皆次を以て封を受く」とあり、左傳に「竝に宗室を建て、以て周を藩屏す」とある。【二】辨方　方角を辨別する。周禮に「惟れ王、國を建て、方を辨じ、位を正す」とある。【三】分社土　社は土神、その廟の處の土に代へて分つ。漢舊制に「天子、大社、五色の土を以て壇となし、諸侯に封ずるものは、方面の土を取り、苴むに白茅を以てして之を授く、故に之を茅土を授くといふ」とある。【四】宮縣　旗をいふ、周禮地官小胥に「王は宮縣、諸侯は軒縣、卿大夫は判縣、士は特縣」とあつて、その注に「宮縣は、四面皆縣、宮に象あるが如きなり」とある。【五】上相　宰相。【六】金册　即ち印券。【七】中官　宮内官。【八】山作礪　漢書功臣表に「黄河をして帶の如く、泰山礪の若く、國、以て永く存し、ここに苗裔に及ぼしむ」とある。【九】仙李　韓偓の詩に仙李濃陰潤、皇枝密葉數とある。【一〇】天潢　銀河、天上の河、張衡の賦に乘三天潢之汎汎二兮とあつて、その注に「天潢は天津なり」とあり、唐の太宗の詩に疏派引三天潢一とある。【一一】赤墀　丹墀に同じ。

【題義】諸親王に地を與へて、各〻王に封せられたるに就いて、百官に宴を賜はり、青邱も、その宴に陪席して、この詩を作つたのである。泳化類編に「洪武三年四月、子桱等十人、及び姪守謙を封じ

て王と爲し、禮成つて廟に告げ、羣臣を奉天門文華殿に宴す」とあるのは、卽ち此時の事に係るのである。

【詩意】大明の天子が天下を統一されたのは、漢室の運、初めて勃興したる當日に同じく、今次、大に子姪を封せられたのは、周の羣藩が竝び建つた其時に似て居る。そこで方角を辨別して、これに應じたる社土を分ち賜はり、又殿陛の前に當つて、特用の旗を列立した。宰相は、恭しく印劵を傳達し、中官は、ここに御祝の宴を催した。その誓の言葉は、泰山も礪となるまでといふので、悠久に渝はらざるを期し、聖恩と共に瀉がるる酒は、川の如くである。これより、仙李は、愈よ枝を增して茂盛すべく、天上の流は、幾派も相連つて、決して絕ゆることなく、まことに、目出たいことである。そこで、百僚は、皆快く醉うて、喜悅の情に堪へず、丹墀の前に於て、一齊に拜舞した。

【餘論】梟藻集を見ると、封二建親王一賀二東宮一牋といふ一文がある。靑邱は、この頃、太子竝に諸王の講經に侍して居たから、特に賀箋を太子に上つたので、もとより、同時の作であるから、念の爲め、左に全文を引抄して、參照に供することにする。

監レ國撫レ軍、久緊二兆民之望一、建レ邦作レ輔、大頒二同姓之封一、隆典式修、輿情均慶、恭惟皇太子殿下、地居二震長一、道合二乾剛一、孝奉二兩宮一、每問二安於曉寢一、友懷二諸弟一、共講二學於春坊一、既膺二主鬯之崇一、復舉二分茅之盛一、本支茂衍、宗社奠安、某等忝預二台司一、敢伸二賀悃一、河如レ帶、山如レ礪、永存二萬世之傳一、日重光、月重輪、敬上二千秋之祝一、

送安南使者杜舜卿還國、應制、并序、

安南の使者杜舜卿の國に還るを送る、應制、并に序

安南初入貢、朝廷遣二翰林學士張以寧一、賫二詔冊一、其主爲レ王、及境而薨、其世子遣二舜卿一來告レ哀、且請レ命、及還命二朝臣一、賦詩送レ之、

【訓讀】安南、はじめて入貢す、朝廷、翰林學士張以寧を遣し、詔を賫らし、その主を冊して王と爲す。境に及んで薨ず。その世子、舜卿を遣し、來つて哀を告げ、且つ命を請はしむ。還るに及び、朝臣に命じ、詩を賦して之を送る。

南粵知文化。來庭喜最先。
地書通漢日。貢紀入周年。
號冊纔臨境。容衣忽掩泉。
使蒙天語唁。嗣許國封傳。

南粵、文化を知り、來庭、最も先なるを喜ぶ。
地は書す漢に通ずるの日、貢は紀す周に入るの年。
號冊、わづかに境に臨み、容衣、忽ち泉を掩ふ。
使は天語の唁を蒙り、嗣は國封の傳ふるを許さる。

曉闕晴飛鳳。炎溪晚墜鳶。　曉闕、晴、鳳を飛ばしめ、炎溪、晩に鳶を墜す。
往來時物異。存歿聖恩全。　往來、時物異に、存歿、聖恩全し。
詔去開蠻霧。帆歸望海天。　詔去つて蠻霧を開き、帆歸つて海天を望む。
但修忠順節。世業自綿延。　但だ忠順の節を修めよ、世業、自ら綿延。

【字解】【一】南粤　即ち安南。【二】來庭　入朝すること、詩經に徐方來庭とある。【三】最先　泳化類編に「この時、安南、首として先づ款を納る。太祖喜び、因つて書して訓と爲し、後人の其國を伐つを許さず」とある。【四】通漢日　南越王趙佗が漢に服屬したこと、史記南越列傳に見ゆ。【五】入周年　越裳氏が白雉を周に獻ぜしこと、尚書大傳に見ゆ。越裳は、即ち後の南越。【六】鉞斧　王鉞を賜はつた封册。【七】容衣　遺骸に著せる衣、即ち今云ふ經かたびら。韓愈の挽辭に容衣入二夜臺一とある。【八】天語暗　天語は天子の言葉、暗は生者に對して悔みをいふ。宋濂の送杜舜卿序に「舜卿、哀を朝に告ぐ、帝、羣臣を帥ゐ、素服して西苑に受見し、慰問良や久しく、惻然痛悼、遂に親ら文を爲つて以て祭る」とある。【九】國封傳　封ぜられた國土を相傳する。泳化類編に「安南國王陳日煃、陪臣同時敏等を遣して朝貢せしめ、遂に封書を請ふ。洪武己酉六月、侍讀學士張以寧・奥薄牛諒を遣し、日煃を封じて安南王となす、至る比、日煃卒す。弟日熞詔印を迎へて嗣を乞はしむ。以寧、許さずして曰く、詔を奉じて、爾の先君を封す、世子に非ざるなり、當に再び請ふべし、と。日熞、又少中大夫杜舜卿等を遣して、朝に請はしむ。遂に日熞を封じて、王となす」とある。【一〇】曉闕晴飛鳳　王維の詩に漢高帝城雙鳳闕とあるを翻用す。【一一】炎溪晚墜鳶　元稹の詩に炎溪暑不レ徂とあり、後漢書馬援傳に「援曰く、吾が浪拍西里の間に在るに當つて、下潦上霧、毒氣薰蒸、仰いで飛鳶を視れば、跕跕として水中に墮つ」とある。【一二】時物　季節の景色。【一三】綿延　長く引き續く。

【題義】序の意は――安南國が初めて入貢したから、朝廷では、翰林學士張以寧を遣し、詔敕を齎らし、その主陳日煃を册封して國王と爲す積りであつたが、以寧が、やつと國境に到著した頃、日煃は病死し、その後嗣の日熞は、杜舜卿を遣して其訃を報せしめ、且つ指圖を乞うた。その舜卿が將に還らむとする時、天子は特に朝臣に命じ、詩を賦して之を送らしめられたから、予も此詩を作つた――といふのである。一統志に「安南は、廣西・雲南の界、海に濱す、古しへの南交の地、秦には象郡に屬す。漢の武帝、南越を平らげて、交趾、九眞、日南の三郡を置く。唐には、交州と改む。明の洪武の初、歸附す、安南國王の印、姓陳氏を賜ふ」とある。次に張以寧は、列朝詩集に「字は志道、古田の人、泰定丁卯の進士に登り、至正中、翰林學士承旨に官し、祭酒に拜せらる。國初歸附して侍讀學士となり、三たび安南に使して卒す。著すところ、翠屏集あり」と記してある。

【詩意】安南國は文化に向ふを知り、そして、來朝歸服したのは、第一番であつた。その地は、むかし、漢に通じたこともあるし、又遠き昔、周に入貢したことがあつて、いづれも史乘に明記してある。曩に號册を齎らして、天使が纔に其境に臨んだ時、國王は俄に薨じ、容衣に著換へさせられて、墳墓は黄泉を掩うたといふことで、まことに、氣の毒の至。そこで、態態杜舜卿といふ者を使として上京せしめた。處が、その使は、辱くも、天子から直直に御悔みの言葉を賜はり、その後嗣は、國土を其儘承け傳へることを許された。その地に於ては、宮闕嵯峨、晴れた朝には鳳凰の飛ぶのが見えるが、炎熱に滿ちたる溪谷には、日暮に、鳶までが、毒氣に中てられて水に落ちるといふ話。今、君は往

來の途すがら、季節の景色を見、中國は流石に異なつて居るのに感せしなるべく、又國王の生死とも に、聖恩を全うせられたことを感謝するであらう。そこで、下し賜はつた詔書は、遙に其國に向ひ、 蠻霧を推し開いて運ばれることであるし、君の乘る歸舟は、海天蒼茫の間を望んで行くことと思ふ。 何は兎もあれ、天朝に對しては、あくまで忠順の節を守るが宜しく、さうすれば、その業を世にして、子孫の末までも綿綿として續くことであらう。

送高麗賀正旦使張子溫還國

高麗の賀正旦使張子溫の國に還るを送る

丹鳳雲中闕。玄菟海外城。　丹鳳雲中の闕、玄菟海外の城。
新陽初獻歲。遠使盡朝京。　新陽、はじめて歲を獻じ、遠使、盡く京に朝す。
卉服充王貢。珠旒仰聖明。　卉服、王貢に充て、珠旒、聖明を仰ぐ。
花飛辭上國。日出指歸程。　花は飛んで上國を辭し、日は出でて歸程を指す。
車餞都亭曉。帆開島嶼晴。　車は餞す都亭の曉、帆は開いて、島嶼晴る。
莫辭頻入賀。寶曆萬年盈。　辭する莫れ、頻りに入つて賀するを、寶曆萬年盈つ。

【字解】【一】丹鳳雲中闕　南京なる宮闕を指して云ふ、丹鳳が常に翔舞して居るといふので、祥瑞の意を含めて云つたのであらう。【二】玄菟海外城　漢の武帝の時に、朝鮮を平定して、眞番・臨屯・樂浪・玄菟の四郡を置いたことが史記朝鮮列傳に見えて居る。高麗の都は開城で、卽ち古しへの玄菟の城内である。【三】獻歲　年始に就いて壽を獻ずる。唐の德宗の詩に、獻歲親三元朔二萬方咸在レ庭とある。【四】卉服　書經に島夷卉服とあつて、草の業を綴つて衣となすといふ義。【五】珠旒　旒は冠の兩端から垂れて居る玉の飾り。後漢書輿服志に「晃は白玉珠を懸けて十二旒となし、その綬の采色を以て組纓となす」とある。【六】都亭曉　漢書疏廣傳に「故人邑子、祖道を設け、東都門外に供帳す、送るもの車數百兩」とあつて、送別の宴は、都門の外で開くことになつて居る。丁度、むかし、江戸から出立する人を品川或は千住まで送つて、そこで、別れの酒を酌む樣なものである。【七】寶曆　今上の御宇、餘陵の徽周文に、主上恭膺二寶曆一嗣二來祺一とある。

【題義】金檀注には、泳化類編に「壬子、高麗王顓、禮部尙書吳季南・工部尙書張子溫を遣し、來つて朝貢せしむ」とあるのを引いてある。壬子は洪武五年、靑邱の死ぬる三年前で、すでに、都に居なかつたが、或は其事を傳聞して、態態詩だけを贈つたのかも知れない。しかし、年譜には、洪武三年に係けてあるので、張子溫は、その時、矢張、來朝したのを、類編には之を落して居るのであらうか。

【詩意】天子の在ますところは、雲中に雙闕巍峩として、丹鳳が每に飛舞して居るし、君は、海外の玄菟城から、はるばる來朝したのである。新年に當つて、御喜びを申し上げむが爲に、他の外國の使と共に、すつかり、ここに著京した。島夷の卉服は、以て王庭の貢物に當つべく、聖明の天子が冕冠に珠旒を垂れて居られるのを仰ぎ瞻て、その誠意を表した。やがて、春の末、花の散る頃、はじめ

て、上國を辭し、日の出づる方に向つて、歸程を指して出發する。都亭の曉早く、朝臣輩は、車から下つて餞を爲し、帆が開けば、遠くに島嶼晴れわたつて見え、これならば、海路の障りも無い樣である。天子の盛德は、古今に稀で、しろし召す御代は、萬年の久しきに亙るであらうから、君は、猶ほ引き續いて、入賀されるに相違ない。

送鮑修撰出官關中

鮑修撰の出でて關中に官たるを送る

辭朝西入陝。車發動征塵。朝を辭して、西、陝に入り、車發して、征塵を動かす。
小麥行時熟。啼鶯別處頻。小麥、行く時に熟し、啼鶯、別るる處に頻りなり。
關前周故尹。灞上漢遺民。關前、周の故尹、灞上、漢の遺民。
直院青綾舊。臨川赤組新。院に直して青綾舊く、川に臨んで赤組新なり。
山連樂游苑。樹繞富平津。山は連る樂游苑、樹は繞る富平津。
君去方年少。還能論過秦。君、去つて方に年少、還た能く過秦を論ず。

【字解】【一】陝　陝西、卽ち長安附近。【二】周故尹　史記老子傳に「老子周に居ること、これに久しうし、廼ち遂に去つて關に至る。關令尹喜曰く、子、將に隱れむとす、わが爲に書を著はせ」とあつて、その注に「關令尹喜は、周の大夫なり、老子と俱に流沙に之き、その終るところを知らなし、亦た書九篇を著して關尹子と名づく」とある、【三】灞上　灞水の邊、卽ち霸陵。【四】漢遺民　韓康は霸陵の人、藥を長安の市中に賣り、後に遯れて霸陵山中に入つた。その詳は、前に卷三、詠三隱逸の第六首、題魏の作に見えて居る。【五】直院　翰林に宿直する。【六】青綾　漢官典職に「漢の尙書郎、入つて直するとき、青綾被、白綾被、或は錦被を供す」とある。【七】赤組　赤綬に同じ、地方官の印綬。【八】樂游苑　一統志に「西安府南に在り、樂游廟は曲江の北に在り、亦た樂游苑といふ」とある。【九】富平津　晉書杜預傳に「預、孟津、渡險なるを以て、請うて橋を富平津に建つ。成帝に及び、百寮を從へて、會に臨み、觴を擧げて、預に屬して曰く、君に非ざれば、この橋立たざるなり」とある。【一〇】過秦　賈誼は過秦論を著した。秦を咎むる、責むるといふ意で、秦の失政を攻擊したのである。

【題義】一統志に「西安府、秦には關中といふ」とあつて、卽ち古しへの長安である。この詩は、翰林修撰たりし鮑某が地方官に轉じて、長安に赴任するを送つたのである。但し、某の名字は不詳。

【詩意】君は、今次、朝廷を辭して、西、陝西に赴かむとし、車が發すると、征塵を動かさむとして居る。今しも、春の末、途すがら、小麥は、追追熟すべく、ここに別宴に臨めば、鶯が頻りに鳴いて居る。函谷關の前には、むかしの尹喜の舊宅があるし、霸陵を過ぎては、韓康といふ漢代の隱逸の事を思ひ出すであらう。これまで、翰林院に當直された時は、青綾被を擁して眠つたが、この度は、地方官の赤綬を賜はり、川に臨めば、その新らしいのが水に映つて見える。長安の附近、山は樂游苑に連り、樹は貫河なる富平津を繞つて居る。君は此を去つて、まだ年が若いから、かの賈誼の如く、古しへの歷史を研究して、過秦論をも著されるであらう。

送恩公還江心寺

恩公の江心寺に還るを送る

上人居寶地。勝處似金山。
上人、寶地に居り、勝處、金山に似たり。

樓閣開天界。波濤隔世寰。
樓閣、天界を開き、波濤、世寰を隔つ。

鐘聞孤嶼外。刹出亂雲間。
鐘は聞こゆ孤嶼の外、刹は出づ亂雲の間。

螺女晨修饌。龍君夜叩關。
螺女、晨に饌を修し、龍君、夜、關を叩く。

游方來暫會。辭闕去難攀。
游方、來つて暫らく會し、闕を辭すれば、去つて攀ぢ難し。

舊業菱生沼。離程柳映灣。
舊業、菱、沼に生じ、離程、柳、灣に映ず。

衣霑爐氣出。船載磬聲還。
衣は爐氣に霑うて出で、船は磬聲を載せて還る。

施貝來江估。持經化島蠻。
貝を施して江估を來らしめ、經を持して島蠻を化す。

諸緣除未早。半偈悟猶艱。
諸緣、除くこと未だ早からず、半偈、悟ること猶ほ艱なり。

安得如康樂。登臨此共閒。
安んぞ康樂の如く、登臨、此に共に閒なるを得む。

【字解】【一】寶地　佛の在るところを云ふ、淨域・靈境などに同じ。王勃の龍懶寺碑に、香城寶地、左右林泉とある。【二】勝處　風景勝絶の處。【三】金山　一統志に「金山は、鎮江府城西北江中に在り」と記し、周必大の筆錄に「この山、大江環繞、大風四に起る毎に、勢浮動するが若し、浮玉山と名づく。唐に奏頭陀あり、ここに山を開いて、金を得、名を金山と賜ふ」とある。【四】天界　天上の仙界。【五】螺女晨修饌　前に卷九、聖姑廟の詩中にも引いて置いたが、搜神記に「閩人謝端、一大螺を得、斗の如し、これを家に寄ふ。歸る毎に、盤餐必ず具はる。因つて、密に伺へば、乃ち一絺麗姿し。これを問へば曰く、われは、天漢中、白水の素女、天帝、われを遣し、君の爲に食を具へしむ。今當に去るべし、殷を留めて君に與へむと。端、用ひて以て纏を居く、その米、常に滿つ」とある。【六】龍君夜叩關　前に卷四、贈三惠山僧東山一の詩中にも引いて置いたが、仙傳拾遺に「開元中、孫思邈、終南山に隱れ、宣律師と相接す。時に大旱、西域の僧、昆明池に於て壇を結び、雨を祈らむことを請ふ。凡そ七日、水を縮むる數尺。忽ち老人あり、來、宣律師に謂つて救を求めて曰く、弟子は昆明池の龍なり、雨なき時久し、弟子に由るに匪ず、胡僧、弟子の靈を利し、將に藥と爲きむとし、天子を欺き、雨を祈るといふ。命、且夕に在り、乞ふ、和尙、法力救護せよと。宣公辭して曰く、貧道、律を持するのみ、孫先生に求むべしと。老人因つて至る。思邈謂うて曰く、われ昆明龍宮に仙方三十首あるを知る。もし能く予に示さば、予、將に汝を救はむとす。老人曰く、この方、上帝妄りに傳ふるを許さず、今急なり、もとより怪むところなし、と。頃らくあつて、方を捧げて至る。思邈曰く、甞、但だ還れ、胡僧を慮るなかれと。これより、池水忽ち溢り、數日にして岸に溢る、胡僧、龐悲して死す」とある。【七】去離攀　一たび去れば追跡することが出來ない。【八】舊業　むかし住んで居た處。【九】離程　旅路。【一〇】施貝　貝を喜捨する、貝は眞珠の如き珍貝。【一一】江估　江上の商估。【一二】半偈　詩を云ふ、李端の贈三隱禪師一の詩に半偈傳初盡、羣生意未一迴とある。【一三】康樂　南史謝靈運傳に「靈運性豪侈、衣服多く舊制を改む、世、ともに之を宗とし、成な謝康樂と稱するなり」とある。はじめ、謝玄、康樂侯に封ぜられ、靈運は、その孫なり以て封を襲ぎ、亦た康樂と稱した。山に游ぶを好み、永初三年、出でて永嘉郡守となり、登三江中孤嶼一の詩等がある。

【題義】江心寺は、浙江通志に「寺は溫州府城北江の中に在り、東西二塔あり、一に龍翔興廢院と名づく。宋の建炎の初、高宗、海を航して、蹕を此に駐め、御書、清暉。浴光二軒の扁、石に刻す」

とある。恩公の本名は不詳。

【詩意】上人は、清淨の靈地に居り、その風景勝絶の處は、江中の金山に似て居る。樓閣高下、さながら、天上の仙界を現出し、波濤浩渺、遠く俗界を隔て、鐘は孤嶼の外に聞こえ、伽藍は亂雲の間から湧き出づる。處がら、螺女は朝ごとに來つて食事の世話を爲し、龍王は、夜、ひそかに門を敲くことがある。上人は、四方に飛錫した序を以て、都に居られたから、しばらく、相遇ふことが出來たが、今次、闕を辭して歸り去つた上は、容易に追跡することが出來ない。今まで居た處は、追追、荒廢して、菱が池に茂り、旅路は春に入つて、柳が入江に映じて居る。衣には、宮中の爐氣を帶びた儘で退出し、船には磬聲を載せて還つて行く。すると、江中の商人は、眞珠などの珍貝を喜捨するであらうし、上人は、又有り難い御經を持ち出して、島上の蠻夷どもを敎化される。ここに、予は諸の俗緣を早く除き去ることが出來ず、詩にばかり耽つて居て、悟ることは、なかなか六つかしい。出來るならば、古しへの謝康樂の如く、山水の游に耽り、江山寺にも一度登臨して、上人と共に、清閒を樂みたいと思ふばかりである。

喜楊滎陽赴召至京、過宿寓館

楊滎陽が召に赴き、京に至りて、寓館に過宿するを喜ぶ

忽作天涯會。渾銷歲暮哀。
高城三鼓動。虛館一尊開。
鄰馬嘶空櫪。江鴻過廢臺。
飲餘寒色退。談絶雨聲來。
涉患功名倦。忘歸故舊猜。
闕前新應召。須讓子雲才。

【字解】【一】高城　高い城樓・鼓樓を指す。【二】三鼓　三更を報ずる鼓聲。【三】虛館　人もなき空館。【四】寒色　寒さうな顏色。【五】子雲才　子雲は揚雄の字。

【題義】楊滎陽は楊基、曩に滎陽の知縣たりしが故に云つたので、前に之に寄せた五古の長篇があつた。列朝詩集の小傳を見ると「王師の姑蘇を下すや、饒氏の客たるを以て、臨濠に安置し、旋つて、河南に徙さる。洪武二年、放ち歸され、尋いで起して滎陽に知とし、鍾離の間に謫居し、秣陵に居る。これに久しうして、薦を用つて、江西行省の幕官となる」とあるが、この詩題で見ると、朝廷から召し出されて、滎陽から上京したので、その時、青邱の寓居を過ぎて一宿したから、この詩を作つて示したのである。

【詩意】君とは、蘇州の北郭に於て、日夕往來したのだが、ここに、天涯に於て偶然相會し、折から、歳晩の悲哀なる思を消すことが出來た。高い鼓樓に於て、三更を報ずる頃、人もなき空館に於ては、一尊を開いて獻酬する始末。鄰家では、馬が廐に嘶いて居るし、江天の雁は、廣臺を過ぎて叫んで居る。やがて、飲んだ揚句には、不景氣な顏色も、どうやら直り、話が絶えた時、雨の音が初めて聞こえた。憂患に渉るに至つては、功名を求むることも厭になり、歸るを忘れて居ると、鄕里の故舊どもが氣にして、頻りに呼び寄せたがつて居る。しかし、君は、今次新に召に應じて闕下に朝するとのことで、古しへの揚子雲に比すべき宏才は、到底、予の及ぶところではない。

戲嬰圖

芍藥風欄側。梧桐露井傍。
嬌嬰爭晩戲。少婦鬬春妝。
共詫珠生蚌。還憐玉產岡。
半披文錦褓。斜佩紫羅囊。
額髮葳蕤短。胸胞細膩光。

戲嬰の圖

芍藥風欄の側、梧桐露井の傍。
嬌嬰、晩戲を爭ひ、少婦、春妝を鬬はす。
共に詫る珠の蚌に生ずるを、還た憐む玉の岡に產するを。
半は、文錦の褓を披き、斜に紫羅の囊を佩ぶ。
額髮、葳蕤短く、胸胞、細膩光る。

庭前王氏子。陌上衞家郎。
弱草身眠軟。芳英手弄香。
隨人貪作劇。避伴學迷藏。
莫撲花蝴蝶。宜爲蠟鳳凰。
塗添雲母粉。浴試水沈湯。
憐送徐卿宅。蘭生謝傅堂。
愛均看總好。年竝比誰長。
驥種雖難匹。鵷雛已作行。
欣君得此畫。眞是夢熊祥。

庭前王氏の子、陌上衞家の郎。
弱草、身、軟に眠り、芳英、手、香を弄す。
人に隨つて劇を爲すを貪り、伴を避けて迷藏を學ぶ。
撲つ莫れ花の蝴蝶、宜しく爲るべし蠟鳳凰。
塗つては雲母の粉を添へ、浴しては水沈の湯を試む。
憐は送る徐卿の宅、蘭は生ず謝傅の堂。
愛均しく、看て總べて好し、年竝び、誰に比して長し。
驥種、匹し難しと雖も、鵷雛、すでに行を作す。
欣ぶ君が此畫を得たるは、眞に是れ熊を夢むるの祥。

【字解】【一】風欄　風の吹き度る欄干。【二】露井　屋根なき井戸、上の風欄とは文字だけの對である。【三】嬰　愛すべき嬰兒。【四】晩戲　日暮まで游び戲れる。【五】珠生蚌　前に卷十一、張仙畫像の詩中にも引いて置いたが、北齊書陸卬傳に「卬少にして善く文を屬し、甚だ河間の邢邵に賞ぜらる。邵、又卬の父子彰と交游す。かつて、子彰に謂つて曰く、吾以ふ、卿、老蚌、遂に明珠を出す」とある。【六】玉產岡　王安石の崑山の詩に玉人生二此山一、山亦傳二此名一とあつて、その自注に「世傳ふ、陸氏の家、欄雲を生ず、故に崑山と名づく、玉を生ずるを言ふなり」とある。【七】文錦褓　模樣ある錦で造つた襁褓、卽ち兒衣、戴表元の和二得レ子詩一

に錦襖看爭羨とある。【八】紫羅囊　晉書謝幼度傳に「少にして、好んで紫羅の香囊を佩ぶ。叔父安、これを患へ、しかも、その意を傷くるを欲せず、因つて、戲に謂して、取つて即ち之を焚く」とある。【九】蘚茸　ふさふさしたる貌。【一〇】胸脯　胸の肉。【一一】細膩　肌理が細かで膩ぎつて居る。【一二】王氏子　南史王僧虔傳に「父曇首、兄弟と子孫を集會して、その戲遊に任かす。僧達、誌つて地に下り、鬼子と作る。時に、僧虔、十二博奕を果れ、すでに墜落せず、亦た重れて作さず。僧綽は、蠟燭の珠を採つて鳳凰を爲る。僧達、奪ひ取つて打壞し、亦た復た惜まず。伯父弘、歎じて曰く、僧達は俊爽、當に人に減ぜざるべし、然れども、吾が家を亡ぼすものは、必ず此子ならむ。僧虔は、必ず公に至らむ。僧綽は、當に名譽を以て美を見はすべし」とある。【一三】衛家郎　晉書衛玠傳に「少時、羊車に洛陽の市に乘ず、見るもの、以て玉人と爲す」とある。【一四】翦草　若草。【一五】作劃　劃は溝畝、孝白の詩に采び花門前劃とある。【一六】迷蔵　かくれんぼ、致虛雜俎に「明皇、玉眞と恆に候月の下に於て、錦帕を以て目を裹み、方丈の間に在つて、互に相提へて戲れ、これを提迷蔵といふ」とある。【一七】蠟鳳凰　上の王氏子の項に見ゆ。【一八】雲母粉　列仙傳に「方回は、晃時の隱人なり。晃、聘して以て國士となす、鍊つて雲母粉を食ふ」とあり、顏氏家訓に「梁朝、全盛の時、貴游の子弟、多く學術なく、衣を篤し、面を剃り、粉を傅け、朱を施さざるなし」とある。【一九】水沈湯　本草に「木の心節、水に置けば沈む、故に沈水と名づけ、亦た水沈といふ」とある。水沈は香木の名、この香水を交ぜて沸かした湯。【二〇】麟送徐稚宅　南史徐穉傳に「穉、字は孺穆、年數歲、陳寶誌、その頂を摩して曰く、天上の石麒麟なり」とあり、杜甫の徐稚二子歌に孔子釋氏親抱送、並是天上麒麟兒とある。【二一】蘭生謝傅堂　謝傅は謝安。晉書謝玄傳に「從兄朗と叔父に器とせらる。曰く、子弟、亦た何ぞ人事に預からむ、しかも、これをして佳ならしめむと欲す。玄曰く、芝蘭玉樹の如きは、階庭に生ぜしめむと欲するのみ」とある。【二二】驥種　名馬の種、東坡の詩に象ゞ賢眞驥種とある。【二三】鳳凰　鳳凰の別名、莊子の秋水に見ゆ。楊巨源の詩に桂林枝上得三鵬雛一とある。【二四】夢熊祥　男子を擧ぐべき瑞祥、詩經に其夢維何、維熊維羆とある。

【題義】この詩は、子供の游んで居る處を畫いた圖に題したのである。

【詩意】芍藥の風吹き度る欄干の邊、梧桐の立てる屋根なし井の傍に於て、愛らしき幼兒どもは、日暮まで游び戲れ、その世話を燒いて居る少婦は、春妝を闘はして、いかにも見よげである。幼兒どもは、いづれも將來に囑望される樣な賴母しき者どもで、或は老蚌の明珠を生みしを誇り、或は崑山に玉を產せしを得意とする程のものばかり。その支度はといへば、半ば模樣ある錦で造つた襁褓を著流し、御守りとして斜に紫羅の香囊を佩びて居る。額の髮は、ふさふさとして短く、胸の肉は、肌理こまかに膩ぎつて光つて居る。たとへば、王氏の子供等が庭前に羣れ集ふが如く、衛玠が陌上を行く樣な工合。ある者は、若草の上に身を横へて眠つて居るし、ある者は、手に花を摘んで、その香を弄んで居るし、ある者は、人にくッ付いて何かいたづらを爲さうとして居るし、ある者は、かくれんぼの游戲に際し、仲間を避けて、容易に見つからぬ處に匿れやうとして居る。その顏には、雲母の粉を塗り、浴する時は、水沈の香水を交せて沸かした溫湯に限られて居る。徐氏の家に天上の石麒麟が送られ、謝安の堂上に芝蘭玉樹が生じたといふのも、かくやと疑ふばかり。どれを見ても、愛らしくて、すべて宜しく、年配も大抵似たか寄つたかで、誰に比して身の丈が高いといふのも無い。名馬の種は、まことに世に類なきものであるが、ここには、鳳凰の雛が行を爲して羣れ集まつて居る。君が此畫を得られたのは、まことに、お目出たいことで、かの熊を夢むといつたと同じく、やがて、男子を擧げられる瑞祥であらうと思はれる。

翫花池

桃枝兼杏枝。春色繞宮池。
正愛紅繁處。還憐綠淨時。
花香泛幽沚。媚影照清漪。
垂條看妓折。墮蕚見魚吹。
杯涵明月瀉。舟逐彩霞移。
水流花落盡。君王醉不知。

【字解】〔一〕紅繁　花が一ぱいに咲いたこと。〔二〕綠淨　新綠のさつぱりして居る貌。〔三〕幽沚　沚は汀岸。〔四〕媚影　なまめかしき花の影。〔五〕垂條　垂れた枝。〔六〕妓折　妓は宮女。〔七〕墮蕚　落花に同じ。

【題義】翫花池は、姑蘇志に「靈巖山に在り」としてある。すると、矢張、古しへの館娃宮の一名勝であつて、この詩も、矢張、懷古の意を寓してある。

【詩意】桃と杏と、一齊に咲き出で、賑はしき春色は、宮中の池を繞つて居る。紅繁き花の盛りは、もとより愛すべきも、さつぱりした新綠の時も、亦た可憐の趣がある。花の盛りの時は、その香が幽汀に浮び、なまめかしき影は、清き漣波に映つて居る。やや末になると、垂れた枝は、宮女で

も折つたものと思はれ、落花は、水に漾うて、魚が口で吹いて居る。游賞時を移し、杯には明月の影を涵しつつ酒をつぎ、舟は夕やけを逐うて移つて行く。榮華は、ひと時の眺めであるが、やがて水流れ花落ち盡すに至るも、君王は、醉うて知らず、春は長しへに在るものと思つて居られたらうが、それが、抑も間違つた了見であつた。

送高麗貢使還國

鳳闕層霄上。菟城積水東。
大君方啓運。絕域盡朝宗。
錫命分青土。趨班列紫宮。
船歸瞻出日。帆挂候西風。
雨露何沾渥。華夷已混同。
聖心非悅貢。惟念遠人忠。

高麗貢使の國に還るを送る

鳳闕、層霄の上、菟城、積水の東。
大君、方に運を啓き、絕域、盡く朝宗。
命を錫うて青土を分ち、班に趨つて紫宮に列す。
船は歸つて出日を瞻、帆は挂つて西風を候す。
雨露、何ぞ沾渥、華夷、すでに混同。
聖心、貢を悅ぶに非ず、惟だ遠人の忠を念ふのみ。

【字解】〔一〕鳳闕　宮城を云ふ。〔二〕菟城　玄菟城の略、前に送張子温還國の詩中に注して置いた。〔三〕積水　大海。〔四〕大君　大明の天子。〔五〕啓運　新に帝位に登りしこと。〔六〕分青土　前に封建親王の詩中に辨ず方分三社土一とあつた通り、

方角を辨別して、これに應ずる社土を賜はるので、高麗は東に當り、東は青色なるが故に、青土を賜はつたのである。【4】 趨班　百官の班列を追ふ。【5】 紫宮　紫宸に同じ。【6】 非悅貢　泳化類編に「上、中書省臣に諭して曰く、高麗の貢使煩數、一歲迭に至る。宜しく三歲一聘、或は比年一聘せしむべし。貢物は、產布十疋にして足れり、丞相其れ朕の意を以て王に諭せ」とある。

【題義】 この高麗貢使は、何といふ人か、又何年の事か分からないので、年譜にも書いてない。しかし、青邱が都に居たのは、洪武二三年の間であるから、いづれ、その時分の事であらう。

【詩意】 鳳闕は、魏巍として、層霄の上に聳え、玄菟城は、遙に隔つて、大海の東に在る。今しも、聖主は運を啓いて、新に卽位せられ、絕域の果までも、盡く朝宗した。そこで、高麗には、詔敕を賜はり、更めて王に封じ、東に當る處から、青土を分ち賜はり、その使臣は、班を趁うて紫宸の朝見に參列した。やがて、船歸れば、出日を瞻るべく、帆は追手の西風を伺うて挂けることに成つて居る。聖恩は雨露の如くして、物を霑すこと厚く、華夷、すでに混同し、世界中、帝命に服さないものは無い。且つ天子の御心では、貢物を喜ばれるのではなく、唯だ遠人の忠順を奇特に思はれるのであるから、使臣も、宜しく此意を體して、國王に篤と傳へるが善からう。

【餘論】 この詩の起首は、前の送張子溫還國の破題、丹鳳雲中闕、玄菟海外城と意象全く同じく、讀んで此に至ると、汁粉の後で、又牡丹餅を薦められる樣な氣がする。

韓蘄王墓

宋室中興日。將軍武略優。
功宜超賈鄧。名恥竝張劉。
白馬空南渡。黃龍竟北游。
誓擒諸部種。還報兩宮讎。
朝使頒金册。邊人識錦裘。
躍戈衝野陣。橫棹截江流。
殘虜亡魂走。中原指掌收。
未終藩閫寄。已惑廟堂謀。
坐散熊羆士。甘臣犬豕酋。
和戎詞易屈。復漢志難酬。
闕聳吳山曉。陵荒鞏樹秋。
廉頗歸未老。郭令罷誰留。

韓蘄王の墓

宋室中興の日、將軍、武略優なり。
功は宜しく賈鄧に超ゆべく、名は張劉に竝ぶを恥づ。
白馬、空しく南渡、黃龍、竟に北游。
誓つて諸部種を擒にし、還た兩宮の讎を報せむ。
朝使、金册を頒ち、邊人、錦裘を識る。
戈を躍らして、野陣を衝き、棹を橫へて、江流を截る。
殘虜、魂を亡うて走り、中原、掌を指して收む。
未だ藩閫の寄を終らず、すでに廟堂の謀を惑はしむ。
坐ろに熊羆の士を散じ、甘んじて犬豕の酋に臣たり。
戎に和して、詞、屈し易く、漢を復す、志、酬い難し。
闕は聳ゆ吳山の曉、陵は荒る鞏樹の秋。
廉頗、歸つて未だ老いず、郭令、罷めて誰か留めむ。

折(二四)檻言徒切。藏(二五)弓勢可憂。
俄看星隕(二六)壘。永使陸(二七)沈州。
感慨思前代。淒涼弔古丘。
劍花埋虎(二八)氣。碑蘚剝(二九)螭頭。
石騎嘶(三〇)風雨。山僧護(三一)檟楸。
鼓旗何寂寂。簡册漫悠悠。
父老悲猶在。英雄事已休。
棲霞嶺(三二)前墓。聞說更堪愁。

檻を折つて、言、徒に切、弓を藏して、勢、憂ふべし。
俄に看る星の壘に隕つるを、永く陸をして州を沈めしむ。
感慨、前代を思ひ、淒涼、古丘を弔ふ。
劍花、虎氣を埋め、碑蘚、螭頭を剝ぐ。
石騎、風雨に嘶き、山僧、檟楸を護す。
鼓旗何ぞ寂寂たる、簡册漫に悠悠。
父老、悲、なほ在り、英雄、事、すでに休む。
棲霞嶺前の墓、聞くならく、更に愁ふるに堪へたりと。

【字解】【一】宋室中興日　宋の高宗が南遷して臨安に都せしこと。【二】武略優　宋史韓世忠傳に「金人、劉豫と兵を合せて入侵す。世忠、親ら兵を提げて大儀に至り、遂に鎮宇也を擒にし、復た親ら追うて淮に至る。金人、驚いて潰え、溺死甚だ衆し。捷聞す。論者、この擧を以て、中興の武功第一と爲す」とある。【三】超買鄧　後漢書に「永平中、顯宗、前世の功臣を追感し、乃ち鄧禹・賈復等二十八將を南宮の雲臺に圖畫す」とある。【四】並張劉　宋史に「南渡の名將、張俊・韓世忠・劉錡・岳飛、四人並び稱す」とある。【五】白馬空南渡　晉書元帝紀に「太安の際の童謠に云ふ、五馬浮渡江、一馬化爲龍と。永嘉中に及び、帝、西陽・汝南・南頓・彭城と、五王濟るを得たり。而して、帝、竟に大位に登る」とあり、稗史に「康王、金に質たり、太子と同じく射り、三矢皆中つ。金の太子、宗室、武藝に長ずるものを選んで質となし、これを留むること益なきを意ふ。故に、高宗、これに由つて逸するを得、間道より奔竄し、淮府君の廟に假寐す。夢に神人曰く、金人、迫うて且さに至らむとす、馬を門首に備ふ、王、宜しく夜に行くべしと。康王驚いて覺め、勝躍して南に驍すること七百里、すでに河を渡つて、馬前まず、これを視れば泥馬なり」とあり、張蠡の行宮の詩に登知白馬興王日、又到紅羊換劫年とある。【六】黃龍寬北游　金人は徽欽二帝を挾んで北に之き、はじめ、これを黃龍府に置いた。後に、岳飛が直に黃龍府に抵つて、諸君と痛飲せむのみといつたのも、この地であつて、宋史の注には、遼東開元城外とある。この開元は卽ち今の開原、又吉林附近だらうといふ說もある。楊子承の詩に玉笛吹殘錢塘月、誰念黃龍慘三幕第一とある。【七】諸部種　金人は、元と滿洲のツングス族で、はじめ諸部落が集まつて、それから盛大になつた。【八】兩宮儲　徽欽二帝の儲。宋史韓世忠傳に「兀朮、窮蹙して會語を求む。世忠曰く、わが兩宮を還し、わが疆土を復さば、庶ほくは相全うすべし」とある。【九】頒金册　その功を賞して、大官に拜せられしこと。韓世忠傳に「世忠の兵、わづかに八千餘、金人十萬を拒ぐ、帝、凡そ六たび札を賜ひ、褒奬して檢校少保に拜す」とある。【一〇】識錦袞　韓世忠傳に「世忠、淮陽を圍む、堅守して下らず。はじめ、金人約するに圍を受くること一日なれば、一烽を擧ぐるを以てす。ここに至つて、六烽、ともに擧がる。兀朮、劉豫と皆至る。世忠、授を張俊に求む。俊、從はず、乃ち陣を勒して、敵に向ひ、人を遣して語らしめて曰く、錦衣驄馬、陣前に立つものは韓相公なり、と。或は之を危む。對へて曰く、かくの如くならざれば、以て敵を致すに足らずと。敵、果して至る。その專戰二人を殺して、遂に引き去る」とある。【一一】羅戈　韓世忠傳に「賊將苗翊・馬柔吉、山を負ひ、河を阻つて陣す。軍、すこしく却く。世忠、馬を舍て、戈を操つて前み、目を瞋らして大呼し、刃を挺して突き前む、賊、辟易して遂に敗る」とある。【一二】截江流　韓世忠傳に「金、すでに韃靼を得、廣德より臨安を破らむとす。世忠、金人の歸師を截らむことを謀り、前軍を以て青龍鎭に駐め、中軍は江灣に駐まり、後軍は海口に駐まる。金兵、至れば、世忠、すでに焦山寺に屯す。兀朮、日を約して、大に戰ふ。梁夫人、親ら桴鼓を執り、數十合に至る。金兵、終に渡るを得ず。晝く掠むるところを歸して、道を假らむことを請ふ、許さず。名馬を獻ぜむことを請ふ、又許さず。韃辣、雍州に在り、李蓋、太一を遣して來り授けしめ、黃天蕩に相持すること四十八日。李蓋、江北に軍し、兀朮、江南に軍す。世忠、海鰌を以て進んで金山に泊し、健卒に授くるに饑餒を以てし、大餉を貫く、敵舟、縁いで前む。海舟、兩道に分れて、その背に出で、一鏃を縱する

毎に、すなはち一舟を曳いて之を沈む」とある。【一三】 殘虜亡魂走　韓世忠傳に「兀朮、世忠の上流に在り、ひそかに半夜に於て塢を鑿つこと三十里。次日風止み、小舟に乘じ、江を絶つて遁れ去るを得たり。これより先、世忠、敵至らば、必ず金山廟に登つて、わが虛實を觀むことを料り、預め百兵を遣して廟中に伏し、百兵は岸側に伏し、鼓聲を聞いて內外合擊するを約す。果して、五騎あり、闖入す、伏發す、わづかに二人を得、その三を逸す、中に綉袍玉帶、馬より墜ちて復た聽するものあり、これを詰れば卽ち兀朮なり」とある。【一四】 中原指掌收　中原を回復することは、掌を指すが如く確實である。【一五】 落圖寄　落は落屏、圖は圖外。寄は寄託。つまり兵權を授かつて外敵を防ぐといふ重任。韓世忠傳に「秦檜、三大將を收め、權りに樞密使に拜す。公、遂疏して兵柄を解かむことを乞ひ、罷めて、醴泉觀祭使となる」とある。【一六】 熊羆士　書經に「熊の如く、羆の如し」とあつて、部下の猛士を云ふ。【一七】 大豕谷　大豕に比すべき發谷、卽ち金主を云ふ。【一八】 和戎　杜甫の詩に「龍鬚已和戎」とある。金人と和を講ずること。【一九】 復漢　曾鞏の陸中の詩に「垂成中興餘、復漢臨三秦川」とある。【二〇】 吳山　方輿勝覽に「吳山は、錢塘縣南に在り、上に伍子胥の廟あり、命じて胥山といふ」とあつて、金の海陵王が移、兵百萬西湖上、立ち馬吳山第一峰といつたのも、この地を臨視したのである。【二一】 棗樹　一統志に「棗縣は、河南府に屬す、周の棗伯の邑、宋の太祖の昌陵・太宗の熙陵・眞宗の定陵・仁宗の昭陵、皆在り」と見ゆ。【二二】 廉頗　史記廉頗傳に「趙の使者、すでに廉頗を見る、頗、これが爲に一飯に斗米肉十斤、甲を被り、馬に上り、以て尙ほ用ふべきを示す。趙の使、還つて王に報じて曰く、廉將軍、老いたりと雖も、尙ほ善く飯す」とある。金檀の按に「蕭王、紹興二十一年八月に薨ず、年六十三。紹興十一年に罷め、年五十三。これより、門を杜ぢ、客を謝して口を絶つて兵を言はず。時に臨に跨り、酒を擲へ、一二の奏章を從へ、西湖に縱游して、以て自ら樂み、膏粱未だ權位あらざるものの若く、平時は、將佐その面を見ること罕なり」とある。【二三】 郭令　通鑑に「肅宗乾元二年、郭子儀、東畿等道元帥となる。魚朝恩、子儀を惡み、相州の潰に因つて、これを上に短す。召し還し、李光弼を以て之に代はらしむ。はじめ、子儀の召さるるや、士卒涕泣、中使を遮つて留まらむことを請ふ。子儀、これを給いて曰く、われ中使を餞するのみ、と。因つて、馬を躍らして去る」とある。【二四】 斬檀　漢書朱買臣傳に「買臣曰く、願はくは、尙方の斬馬劍を賜はり、佞臣一人の頭を斷ち、以て其餘を厲まさむと。上問ふ、誰ぞ。對へて曰く、張湯と。上怒る。御史書を將ねて下る。買、殿檻を擊づ、檻折る、曰く、朝廷比干に從つて地下に游ぶことを得れば足れり」とあり、宋名臣言行錄に「王、すでに和議を主とせず、又切諫して以へらく、中原の豪傑、頸を延べて以て弔伐を待たざるなし、もし、これより興に和すれば、人情銷屈、國勢委靡、誰か復た之を振はむと。再び上章して、秦檜の國を誤るを陳し、辭意剴切」とあり、韓世忠傳に「會ま、檜命じて、山陽を棄てて屯を鎭江に移さしむ。世忠奏す、金人詭詐、惡らくは計を以て我が師を緩うせむ、乞ふ、この軍を留めて江淮を遮蔽せむと。又言ふ、王倫・藍公佐、河南北界を交割す、乞ふ、明かに反覆なきの文狀を具せしめ、以て後證と爲さむと。章凡そ十數上る、檜懷慨激切、帝率れ優詔褒答、然れども、用ふる能はず、後、果して其言の如し」とある。【二五】 藏弓　史記淮陰侯傳に「狡兎死して走狗烹られ、高鳥盡きて良弓藏し、敵國破れて謀臣亡ぶ」とある。【二六】 星隕壘　晉書陽秋に諸葛亮の死を記して「星あり、赤くして芒角、東北より西南に流れ、亮の營に投じ、三投三還、往いて大、還つて小、俄にして亮卒す」とある。【二七】 陸沈州　晉書桓溫傳に「溫、淮淝を過ぎ、北境を踐み、諸位屬と平乘樓に登り、中原を望んで嘆じて曰く、遂に神州をして陸沈し、百年邱墟たらしむ、王夷甫諸人、その實に任ぜざるを得ず」とある。陸沈は、本と莊子の則陽に見え、是陸沈者也とあつて、その注に「水なくして沈むが如きなり」とある。【二八】 虎氣　吳越春秋に虎邱を記して「闔閭、ここに葬り、扁諸魚腸の劍各三千を以て殉と爲す、鏹えて三日、金精結んで白虎となり、その上に踞す」とある。【二九】 鵠頭　鵠は龍の屬、石碑に龍の頭を彫刻してある。【三〇】 石麟　卽ち石馬。【三一】 覆楸　楸は邦訓ひさぎ、楸の類、墓上に植ゑる木。【三二】 樓霞嶺前墓　一統志に「岳武穆の墓は、杭州樓霞嶺下に在り。宋の高宗の時、飛、恨然として中原を恢復するの志あり、卒に秦檜に中てられ、死して此に葬る、今、その墓上の木枝、皆南向す、蓋し者、その忠義の感ずるところといふ」とある。

【題義】 韓蘄王は卽ち韓世忠、岳飛と竝び稱せられた南宋の名臣である。飛は、秦檜に中てられて獄死したが、世忠は早く禍を避け、幸に其生を全うした。世忠の傳は、字解に分說してあるから、ここに、述べる必要は無からう。なほ題下の原注に「靈巖山の西麓に在り、穹碑在るあり」と見え、姑

廟志に「紹興二十一年、王堯ず、賻祭極めて優渥、徐伸をして葬を護し、縣令をして役を執らしむ、御題神道碑に云ふ、中興佐命定國元勳之碑と。碑の高さ十餘丈」とある。靈巖山は、例の館娃宮址で、青邱の數ば游んだ處であるから、ある時、序に此墓を弔つたものと見える。

【詩意】　宋室、南に遷り、高宗が中興の業を爲せし時に當つて、將軍は、武略の優絶なるを以て、特に世に知られ、その功は、古しへの賈復・鄧禹に超ゆべく、その名は、同時の張俊・劉錡と竝び稱せられるを恥とする位。おもへば、高宗の南遷は、丁度、むかし東晉の元帝が、五馬渡江の童謠に應じたと同じであるか、徽欽二帝は、遠く、北、黃龍府に移されて仕舞つて、まことに、憤慨に堪へられぬ始末であつた。そこで、將軍は、諸部の蕃族より成れる金人を擒にし、併せて、二帝の讎を報せむことを心に誓ひ、數ば大功を建てしに因り、朝使來り臨んで、金冊を頒ち賜はり、邊人は、錦衣駿馬、陣頭に立てる其英姿を見知つて居た。ある時は、陣前に戈を揮つて、野を狹しと構へたる敵陣を衝き、ある時は、小舟に乘つて、江流を斷ち切り、兀朮といふ敵將などは、命からがら魂を失つて逃げ走り、この分では、中原を回復することも、掌を指して、屹度間違もないといふ位であつた。しかし、不幸にも、將軍は兵權を託せられた重任を未だ果さないのに、廟堂の上に於ては、和議に惑ひ、その極、遺憾ながら、熊羆の如き猛卒を解散し、そして、犬豕の樣な蠻族の酋長に臣たることを甘んずる樣に成つた。本來、戎に和する上は、その節令が兎角卑屈になり易く、かう成つては、前朝の社稷を克復するといふ夙志も、到底酬いられない。高宗、すでに蹕を臨安に駐め、宮闕巍峨として、吳山の曉に聳ゆる景色は、いかにも見事であるが、鞏縣に在る祖宗の陵墓は荒廢して、樹聲秋にさびしく、まことに情ない始末。將軍は、廉頗の如く、歸臥しても、身、未だ老いず、その晩年は、郭子儀が職を罷めた時の如くであつたが、さて、誰が引き留めやうとしたか。時には、古しへの朱雲の如く、檻を折つて切諫したけれども、格別の效果もなく、高鳥盡きて良弓藏すといふ樣な形勢に成つたのは、まことに、憂ふべきことであつた。俄にして、大星、營中に落ちて、將軍、遂に病死し、長しへに、神州をして陸沈するに至らしめた。ここに、前代の事を回想すれば、感慨自ら堪へず、古邱を弔へば、淒涼いや增すを覺える。劍を埋めて、虎氣わづかに存し、碑面の龍の彫刻は、苔を剝いで、やつと分かる位、石馬は、風雨に嘶き、山僧は、殊勝にも墓の御守りをして居る。鼓旗寂寂として、その跡、すでに遠く、事蹟は、簡冊に載せてあるが、歲月悠悠として、兎角、湮滅を免れない。父老の悲は、なほ依然たれども、英雄、事、すでに休み、この人は、復た起すことが出來ない。聞けば、棲霞嶺なる岳飛の墓は、一しほ愁恨を催すといふが、それに較べると、將軍は、兎に角、身を全うして死んだのであるから、聊か慰むるところもあらうと思はれる。

【餘論】　この詩は、青邱の排律中、第一の傑作であつて、その內容が既に面白いのみならず、文字も亦た洗鍊を經て居る。起首より還報二兩宮讎一に至る八句は、靳王の出身、朝使頒二金冊一より中原指掌

收に至る六句は、その戦功、未レ終二藩閫寄一より永使二陸沈州一に至る十四句は、その隠退及び晩年、感慨思二前代一より結尾に至る十二句は、墓上の光景、竝に感想を寫し、段落整然として、屑屑遞下し、讀者をして、その人と爲りを冥想せしめるのは、取りも直さず、描寫の妙で、青邱の長所は、實に此に在ることと思はれる。

石井泉

清泉生石脈。冷逼煮茶亭。
淨映銀牀色。明開玉鑑形。
分秋歸客鼎。汲月貯僧瓶。
樹影沈泓碧。苔文漬壁清。
熱中嘗可滌。醉後漱堪醒。
品第宜居首。誰修舊水經。

石井泉

清泉、石脈に生じ、冷は逼る茶を煮るの亭。
淨は銀牀の色に映じ、明は玉鑑の形を開く。
秋を分つて客鼎に歸し、月を汲んで僧瓶に貯ふ。
樹影、泓に沈んで碧に、苔文、壁を漬して清し。
熱中、かつて滌ふべく、醉後、漱いで醒むるに堪へたり。
品第、宜しく首に居るべし、誰か修せむ舊水經。

【字解】【一】石脈　石の割れ目。【二】冷逼　冷氣が來り迫る。【三】玉鑑　鏡を云ふ、路鄠の詩に平分玉鑑澄村曉とある。【四】沈泓碧　泓は池。【五】舊水經　水經は桑欽の撰で、後に酈道元が其注を作つた。

【題義】題下の原注に　虎邱山に在り、四面石壁天成、張又新、品して第三泉と爲す」とあり、蘇州府志に「石井泉は、俗に觀音泉と名づく」とあり、虎邱志に「陸羽の石井は、劍池の旁、經藏の後に在り。大石井、面の濶さ丈餘、嵌巖自然、上に石欄轤あり、泉、石脈中より出で、甘冷、劍池に勝れり、屋を作つて之を覆ひ、別に亭を井旁に爲り、茶を烹て宴坐するの所となす」とある。

【詩意】清泉は、石の割れ目から湧き出で、冷氣は、茶を煮る亭子に逼る位。その泉の清澈なるは、亭中なる銀牀の色に映じ、その明瑩なるは、鏡の形を開いた樣である。秋の滋味を分つて客鼎に歸せしめ、うつる月影を併せ汲んで、僧瓶に貯へる。木の影は、池に沈んで愈よ碧であるし、苔の斑紋は、壁に沁み込んで、更に清きを覺える。心中熱する時、これを嘗むれば、塵俗を洗ふべく、醉後、これで口を漱ぐと、酒を醒ますことが出來る。これを品第すれば、第三位どころか、宜しく第一位に置くべきもので、誰が、古しへの水經を增修して、その事を書き入れるであらうか。

焚香

艾蘄山中品。都夷海外芬。
龍洲傳舊採。燕室試初焚。

香を焚く

艾蘄、山中の品、都夷、海外の芬。
龍洲、舊採を傳へ、燕室、初焚を試む。

奩印灰縈字。爐呈玉鏤文。
乍飄猶奄冉。將斷更氤氳。
薄散春江霧。輕飛曉峽雲。
銷遲憑宿火。度遠託微薰。
著物元無跡。游空忽有紋。
天絲垂裊裊。池浪動沄沄。
異馥來千和。祥霏却衆葷。
嵐光風卷碎。花氣日蒸醺。
燈炮宵同歇。茶煙午共紛。
褰帷嫌放早。引匕記添勤。
梧影吟成見。鳩聲夢覺聞。
方傳媚寢法。靈著辟邪勳。
小閣清秋雨。低簾薄晚曛。

奩は印す灰縈の字、爐は呈す玉鏤の文。
乍ち飄つて、猶ほ奄冉、將に斷えむとして、更に氤氳。
薄く散ず春江の霧、輕く飛ぶ曉峽の雲。
銷ゆること遲くして宿火に憑り、度ること遠くして微薰に託す。
物に著いて元と跡なく、空に游んで忽ち紋あり。
天絲垂れて裊裊、池浪動いて沄沄。
異馥、千和を來たし、祥霏、衆葷を却く。
嵐光、風、卷き碎き、花氣、日、蒸して醺す。
燈炮、宵、同じく歇み、茶煙、午、共に紛たり。
帷を褰げて放つこと早きを嫌ひ、匕を引いて添ふの勤めたるを記す。
梧影、吟成つて見え、鳩聲、夢覺めて聞く。
方は傳ふ媚寢の法、靈は著く辟邪の勳。
小閣清秋の雨、低簾薄晚の曛。

情慙韓掾染。恩記魏王分。
宴客留鵷侶。招仙降鶴羣。
曾攜朝罷袖。尚浥舞時裙。
囊稱縫羅佩。篝宜覆錦熏。
畫堂空擣桂。素壁漫塗芸。
本欲參童子。何須學令君。
忘言深坐處。端此謝塵氛。

情は慙づ韓掾の染むるを、恩は記す魏王の分つを。
客を宴して鵷侶を留め、仙を招いて鶴羣を降す。
かつて朝罷の袖を攜へ、尚ほ舞時の裙を浥す。
囊は羅佩を縫ふに稱ひ、篝は錦熏を覆ふに宜し。
畫堂、空しく桂を擣き、素壁、漫に芸を塗る。
本と童子に參せむと欲す、何ぞ令君を學ぶを須ひむ。
言を忘れて深坐する處、端に此に塵氛を謝す。

【字解】【一】艾蒳 法苑珠林に三種香として、「都梁、二霍香、三艾蒳香を舉げてある。艾は和訓よもぎ、山に自生する一種の草、葉は菊に似て、五つに裂け、裏は白くして毛を生ず。蒳は花粉。よもぎの花粉で香を造ると見える。【二】都夷 洞冥記に「都夷香は、棗核の如し、一片を食へば、月を歷るも飢ゑず」とある。【三】龍洲 香譜に「龍涎、香品の中に予て最も貴重、大食國の海傍に出づ、龍氣あり、山間を龍むれば、その下、龍の鱗臥するあり、土人更る〻相守り、雲散じ龍去るを視て、往いて探れば、その遺涎を得べし、多きも數兩に過ぎず」とある。【四】燕室 晏居の室。【五】奩印 奩は香箱、その箱の蓋に灰が落ちて字の形をなす。【六】爐呈 爐は香爐。【七】奄冉 陸游の詩に藤花奄冉香とあつて、匂ひの細い貌。【八】氤氳 匂ひの斷えざる貌。【九】宿火 持ち越しの火。【一〇】天絲 かげろふ。【一一】千和 香譜に「峨嵋山の採眞人、千和の香を燔やす」とあつて、さまざまの料を混和すること。【一二】祥霏 目出たき煙。【一三】衆葷 爾雅翼に「西方は大蒜・小蒜・興渠・慈蔥・茖蔥を以て五葷となし、道家は韭・薤・芸薹・茖・胡荽・蓯を以て五葷となす」とある。【一四】燈炮 燈火の燃えかす。【一五】放早 放は外面に散ぜしむること、香譜に「奚行止仲、

從官となり、蔡京に見ゆ。京、女童に驗して、香を焚かしむ。これに久しうして、至らず。すでにして、香滿つるを報ず。蔡、はじめて簾を捲けば、香氣他室より出づるを見る、藹藹として醫鬟の若し、座客幾んど相觀す、しかも、爐火の烈なし、すでに歸れば、衣冠芬馥」とある。【一六】 添勳　惡らず香を爐中に添へる。【一七】 爐聲　陸游の詩に扇墮巾敧午夢回、鳴爐又喚三兩絲一來とある。【一八】 鉶炭　拾遺記に「吳の孫亮、寵姬四人あり、四氣香を合す、皆殊方獻ずるところ、凡そ踐履安息の處を經れば、香氣衣を霑し、年を經るも歇まず、名づけて百濃といひ、復た其室を目して思香鉶炭といふ」とある。【一九】 薛邪　瑞應圖に「天漢二年、月支國、神香を貢す、凡そ三枚、狀、燕卵の如く、大さ棗の如し。帝、以て外庫に付す。後、長安大疫、宮人病を得るもの多し、使者、請うて香一枚を燒き、以て疫氣を辟く、帝、これを然りとす、宮中の病者、皆起ち、香百里に聞こゆ」とあり、杜陽雜編に「同昌公主、出でて降るや、七寶步輦に乘じ、四面に五色の香毬を綴る。毬中の薛寒香・薛邪香・瑞麟香・金鼠香は、異國獻ずるところなり」とある。【二〇】 薄晚嚥　薄晚は薄暮、嚥は夕日。【二一】 韓掾染　晉書賈充傳に「韓壽、姿貌に美なり、充の女、見て悅び、ひそかに音好を通ず。時に、西域、奇香を貢す、一たび人に著けば、月を經るも歇まず、帝、惟だ充に賜ふ、充の女、密に盜んで、以て壽に遺る」とある。【二二】 魏王分　陸機の弔二魏武帝一文の序に「魏の武帝、遺令して云ふ、餘香は分つて諸夫人に與へよ、諸舍中、爲すところなれば、履組を作るを學んで賣れ」とある。【二三】 鵠倒　鵠は鶴、朝官の行列、その整然たることが、鶴や鷺の行列に似たるより云ふ。【二四】 招仙　洞冥記に「武帝、招仙閣を起し、上に茶蘼香を燒く、燒くこと、粟ばかり、その氣、三月絕えず」とある。【二五】 降鶴羣　同じく洞冥記に「降眞香は、黔南に出づ、その煙、直上、能く仙靈を感ず、鶴を召して來り降らしむ」とある。【二六】 朝揖袖　杜甫の詩に朝服香煙攜滿レ袖とある。【二七】 鑪麗佩　前に戲嬰圖の中にも引いて置いたが、謝幼庾が少にして紫羅の香囊を佩びしことをいふ。【二八】 篝宜覆錦囊　篝は竹籠の如きもので、これに錦の衣を被せて、中から熏すると、すつかり香を焚きこめることが出來るといふ意。楊維楨の詩に幾隨三錦被一覆三香篝一とある。【二九】 擣桂　肉桂を擣く、東坡の詩に擣三殘椒桂一有三餘辛一とある。【三〇】 塗芸　芸は草の名、初夏の頃、黃花を著く。薔薇書物の中に入れて蠹を防ぐ。杜陽雜編に「元載、芸輝堂を私第に造る。芸輝は、香草の名なり、于闐に出づ、その香、潔白玉の如し、土に入つて朽爛せず、これを春いて屑となし、以て其壁に塗る、故に芸輝堂と號す」とある。【三一】 童子　潤仙傳に「童子先生は、秋山に于て道を學び、契鈐經を修治して仙を得たり」とある。【三二】 令君　襄陽記に「劉季和、性、香を愛す。かつて、厠に如き、還つて輒ち香爐の上を過ぐ。主簿弭坦曰く、人、公を名づけて俗人と作す、虛しからざるなり。季和曰く、荀令君、人家に至れば、坐席、三日香し。われ、令君に如何と謂ふ。坦曰く、醜婦、鄰に效ふ、見るもの必ず走る、公、坦をして遁れ去らしめむと欲するかと。季和、大に笑ふ」とある。【三三】 端此　端は正にの意。

【題義】 說明に及ばぬ。

【詩意】 均しく香といふものの、さまざまの品目があつて、艾の花粉を固めたものは山中の佳品、都爽と稱するは海外の名香である。むかし、龍洲に於て、龍涎を采取して造つたものもあつたといふが、いづれも、閒居の小室に於て、これを焚くと、その妙味が分かる。その燃えた跡には、灰が殘つて、香箱の中に於ては、字の形をなし、爐中に於ては、かたて加へて玉を鏤めた樣に見える。その煙の乍ち飄る時は、奄冉として匂が細く、將に盡きむとする頃は、一しほ高くかをる。その薄きは、春、江上の霧を散じたるが如く、その輕きは、曉、峽中の雲を飛ばした樣である。消ゆることの遲きは、爐中に火が殘つて居たからであるし、度ること遠くして、かすかなる匂を送るのは、一しほ風情がある。その煙は、物に附著した處で、もとより跡なく、空中に舞ひ上つても、なほ紋を畫き、たとへば、かげろふの裊裊として垂るるが如く、池の小波の沄沄として動くが如くである。えならぬ香は、さまざまの物を混せたに因つて著しく、目出たき煙は、多くの葷氣を退けることが出來る。たとへば、嵐光の風に卷かれて碎くるが如く、花氣の日に蒸されて匂ふが如く、宵には、燈火の燃えかすと共に斷え、晝

には、茶煙と共に紛飛して居る。戸ばりを褰げては、これを外に放ち去らしむることの早きを嫌ひ、匕を手にしては、怠らず爐中に添へる。その香を焚く室中に在つて、吟成れば、梧桐の影が見はれ、夢覺めては、鳩の聲が聞こえる。その調合の處方の一としては、媚寢の術があるし、最も靈驗あるは、名にしおふ辟邪の效果である。清秋、小閣に雨ふるとき、日暮、低簾に夕日うつろふ折から、この香てふ物があれば、一しほ趣を添へる。それから、韓壽は、賈充の女からの移り香を有り難がり、銅臺の宮女は、武帝の形見として分ち賜はつた其恩を記憶して居る。これさへあれば、客を宴する時にも、鵷侶の朝臣を引き留めることも出來るし、仙を招いては、鶴の羣をして來り降らしめることも、何の遣作もない。退朝する時に、自然、その煙が袖の中に入ることもあるし、筵上に舞を爲せし女の裙を溼して、その香を留めて居ることもある。これを囊にするには、紫の羅で縫つて腰佩が相應しく、竹籠の下で焚けば、上に被せた錦の衣に焚き込めることが出來る。畫堂に於て肉桂を擣くのは、辛味を添へる爲であるし、白璧に芸草を塗り込むのは、蟲を防ぐ爲であつて、すべて實用の意味に本づいたのであるから、格別、趣味がある譯ではなく、とても、香と比較することは出來ぬ。もと之を焚くのは、童子先生の如き有德の仙人の處に參入したいからであつて、荀令君が坐れば坐席が三日も香ばしいといふ樣な酒落の爲めではない。そこで、香の煙の匂ふ處に、おつちりと坐して、言を忘るる位になると、まさしく、浮世の塵氛に遠ざかつて、心に何の屈託もない樣であつて、これこそ、焚香の最も著しき功能である。

【餘論】これを文章にすれば、香譜といつた樣なもので、香に關する古來の典故を雜陳し、且つ剪裁したので、一貫した特殊の構想に本づいたものではない。大家集中、宜しく一あるべく、決して、二あるべからざるものと考へるが如何か。

詠夢　夢を詠ず

的的緣愁得。濛濛與醉和。
輕隨雲浩蕩。暗越嶺嵯峨。
夜店嗟偏短。春閨想最多。
關山歸識路。江渚去凌波。
梁落中宵月。樓橫欲曙河。
隔簾休警鶴。近燭任飛蛾。
游遠寧煩載。穿深豈畏訶。

的的、愁に緣つて得、濛濛、醉と和す。
輕く雲の浩蕩たるに隨ひ、暗に嶺の嵯峨たるを越ゆ。
夜店、偏に短きを嗟し、春閨、最も多きを想ふ。
關山、歸つて路を識り、江渚、去つて波を凌ぐ。
梁には落つ中宵の月、樓には橫ふ曙ならむと欲するの河。
簾を隔てて警鶴を休ましめ、燭に近くして飛蛾に任かす。
游遠くして、寧ろ載するを煩はさむや、穿つこと深くして豈に訶を畏れむや。

寒驚瑤作障。暖戀錦成窩。
蝴蝶誰家信。鴛鴦別浦歌。
靜嫌風動竹。鬧怯雨鳴荷。
寂歷窓扃紙。低遲帳捲羅。
知情唯枕共。送恨忽鐘過。
縞袂香猶在。朱絃字不磨。
記來還彷彿。尋去已蹉跎。
宿燼芬餘麝。殘妝暈淺螺。
憂歡情總幻。離合事皆訛。
池上吟芳草。庭前覓舊柯。
既因思是種。復念睡爲魔。
易斷俄如此。難憑竟若何。
陽臺莫重問。千古笑巫娥。

寒驚いて、瑤、障を作し、暖戀うて、錦、窩を成す。
蝴蝶、誰が家の信、鴛鴦、別浦の歌。
靜は嫌ふ風の竹を動かすを、鬧は怯る雨の荷を鳴らすを。
寂歷、窓、紙を扃ち、低遲、帳、羅を捲く。
情を知つて唯だ枕と共にし、恨を送つて忽ち鐘過ぐ。
縞袂、香、猶ほ在り、朱絃、字、磨せず。
記し來つて、還た彷彿、尋ね去つて、已に蹉跎たり。
宿燼、餘麝芬たり、殘妝、淺螺を暈す。
憂歡、情、すべて幻、離合、事皆訛。
池上、芳草を吟じ、庭前、舊柯を覓む。
すでに思は是れ種なるに因る、復た念ふ睡は魔たるを。
斷え易くして俄に此の如し、憑り難くして竟に若何。
陽臺重ねて問ふ莫れ、千古、巫娥を笑ふ。

【字解】【一】的的　分明の貌。【二】漾漾　ほの暗き貌。【三】揞蕖　のび廣がる貌。【四】識路　路を見分ける。【五】凌波　曹植の洛神賦に凌ゝ波微步、羅襪生ゝ塵とある。【六】中宵月　杜甫の夢李白の詩に屋梁看ゝ落月、照ゝ顏色とある。【七】欲曙　河　河は銀河、白居易の長恨歌に耿耿星河欲ゝ曙天とある。【八】瞢鶻　風土記に「白鶴、善く瞢む。八月、白露降つて、草葉に流れ、滴滴聲あれば、卽ち鳴く」とある。【九】飛蛾　古今注に「飛蛾、善く燈を拂ふ、一名火化、一名慕光」とある。【一〇】錦成窩　窩は、穴が本義であるが、ここでは夜具、その穴の樣になつて居る處から云つたものと見える。【一一】蝴蝶　莊子に「昔者、莊周、夢に蝴蝶となる、栩栩然として蝶なり」とある。【一二】鴛鴦　李賈の詩に好作ゝ鴛鴦夢、南城眠ゝ擣砧とある。【一三】窓扃紙　紙窓を鎖す。【一四】唯枕共　枕中記に「道士呂翁、神仙の術を得たり、邯鄲に滯ぶ。道中、少年盧生に遇ひ、囊中の枕を以て之に授く。生、枕して夢む、一生の榮辱、備さに歷、欠伸して寤むれば、黃粱尙ほ未だ熟さざるなり」とある。【一五】忽鐘過　元稹の詩に、娃兒慾起鐘聲動、二十年前曉寺情とある。【一六】縞袂　趙師雄が羅浮に於て梅花の精と思はるる美人に遇ひしこと、前に卷九、梅雪軒の詩中に見ゆ。【一七】朱絃字不磨　太平廣記に「李生といふもの、その舅は盧、道術あり、李生に謂つて曰く、簽篋を善くするものを求め得て、飲に侍せしめむ、と。生、簽篋を見る、上に朱字あり、云ふ、壁中辨ゝ江樹、天際識ゝ歸舟と。後、李生、陸長源の女を娶る、乃ち舅家に見たるところのもの。問ふ、何の能かある。曰く、簽篋を善くすと。取つて之を視れば、朱字、宛然たり」とあり、東坡の聽ゝ琵琶ゝの詩に夢回只記歸舟字、賦罷雙垂紫飾條とある。【一八】暈淺螺　螺は、その甲殼を潰して眉墨とするので、その痕が薄くぼかしに成つて殘つて居る。【一九】情幻　金剛經に「一切有爲法、如ゝ夢幻泡影」とある。【二〇】池上吟芳草　前に卷十二、答ゝ宗人廉ゝの詩中にも引いて置いたが、南史謝惠連傳に「惠連十歲、能く文を屬す、族兄靈運、これを嘉賞して云ふ、鴛章ある每に、惠連に對すれば、輒ち佳句を得と。かつて、永嘉の西塘に於て、詩を思ふ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見、すなはち池塘生ゝ春草ゝの句を得、大に以て工と爲す」とある。【二一】庭前覓舊柯　異聞錄に「淳于棼、槐下に飲み、醉うて歸り、臥して夢む。二使曰く、槐安國、邀へ奉ると。古槐を指して穴中に入る、大槐安國といふ。王曰く、南柯郡、理まらず、卿を屈して守となす、と。果日郡に達す。寤むるに及びて、大槐下の穴を尋ねれば、明朗にして一榻を容るべし、一大蟻あり、乃ち王なり、一穴、直に南枝に入る、卽ち

南柯郡」とある。【三】思是種　周禮に「簋人夢を掌る、三に曰く思夢」とあり、張泌の詩に幽窗漫結相思夢、欲レ化二西園蝶一未レ成とある。【三】睡爲魔　傳燈錄に「秀師曰く、ここに山林木怪なし、唯、翻つて魔と作るなり」とある。【三】陽臺　前に卷一、巫山高の詩中にも引いて置いたが、宋玉の高唐賦に「昔者、先王、かつて高唐に游び、息つて晝寢ぬ。夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となる、君が高唐に游ぶを聞く、願はくは、枕席を薦めむ、と。王、因つて之を幸す。去つて辭して曰く、妾は、巫山の陽、高丘の岨に在り、且に朝雲となり、暮に行雨となる、朝朝暮暮、陽臺の下と。旦朝、これを視るに言の如し、故に爲に廟を立て、號して朝雲といふ」とあり、襄陽耆舊傳に「赤帝の女姚姬、未だ行かずして卒す、巫山の陽に葬る、故に巫山の女といふ。楚の懷王、高唐に游んで、晝、寢ぬ、夢に神と遇ふを見る、自ら是れ巫山の女なりと稱す。王、因つて之を幸し、遂に觀を巫山の南に置き、號して朝雲といふ」とある。【三】巫娥　即ち巫山の女。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】的的とはつきりした夢は、愁に由つて得たのであるし、濛濛とぼんやりした夢は、醉つた揚句に見たものである。輕きは、雲の浩蕩たるに隨つて飛び、暗きは、嵯峨たる山を幾つ越えても知らずに居る。夜、客舍に於て見る夢は、偏に短くして醒め易く、春、閨中に於て見る夢は、最も多い樣に想はれる。夢の中では、關山を過ぎて故鄕に還るに當り、容易に其路を識別し、江岸に至つて波を凌ぐことも、何の造作もない。夢の醒むるに際して、屋梁の上には、夜半の月が落ちかかり、樓頭には、銀河さえざえとして曉近く成りかけて居る。簾を隔てて、白鶴の寒を警むるは止めて貰ひたく、燈火の邊に飛蛾の來り聚まるのは勝手である。夢中、遠くに游んだ處で、車に載せられる世話もないし、人家の奥深く入つた處で、叱られる氣遣もない。寒氣に驚いては、見事な屏障を匝らし、暖か味を戀うては、錦の夜具の中に潛り込む。夢に蝴蝶となつたのは、誰の事とも知らず、鶯鶯となつては、別浦の歌その儘である。折角夢を見て居る時は、風が靜に竹を動かすをも嫌ひ、雨が鬧がしく蓮葉を打つて擽くのは、猶更の事である。その醒めた時は、寂歷として、はたと紙窓を閉ぢ、低遲して羅帳を捲くことがある。夢中の情を知るは、唯だ枕ばかりであるし、つきぬ恨を送つて撞き出すは、寺の鐘である。夢中に逢つた美人の白い袂には、香氣なほ殘り、箋篋に書いてあつた文字は、決して消えない。夢に見た事は、彷彿として覺えて居るが、さて其跡を尋ね樣とすれば、もとより、取り留めもなく、失望することが多い。夢醒めて起き出づれば、香爐の中に焚えさしがあつて、蘭麝の匂なほ殘り、夢を見た女は、殘妝なほ存して、眉墨の痕が、ほんのりして居る。夢中に見たる悲喜の情は、すべて泡影の如く幻であるし、離合の事は、皆實在なき訛誤に過ぎぬ。夢中に於て、謝靈運は、池塘生二春草一といふ名句を得たといふし、淳于棼は、槐安國に往つて、大官と成つたといふ話。元來、夢は物思ひが種となつて、散散惱んだ揚句に見るものであるし、加ふるに、睡といふ魔に誘はれた結果である。夢は、醒め易くして、俄然中斷することがあるし、もとより、何等の憑據なきもので、これを信ずるのは、愚の骨頂である。陽臺の神女の事にしても、重ねて問ふ必要もなく、千歲後の今日から見れば、もとより、笑ふべきことである。

答胡博士留別二十韻

胡博士の留別に答ふ、二十韻

世緒名臣後。聲華俊士前。
棘場曾中的。芹水舊鳴絃。
遠道秋風褐。空齋夜雨氈。
倦游驚齒暮。多難喜身全。
孤客愁王粲。諸生老鄭玄。
未應心戚戚。還是腹便便。
杜曲無歸業。成都有卜錢。
我方辭闕下。君尚隱江邊。
久話燈催剪。頻過榻解懸。
擇鄰欣得地。結友愧忘年。
牧徑依門轉。漁梁近渡連。
舊盟尋白鳥。餘俸買烏犍。

世緒、名臣の後、聲華、俊士の前。
棘場、かつて的に中り、芹水、舊と絃を鳴らす。
遠道、秋風の褐、空齋、夜雨の氈。
倦游、齒の暮るるに驚き、多難、身の全きを喜ぶ。
孤客、王粲を愁へしめ、諸生、鄭玄を老ゆ。
未だ應に心戚戚たるべからず、還た是れ腹便便。
杜曲、歸業なく、成都、卜錢あり。
われ方に闕下を辭し、君、尚ほ江邊に隱る。
久しく話して、燈、剪るを催し、頻りに過ぎて、榻、懸を解く。
鄰を擇んで地を得たるを欣び、友を結んで、忘年を愧づ。
牧徑、門に依つて轉じ、漁梁、渡に近くして連る。
舊盟、白鳥を尋ね、餘俸、烏犍を買ふ。

流水空塘樹。疏林破屋煙。
詎憂窮作祟。但欲醉成仙。
政爾交歡密。俄然別恨牽。
湖山入苑路。雞犬載家船。
離索方堪歎。分攜益可憐。
殊鄉難託主。薄俗易輕賢。
寒浦通潮處。春城罷雪天。
梅花未宜折。持送只詩篇。

流水、空塘の樹、疏林、破屋の煙。
詎ぞ憂へむ窮の祟を作すを、但だ醉うて仙と成らむと欲す。
政に爾かく交歡密、俄然として別恨牽く。
湖山、苑に入るの路、雞犬、家を載するの船。
離索、方に歎ずるに堪へたり、分攜、益す憐むべし。
殊鄉、主に託し難く、薄俗、賢を輕んじ易し。
寒浦、潮に通ずる處、春城、雪を罷むるの天。
梅花、未だ折るに宜しからず、持送、只だ詩篇。

【字解】【一】世緒　代代承け嗣ぐ家業。【二】名臣後　この人は、宋の胡瑗の後と見える。【三】俊士　禮記に「司徒は、選士の秀なるものを論じて、これを學を升す、俊士といふ」とあり、唐書選擧志に「唐制、士を取るの科、その目、秀才あり、明經あり、俊士あり、進士あり」と見ゆ。【四】棘場　五代史和凝傳に「天成中、貢擧に知たり、時に進士浮薄、喜んで誼譯を爲し、以て主司を動かす。主司、勝を放つ毎に、これを圍むに棘を以てし、省門を閉ぢ、人の出入を絕ち、以て常と爲す。凝、棘を撤して門を開く、しかも、士、肅然として譁なし、取るところ、皆一時の秀」とある。唐では、禮部に於いて試驗を行ふ時、棘を以て之を圍み、偽つて、棘圍といひ、棘場といつたのである。【五】芹水　大學を云ふ。詩經に思樂泮水、薄采二其芹一とある。【六】夜雨氈　唐書鄭虔傳に「虔、廣文館博士となる、時に鄭廣文と號す、官に在つて貧約甚しく、澹如たり。杜甫贈るに詩を以てして曰く、才名四十年、坐

峯寒無」酢」とある。【七】 齊暮　齊は年齢、年が寄る、暮年に同じ。【八】 王粲　魏志王粲傳に「粲、字は仲宣、徙つて長安に居る。蔡邕、見て之を奇とす、時に、邕、才學顯著、朝廷に貴重せられ、常に車騎巷を塡む。粲の門に在るを聞き、屣を倒にして之を迎ふ。司徒、辟召して黄門侍郎に除す、就かず、乃ち荆州に之いて劉表に依る、表、粲の貌寢にして體弱きを以て、甚だ重んぜざるなり。後、太祖辟して丞相掾となし、侍郎に拜す」とある。【九】 鄭玄　後漢書鄭玄傳の論に「鄭玄、羣典を括囊し、衆家を網羅し、繁蕪を翦裁し、漏失を刊改す、これより、學者、略ぼ歸するところを知る」とある。【一〇】 腹便便　前に卷四、始遷三西齋二の詩中にも見え たが、後漢書文苑傳に「邊韶、字は孝先、教授數百人、かつて晝日假寐す。弟子、私に之を嘲つて曰く、邊孝先、腹便便、懶讀書、但欲レ眠、と。韶、ひそかに之を聞き、應へて曰く、邊爲レ姓、孝爲レ字、腹便便、五經笥、但欲三眠思二經事一、寐與三周公一通レ夢、靜與三孔子一同レ意、師而可レ嘲、出三何典故一」とある。【一一】 杜曲　杜甫の詩に杜曲仍有桑麻田とある。【一二】 有卜錢　高士傳に「嚴遵、字は君平、成都の市に賣卜し、日に百錢を得て、自ら給す」とある。【一三】 榻解懸　陳蕃、守たりし時、徐穉の爲に特に一榻を備へて待ち、去れば之を解く、後漢書の徐穉傳に見ゆ。【一四】 忘年　南史何遜傳に「遜、弱冠にして秀才に擧げらる。范雲、その對策を見て大に相稱賞し、因つて、忘年の交を結ぶ」とある。【一五】 牧徑　牧童の通過する小徑。【一六】 漁梁　魚を取るやな。【一七】 白鳥　卽ち白鷗、黄庭堅の詩に此心期與三白鷗一盟とある。【一八】 烏鍵　水牛。【一九】 入苑路　苑は長洲苑を指す。【二〇】 離索　離羣索居の略、朋友の羣を離れて獨居すること、禮記檀弓に「子夏曰く、吾、離羣して索居すること、亦た已に久し」とある。【二一】 分攜　離別する。【二二】 梅花　荆州記に「陸凱、江南より梅花一枝を以て、長安に寄せて范曄に與へ、贈るに詩を以てして曰く、折レ梅逢三驛使一、寄與隴頭人、江南何所レ有、聊贈一枝春」とある。

【題義】 分省人物考に「胡翰、字は仲申、金華の人、幼より聰睿、浦陽に游學し、經史を博覽す。許文懿公の門に登る。南北の士、皆與に交らむことを願ふ。著すところの文を以て、これを文獻黄公・待制柳公に進む、皆稱許して口を容れず。洪武の初、聘せられて金陵に至り、衢州教授を授けられ、元史を纂修し、白金文幣を賜うて以て歸る。もとより、山水泉石を嗜み、晚歲、居を三洞の上に卜し、幅巾短杖、徜徉日を終ふ」とある。この詩は、青邱が鄭里に還らむとする時、胡翰が詩を寄せたから、それに次韻して、留別の意を表したのである。

【詩意】 君の世業は、名臣の後裔として知られ、聲譽は、俊士の最も前に在る。かつて、禮部の試場に入つて、見事に及第し、それから、大學に教授して居たことがある。故郷とは、遠道を隔てて居て、秋風に短褐を著け、空齋に籠つて居ては、雨の夜でも青氈の上に危坐して勉強して居る。客游、すでに久しくして、だんだん年も寄つて來たが、多難の世に身を全うしたのは、まことに喜ぶべきである。孤客として、王粲の如く、常に愁を離れず、諸生として、鄭玄の如く、力學刻苦、しかも、今や老いむとして居る。決して心中に戚戚たることは無い筈で、五經に滿たされた腹は、便便として膨れて居る。杜曲に比すべき鄭里には、歸つても爲すべき家業がなく、成都に較ぶべき此都に於ては、賣卜をしても、隨分收入がある。われは、今しも、闕下を辭して鄭里に還らむとし、君は尙ほ江邊に隱棲して居る。會談久しきに亙つては、數ば燈火を剪り、頻繁に訪問して、懸けてあつた榻を卸して貰つた。鄰を擇んで、君と一緒に居ることが出來たから、地を得たることを喜び、友誼を結んで、この弱輩を棄てられざりしを感謝する位。牧童の通る細徑は、門に傍うて曲がり、魚を捕ふる梁は、渡し場に近い處まで連接して居て、田舍めいた景色は、まことに面白い。そこで、舊盟を訂して白鷗を尋

ね、俸給の殘りで水牛を買ひ、暇だにあれば耕漁を事とし、流水を挾んで、空塘の上には、木が生ひ茂り、疏林の中なるあばら家からは、炊煙が徐に上る。何も貧窮に祟られることは、心配せずとも善く、唯だ醉うて、仙と成らむことを願ふだけである。かくて、交際上の歡情は、日に增して、親密に成つて來たが、俄然、予は歸國することになつて、離別の恨に堪へられない。行く手の湖山は長洲苑に通じて路を開き、家族は勿論、雞犬までも船に載せて漕ぎ出す。從來、予が朋友に離れて獨居せしことは、歎息すべく、今日、君と別れるのは、愈よ以てつらいことである。さはれ、異鄉に居りながら、誰を主人として僑居することも出來ず、都下風俗の浮薄なる、ややもすれば、賢を輕んずるから、予の如きものは、とても、ここに留まつて居ることは出來ない。やがて、故鄉に近づくと、入江に潮が通じ、城郭は春に入つて、雪も止み、どうやら、長閑けくなることであらう。例の江南の梅花は、まだ折る譯にも行くまいから、唯だ詩篇を持贈する外あるまいと思ふ。

【餘論】流水空塘樹の四句は、一景一情、相配して極めて秀雋である。

送高郎中

高郎中を送る

雙騎出前驅。爭看璧在車。

雙騎、出でて前驅し、爭ひ看る、璧の車に在るを。

初離中侍幙。復接舍人廬。

初めて中侍の幙を離れ、復た舍人の廬に接す。

綬色春宜酒。爐氛夕戀裾。

綬色、春、酒に宜しく、爐氛、夕に裾を戀ふ。

同官聯劍佩。侍史直圖書。

同官、劍佩を聯ね、侍史、圖書に直す。

雲氣通高閣。花陰宿廣除。

雲氣、高閣に通じ、花陰、廣除に宿す。

省中詩滿篋。知是秉綸餘。

省中、詩、篋に滿つ、知る是れ秉綸の餘。

【字解】【一】璧在車　その容貌の美、玉の如きを云ふ。前に卷一、洛陽陌の詩中にも引いて置いたが、晉書衞玠傳に「少時、羊車に洛陽の市に乘ず、見るもの以て玉人と爲す」とある。【二】中侍　宋史職官志に「政和二年、中侍大夫を以て景福殿使に易ふ」とある。【三】舍人　唐書百官志に「中書省舍人六人、起居舍人二人、通事舍人十六人」とある。【四】綬色　この人は、郎中の高官に居たから、綠綬を帶び、それで酒に宜しいといつたのであらう。【五】侍史　側に侍する小役人、給仕の類。【六】廣除　除は庭階。

【題義】この詩は、高某が禮部郎中に轉じ、他の役所に出勤する樣に成つたのを賀したので、そこで送といつたのである。

【詩意】君が參朝する時には、兩騎を前驅として、まことに堂堂たる勢、そして、路上の人は、車中に白玉を載せて居ると思ひ、爭つて看て居ることであらう。君は、今まで中侍の職に居て、天子に近侍する爲め、宮中に詰めて居たが、今度は、古しへの舍人に轉任して、その役所に出仕される。印綬の色は綠にして、春は酒に似つかはしく、御爐の香氣は、夕に退朝する時も、裾に殘つて居るであら

う。同官の人人は、劍佩を聯ね、側に侍する給仕は、圖書を預つて居る。その役所は、宮禁に近い爲め、雲氣は高閣に通じ、御苑の花の影は、廣い庭階の上に映つて居る。君は省中に居て、詔勅を起草する暇には、詩が澤山に出來て、やがて、篋中に一ぱいに成ることであらう。

【餘論】 綬色の一聯は、明靚愛すべきを覺える。

送周檢校使高麗

周檢校の高麗に使するを送る

東望玄菟境。孤帆有去人。
東に望む玄菟の境、孤帆、去人あり。

未容辭遠使。方要接殊鄰。
未だ遠使を辭するを容るさず、方に殊鄰に接するを要す。

乞水從山媼。占風問海神。
水を乞うて山媼に從ひ、風を占して海神に問ふ。

王庭依舊障。估市集遙津。
王庭、舊障に依り、估市、遙津に集まる。

地作先朝俗。花同內域春。
地は、先朝の俗を作し、花は同じ、內域の春。

煩君修誓好。玉帛自茲頻。
君を煩はす、誓を修する好し、玉帛、これより頻りなり。

【字解】 【一】 玄菟　前に敍べ見ゆ、漢の武帝が置いた朝鮮四郡の一。【二】 殊鄰　風俗の異なる鄰國。【三】 王庭　高麗の王宮を云ふ。【四】 舊障　むかしながらの保障、卽ち要害。【五】 估市　商估の集まる市場。【六】 遙津　津は舟つきの港。【七】 先朝　唐宋時代の風俗。【八】 內域　域內に同じ、支那本土。【九】 玉帛　玉ときぬとの幣物、書の舜典に五玉三帛とあり、左傳に「禹、諸公を塗山に會す、玉帛を執るもの萬國」とある。

【題義】 說明に及ばぬ。但し、周某の名字は不詳。

【詩意】 東、玄菟の境を望めば、今しも、孤帆を挂けて、その地に赴く人がある。君は、その職として、遠方に往く使を辭する譯には行かず、且つ、今の時に方りては、風俗異なる鄰國と交際する必要がある。その途中、水が入用の時には、舟を島に寄せ、山媼に從つて之を乞ひ、風を占ふ爲には、海神に問ふであらう。高麗の王宮は、むかしながらの要害に依り、商估の開く市場は、遙かなる舟つきの港である。その地は、今でも唐宋時代の風俗を存し、花は、わが內地と少しも換はらない。御苦勞ではあるが、君を煩はし、中國に服屬して決して叛かないといふ誓約を修することは、まことに然るべく、さうすると、玉帛を以て來往することも、これから頻繁に成るであらう。

【餘論】 周檢校は、使して歸る時、高麗の小兒二人を連れて來たといふので、前に卷二に、朝鮮兒歌といふのがあつた。すると、この詩は、元末の事に係り、まだ明の世にならぬ時分である。檢校は、もとより北京に在官して居たのであるが、もと蘇州の人で、往返の際、或は鄕里に立ちもどつて、そこから海を航したものかも知れぬ。

高青邱集　卷十四

聯句

舞劍聯句

與會稽張憲夜飲、觀銅臺李壯士舞劍而作

會稽の張憲と夜飲し、銅臺李壯士の舞劍を觀て作る

晩陌息鳴鑣。憲秋城起嚴柝。
晩陌、鳴鑣を息ひ、秋城、嚴柝を起す。

登堂欣有會。啓顧座歎無樂。
堂に登つて會あるを欣び、座を顧みて樂なきを歎ず。

豪賓奉觴壽。憲壯士掉箭作。
豪賓、觴を奉じて壽し、壯士、箭を掉つて作る。

韻生飈拂鐔。啓文綴星輝鍔。
韻は生じて、飈、鐔を拂ひ、文は綴つて、星、鍔に輝く。

拭土色纔動。憲映火光轉爍。
土を拭うて色わづかに動き、火に映じて光轉た爍なり。

寒瀉走澗泉。啓明懸溜簷澤。
寒は瀉ぐ澗に走るの泉、明は懸く簷に溜するの澤。

徒誇刀瑩膏。憲漫詫匕淬藥。
腥疑人血乾。啓威攝鬼踪鑠。
雄聞莊子說。憲醉想王郎斫。
聯翩倏鴻騫。啓奮迅仍雀躍。
來如龍出淵。憲去若蛇赴壑。
疾驚雷破山。啓怒訝風捲漠。
初馳帆縱張。憲忽注弩弛彍。
陰陽變開闔。啓潮汐隨進却。
高步赴節同。憲奇形分狀各。
斜廻象翼蔽。啓曲踊肖拏攫。
欻驚西方帝。憲凜怖東海若。
屋翻影紛綸。啓地殷勢揮霍。
亂思突騎奔。憲低見飢隼掠。

徒に刀の膏に瑩くを誇り、漫に匕の藥に淬するを詫る。
腥は疑ふ人血の乾くを、威は攝す鬼踪の鑠たるを。
雄は聞く莊子の說くを、醉は想ふ王郎の斫るを。
聯翩として倏ち鴻騫、奮迅仍ち雀躍。
來つて龍の淵を出るが如く、去つて蛇の壑に赴くが若し。
疾は雷の山を破るかと驚き、怒は風の漠を捲くを訝る。
初め馳せて、帆、縱に張り、忽ち注いで弩弛めて彍る。
陰陽、開闔を變じ、潮汐、進却に隨ふ。
高步、節に赴くこと同じ、奇形、狀を分つて各。
斜に廻つて翼蔽に象り、曲踊して拏攫に肖たり。
欻ち西方の帝を驚かし、凜として東海若を怖れしむ。
屋は翻つて影紛綸、地殷にして勢揮霍。
亂れては突騎の奔るを思ひ、低くしては飢隼の掠むる

旁分萬矢斷。啓前拉千槍拓。
出挑刼齊壇。憲立可當蜀閣。
澤聞蛇嫗啼。啓路遇猿翁搏。
斬關豁然判。憲擊柱鏗爾著。
陸疑濤涌牀。啓宵駭虹闔幕。
警棲已翻翻。憲墜槁俄索索。
顚旭曾悟書。啓俠軻記爭博。
目花匪酒湎。憲膚粟似裘薄。
忠義氣盡張。啓姦邪膽俱落。
不從玉玦計。憲欲定銅槃約。
未數大娘强。啓終勝處女弱。
季路袖手欽。憲裴旻汗顏怍。
疾視誰敢當。啓不成我慙學。

旁に萬矢を分つて斷ち、前に千槍を拉して拓く。
出でては齊壇を刼かすに堪へ、立つては蜀閣に當るべし。
澤には蛇嫗の啼くを聞き、路には猿翁の搏つに遇ふ。
關を斬つて豁然として判れ、柱を擊つて鏗爾として著る。
陸には濤の牀に涌くを疑ひ、宵には虹の幕に闔するに駭く。
棲を警めて已に翻翻、槁を墜して俄に索索。
顚旭、かつて書を悟り、俠軻、博を爭ふを記す。
目、花するも、酒の湎するに匪ず、膚、粟して、裘の薄きに似たり。
忠義、氣、盡く張り、姦邪、膽、俱に落つ。
玉玦の計に從はず、銅槃の約を定めむと欲す。
未だ大娘の强を數へず、終に處女の弱に勝れり。
季路、手を袖して欽し、裴旻、顏に汗して怍づ。
疾視、誰か敢て當らむ、成らず、我、學ぶを慙づ。

勇夫怒生瘻。憲恐僕戰成瘧。
功收刺虎奇。啓志感聞雞惡。
暫停月徘徊。憲既罷天寂寞。
崆峒詎必倚。啓氛祲行可廓。
馘妖正思今。憲斷佞猶慕昨。
會合固有期。啓死生良欲託。
寧憂武庫災。憲但俟凶門鑿。
慷慨勿悲歌。啓淋漓且酣酌。憲

慷慨、悲歌する勿れ、淋漓、且つ酣酌せよ。

【字解】【一】晚陌　日暮の大道。【二】鳴鑾　鑾はくつわ。【三】嚴柝　寒げに響く拍子木。【四】登堂　堂に上つて宴を催す。【五】秦賓　秦客に同じ。【六】掉鞅　鞅は舞曲の名、竿を揮つて起つて舞ふこと、李賀の公莫舞歌に腰下三看寶玦光、項莊掉鞅羽林前起とある。【七】拂鐔　莊子に「周宋を鐔となす」とあつて、その注に「鐔は劍鼻なり」とある、ふちがしら。【八】星躔鍔　吳越春秋に「伍子胥、江を過ぎ、その劍を解いて漁父に與へて曰く、この劍中、七星北斗あり」と見ゆ。廣韻に「鍔は劍端」とある、つば。【九】拭土　土で磨き上げる。曹煥外傳に「煥、豐城の獄に劍を得たり、南昌西山の黃白土を以て之を拭ふ、光艷照耀、張華、更に華陰の赤土を以て之を磨し、鮮光愈よ亮」とある。【一〇】光燁燁　吳同集に「薛俠者、一銅劍を得たり、長さ四尺、劍、靶に逮る、靶に龍鳳の狀を鑄し、左文火の如く、光彩灼燁」とある。【一一】寒濤　衞象の詩に櫚鶴新淬劍光寒とある。【一二】滑簷溜　檐から下つた氷柱、劉峻の金華山栖志に「懸溜、軒甍より瀉ぐ」とある。【一三】刀鋒膏　木草に「鴝鵒は水鳥なり、大、烏の如く、その膏、刀に塗れば鋒せず」とある。【一四】七淬藥　前に數ば見えたが、史記荊軻傳に「太子、謀め天下の利匕首を求め、趙人徐夫人の匕首を得たり。これを百金に取り、工をして、藥を以て之を淬せしむ、以て人を試む、血、縷を濡し、人、立どころに死せざるはなし」とある。【一五】人血乾　錢太初の劍の詩に得レ自三猛公手一、屠レ蠡血未レ乾とある。【一六】鬼踪鏁　鏁は消えるる。【一七】莊子說　莊子に說劍の一篇がある。【一八】王郎斫　杜甫の短歌行、贈三王郎司直一に王郎酒闌拔レ劍斫レ地歌莫レ哀とある。【一九】鴻鵠　雁が飛び上る、樂府雜記に「舞は樂の容なり、或は驚鴻に象り、或は飛燕の如し」とある。【二〇】雷躍　莊子に「鴻濛、方に礴を拊ち、雷躍して滯ばむとす」とある。【二一】蛇赴壑　王屋の詩に冉冉年光赴レ壑蛇とある。【二二】雷破山　莊子に「疾雷、山を破り、風、海を振ふも、驚かす能はず」とあり「この劍、一たび用ふれば、雷霆の震ふが如きなり」とあり、廣異記に「農夫、地を耕して劍を得たり、賈胡、これを百萬に售る、農夫故を問ふ、曰く、これ破山劍と名づく」とある。【二三】風捲淚　海錄碎事に胡風似レ劍嗖二人骨一とある。【二四】帆綷張　柳貫の詩に張レ帆得三順風一、飛鴻與爭レ疾とある。【二五】弩弛張　文同の詩に破若三勁弩張一とある。【二六】翼蔽　史記項羽本紀に「項莊、劍を拔いて、起つて舞ふ。項伯、亦た劍を拔いて起つて舞ひ、常に身を以て沛公を翼蔽す、莊、擊つ能はず」とある。【二七】曲踊　左傳に「魏犨、胸を束れ、使者を見て曰く、臂の靈を以て寧あらざるなりと。距躍三百、曲踊三百」とあつて、その注に「距躍は超越なり、曲踊は跳踊なり」とある。【二八】西方帝　秋の神、即ち白帝、李賀の劍歌に提出西方白帝靈とある。【二九】屋翻　杜甫の詩に高浪乘翻レ屋とある。【三〇】地股　正韻に「股音壓、雷、聲を發するなり」とある。【三一】揮霍　張衡の西京賦に跳丸彫之揮霍とあつて、西陽雜俎に「老人、紫衣朱髮、劍七口を擲して中庭に舞ふ、逸に躍つて揮霍す」とある。【三二】突騎奔　後漢書耿弇傳に「弇、劍を按じて曰く、歸つて、突騎を發し、以て烏合の衆を轔せよ、枯を摧き腐を折くが如きのみ」とある。【三三】刼齊壇　史記刺客列傳に「曹沫、魯の將となり、齊と戰つて三たび敗北す。魯の莊公懼れ、乃ち遂邑の地を獻じて以て和す。猶ほ復た以て將となす。齊の桓公、魯と柯に會して盟ふを許す。桓公、莊公と既に壇上に盟ふ。曹沫、匕首を執つて齊の桓公を刼す。桓公の左右、敢て

動くなし、而して問うて曰く、子、將に何をか欲す。曹沫曰く、齊は强くして魯は弱し、而して、大國、魯を侵す。亦た以て甚し。今、魯城壞る、卽ち齊の境を壓せむ。君、其れ之を圖れ、と。桓公、乃ち盡く魯の侵地を歸すを許す、曹沫三戰亡ふところ、盡く魯に復す」とある。【五五】 蜀閣　蜀の劍閣、李白の蜀道難に劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當ㇾ關、萬夫莫ㇾ開とある。【五六】 蛇瓠嗜　前に卷十一、贈二劉生一耿の詩中にも引いて置いたが、史記高祖本紀に「高祖、酒を被つて、夜、澤中を經、大蛇徑に當る、高祖、劍を拔いて蛇を斬る。後に一老嫗あり、夜哭して曰く、吾が子は白帝の子なり、化して蛇と爲つて道に當る、今、赤帝の子に之を斬らる」とあつて、その注に「秦は西戎に居り、少昊の神を主とし、西時を作つて白帝を嗣る」とある。【五七】 猿翁傳　吳越春秋に「范蠡、越王に謂つて曰く、楚に處女あり、南林の中に出づ、願はくは、君、問ふに手戰の道を以てせよ、と。女、將に見たむとし、道にして老人に逢ふ。自ら猿公と稱して曰く、聞く、子善く劍を爲すと。願はくは、一たび之を觀む、と。因つて、竹枝を拔く、女、卽ちその末を接し、公、その本を操る。而して、女、因つて杖を擧げて之を擊つ、猿公飛んで樹に上り、變じて白猿となる。女、去つて越王に見ゆ。王、五校の高才に命じて、これを習はしむ、この時に當つて、皆越女の劍と稱す」とあり、江總の白猿傳に「或は、雙劍を舞はし、環身電飛、圓光月の若し」とある。【五八】 斬關　抱朴子に「沈閭巨闕は關を斬るの良なり」とある。【五九】 擊柱　漢書叔孫通傳に「高帝、悉く秦の儀法を去つて簡易を爲す、羣臣、飲んで功を爭ひ、醉へば或は妄呼し、劍を拔いて柱を擊つ」とある。【六〇】 濤涌牀　曹唐の買劍の詩に峰拋三牀下一怕三泉流一とある。【六一】 虹闕幕　詳驗集に「韋皐、蜀を鎭し、賓客と宴す。忽ち、虹蜺、空よりして下り、首を庭に垂れ、靡然として晴霞の狀の如し、久しうして、方に去る」とある。【六二】 暾樓　暾に宿する鳥を警戒して起たしめる。【六三】 墜槁　枯れた葉を吹き落す。【六四】 顚旭　顚は狂、酒に醉うて狂すること、張旭を云ふ。前に卷十一、草書歌の詩中にも引いて置いたが、唐書李白傳に「旭は蘇州吳人、酒を嗜む、大醉する每に、呼叫狂走、乃ち筆を下し、或は頭を以て墨に濡して書し、すでに醒め、自ら視て以て神と爲す、世、張顚と呼ぶ」とあり、杜甫の飲中八仙歌に張旭三杯草聖傳、脫ㇾ帽露ㇾ頂王公前とある。【六五】 悟書　唐書李白傳に「倡公孫の劍器を舞はすを觀て、その神を得たり」とあり、同じ事が杜甫の觀三公孫大娘弟子舞二劍器一引に見えて居る。【六六】 使劍記　爭博　史記荊軻傳に「荊軻、かつて游んで榆次を過ぎ、蓋聶と劍を論ず。蓋聶、怒つて之を目す。榆次を去つて邯鄲に游ぶ。魯句踐、荊軻と博して道を爭ふ、魯句踐、怒つて之を叱す、荊軻、默して逃れ去る」とある。【六七】 目花　目がかすむ、杜甫飲中八仙歌に知章乘ㇾ馬似ㇾ乘ㇾ船、眼花落ㇾ井水底眠とある。【六八】 酒酒　酒に沈酒する。【六九】 膚粟　肌膚が粟だつ、東坡の詩に凍合三玉樓一寒起ㇾ粟、光搖三銀海一眩生ㇾ花とある。【七〇】 膽俱落　唐書に「李祐、入朝し、詔に遂うて進率す。侍御溫造、これを彈す。祐、陣を待ち、股戰して曰く、吾、衰、蔡州城を踰え、吳元濟を擒にす、未だ嘗て心動かず。今日、膽、溫御史に落つ」とあり、歐陽修の劍の詩に姦邪與三侵頒一膽破骨亦驚とある。【七一】 玉玦計　史記項羽本紀に「項王、卽日、沛公を留めて與に飲む。范增、數ば項王を目して佩ぶるところの玉玦を擧げ、以て之に示すもの三たび。項王、默然として應ぜず。范增、起つて出で、項莊を召して、謂つて曰く、君王人と爲り忍びず、若入つて、前んで壽を爲し、壽畢らば、請うて劍を以て舞ひ、因つて、沛公を坐に擊つて之を殺せ。しからざれば、若の屬、皆且つ虜にせられむ」とある。【七二】 銅槃約　史記平原君列傳に「毛遂、劍を按じて前む、楚王唯唯す。毛遂、楚王の左右に謂つて曰く、雞狗馬の血を取り來れ、と。毛遂、銅盤を捧げて跪き、これを楚王に進めて曰く、王、當に血を歃つて、從を定むべし、次は吾が君、次は遂と。遂に從を殿上に定む」とある。【七三】 大旗張　前に悟書の項にも見えたが、卽ち公孫大娘、明皇雜錄に「時に公孫大娘といふものあり、善く劍を舞はし、能く鄰里曲、及び裴將軍の滿堂勢、西河劍器渾脫遣を爲し、姸妙、皆時に冠絕す」とある。【七四】 虞女韻　前の猿翁の項に見ゆ。【七五】 季路　仲由、字は子路、家語に「子路、戎服して孔子に見え、劍を拔いて之を舞はして曰く、古しへの君子、劍を以て自ら衞る。子曰く、古しへの君子は、忠、以て質と爲し、仁、以て衞となし、不善なれば忠を以て之を化し、寇暴なれば仁を以て之を禦ぐ、何ぞ必ずしも劍を恃まむや、と。子路、撫齊して敎を受く」とある。【七六】 裴旻　名畫記に「開元中、裴旻、善く劍を舞はす。旻道玄、旻の舞を觀て筆を揮ふこと、奔す逃む」とある。【七七】 汗顏怍　顏に汗を流して怍ぢ恐れる。【七八】 不成我暫學　史記項羽本紀に「項籍少時、書を學んで成らず、去つて劍を學んで又成らず。項梁、これを怒る。籍曰く、書は以て姓名を記するに足るのみ、劍は一人の敵、學ぶに足らず、願はくは、萬人の敵を學ばむ、と。ここに于て、項梁、乃ち籍に兵法を敎ふ、籍、大に喜び、略ぼ其意を知る」とある。【七九】 怒生瘿　瘿は瘤、盧志賈逵傳の注に「逵、弘農に在り、典農校尉と公事を爭ひ、理むるを得ず、乃ち憤を發して瘿を生ず」とあり、韓愈の聯句に怒瘿爭二磊磊一とある。【八〇】 聚成

鑿　戰栗して、おこりを煩つて居る樣である。【六一】 **刺虎奇**　史記陳餘傳に「卞莊子、虎を刺さむと欲す。管豎子、これを止めて曰く、兩虎方に共に牛を食ふ。牛甘ければ、必ず鬬はむ、鬬へば、大なるもの傷つき、小なるもの亡びむ、從つて、これを刺せば、一舉必ず雙虎の名あらむ」とある。【六二】 **聞雞惡**　晉書祖逖傳に「司空劉琨と俱に司州主簿となり、被を共にして同じく寢ぬ。中夜、荒雞の鳴くを聞き、琨を驚つて覺まして曰く、これ惡聲に非ざるなりと。因つて起つて舞ふ」とある。【六三】 **月徘徊**　月がいざよふ、庾肩吾の詩に樓上徘徊月とあり、賈餗の太阿賦に環分三圓月一、終疑三映レ月之流一とある。【六四】 **崆峒**　西方の山の名。但し、險絶なる山の義にも用ひる。杜甫の詩に防身一長劍、將欲倚三崆峒一とある。【六五】 **氛祲**　妖氣に同じ。【六六】 **行可廓**　廓は廓然として開く、魏の文帝の書に「僕に劍一枚あり、因つて左右に給し、以て妖氣を除かむ」とある。【六七】 **誠妖**　妖怪の首を斬る。松窗雜記に「道士趙顔、一軟障を得たり、婦人を圖して甚だ麗なり。豐工曰く、これ眞眞と名づく、これを呼ぶ百日、すなはち塵に百影の灰を以て之に灌ぐべし、卽ち活きむと。顔、その言の如くす、果して活く。友人曰く、これ妖なり、余に神劍あり、これを斬るべし」とある。【六八】 **斷侯**　朱雲の故事、前に數ば見ゆ。漢書の本傳に「願はくは、尙方の斬馬劍を賜はり、佞臣一人の頭を斷ち、以て其餘を厲まさむと。上問ふ、誰ぞ、對へて曰く張禹」とある。【六九】 **會合固有期**　前に卷五、劍池の詩中にも引いて置いたが、晉書に「雷煥、豐城の雙劍を得、一を遂つて張華に與へ、一を留めて自ら佩ぶ。華、劍を得、報じて曰く、詳に劍文を觀るに、乃ち干將なり、莫耶、何すれぞ至らざる。然りと雖も、神物、終に當に合ふべきのみと。後、煥の子華、延平津を過ぐ、劍、忽ち躍つて水に入る、華、人をして水に沒して之を求めしむ、兩龍を見、恐れて返る」とある。【七〇】 **死生良欲託**　前に卷四、魏使君見レ示三舊贈詩一の詩中にも引いて置いたが、史記吳世家に「季札の初めて使するや、北、徐君を過ぐ。徐君、季札の劍を好む、口敢て言はず。季札、心に之を知るも、上國に使するが爲に、未だ獻ぜず、還つて徐に至れば、徐君、すでに死す、札、乃ちその寶劍を解き、これを徐君の冢樹に繫いで去る」とある。【七一】 **武庫災**　晉書に「太康三年、武庫火あり、中書監張華、兵を列して防衛す、高祖の斬蛇劍、屋を穿つて飛び去るを見る、尙ふところを知るなし」とある。【七二】 **凶門鑿**　淮南子に「將、すでに斧鉞を受く、乃ち凶門を鑿つて出づ」とあつて、その注に「凶門は、北出の門、將軍の出づる、喪禮を以て之を處す、その必死を以てなり」とある。【七三】 **淋漓**　酒にひたる貌。

【題義】　聯句は、韓退之集に十首位も見えて居て、その處で、その起原等に就いて說明して置いたから、ここには省略するが、ここに在る聯句は、いづれも、かの城南聯句などと同一の形式に於て試みられたものである。張憲は、前に卷四、答三張山人憲一の題義の處に注して置いたが、列朝詩集に「字は思廉、山陰の人、才を負うて不羈、四方に薄游し、誓つて娶らず、鄉里に歸らず。かつて、京師に走り、天下の事を創言す。衆、その狂に驚く。還つて、富春山中に入り、緇黃に混じて、自ら放にす。淮張、吳に據るや、禮致して樞密院都事となす。吳亡ぶるや、姓名を變じて杭州に走り、報國寺に寄食す」とあつて、その靑邱と應酬したのは、張士誠に事へて蘇州に居た時である。銅臺李壯士は、前に卷四に贈三銅臺李壯士一の五古があつて、略ぼ其人物を記してあるが、その名字閥歷等は分からず、銅臺は卽ち魏の銅雀臺、今の河南彰德府臨漳縣で、李は、卽ち其地の產である。この聯句は、張憲と共に夜飮を爲し、席上、李壯士の劍舞を觀たるに因つて試作したのである。

【詩意】　日暮の陌上、くつわの鳴る音も止み、秋城の中には、夜を警むる拍子木が、寒げに響いた。ここに、堂に上つて會飮を爲したのは喜ばしいが、座上を顧みて、音樂の無いのは、まことに飽ッ氣ない。すると、豪客とも稱すべき李壯士は、杯を捧げて、われ等の爲に壽をなし、それから、長い物を揮り廻はして舞を試みた。忽ちにして、旋風、劍鼻を拂うて、うなりを生じ、七星の文は、鍔文に輝いて見える。その劍は、土で拭つたばかりで、冷かなる色、わづかに動き、火に映ずれば、光彩灼

爍として居る。それを打ち揮ると、寒げなることは、澗中を走る奔泉の如く、明かなることは、軒からぶら下つて居る氷柱の如く、鶗鴂の膏で刀を磨いたとか、毒藥を匕首に塗りこめたとかいふ昔がたりも、物の數とも覺えぬ位。物とはなしに腥きは、人の血潮が乾いて、こびり付いて居る爲では無いかと疑はれ、その神威は、鬼神を攝伏して、その跡を消さしめ、その雄なることは、莊子の說劍を思ひ合はさしめ、醉つて揮り廻すことは、王郎が地を斫つたことを聯想せしめ、その聯翩たるは、忽然として雁が飛び起つが如く、奮迅する貌は、雀の如く髀を拊つて躍る樣であるし、來つては、龍の淵より出づるが如く、去つては、蛇の壑に走るが如く、その疾きことは、雷が山を破るかと驚かれ、その氣力壯なるは、風が大漠の沙を捲くかと訝り、初めて馳せては、帆を十分に張つた如く、忽ち注ぎ畢つては、弩を放つて弛めた樣である。この勢では、陰陽、爲に開闔を變じ、潮汐も亦た之に隨つて進退するであらう。高く步を移しては、節に赴くと同じく、形態の珍らしきは、狀を分つて、とりどりに面白い。斜に廻つては、他を翼蔽する樣であるし、曲踊を爲せば、さながら人に拏みかかるに似て居る。欻として、西方なる秋の神を驚かし、凜として、東海の天吳をも怖れしめる。やがて、屋根がひッくりかへるばかりに、その影、紛綸して亂れ、地が鳴り轟く樣に、その勢は、揮霍して振つて居る。その亂るるに當つては、突騎の奔るを思ひ、その低くなる時は、饑ゑた隼が地面にのして物を掠める樣であるし、旁には、萬條の箭の飛び來るを薙ぎ拂つて、切り落すべく、前には、千本の槍の簇がるを取り拉いで、路を開いて進むことが出來る。出でては、盟を爲す壇の上に於て、齊侯を脅すべく、立つては、蜀の劍閣に於て、一夫、以て萬夫に當り得べきと一般、これを澤にしては、蛇の母たる老嫗の哺くを聞くべく、これを路にしては、老人に化けた白猿に遇つて、一勝負試むることが出來る。關を斬つては、豁然として左右に分れ、柱を擊つては、鏗爾として打ち當つた音がする。陸に在つては、波濤の牀邊に涌くを疑ひ、夜に於ては、虹蜺の幕中に闖入するに駭くばかり。塒に宿れる鳥は、これが爲に驚きつつ翻翻として地に落ち、枯れた木の葉は、これが爲に拂はれつつ、索索として聲を爲して居る。酒に醉ひ狂ふ張旭は、公孫大娘の劍舞の巧妙なるを見て、自然、草書の筆法を悟つたといふし、俠氣ある荊軻は、魯句踐の劍法に達するを知るが故に、博奕を爭つて逃げ出して仕舞つた。ここに見て居ると、目の霞むのは、酒に沈湎したからでもなく、肌膚の粟だつことは、著て居る裘の薄い爲であるらしい。忠義の氣は、盡く張り、姦邪の膽は共に落つるを疑はず。むかし、項羽は、范增が玉玦を擧げて、その決心を促したが、それに從はず、仍つて、項莊をして劍舞せしめたが、今觀て居ると、さながら、その時の如く、さては、毛遂が楚王に詰め寄せて、銅盤の血を歃つて盟約を爲すに至らしめた其日の事を思ひ出さしめる。公孫大娘の上手なるも、決して算へ立てるに足らず、もとより、纖弱なる越の處女にも勝つて居る。もし之を見たならば、子路は手を袖にして威服するであらうし、裴旻は、顏に汗して、怍ぢ恐れるであらう。一寸見てだに、誰も敢て當り得べし

とは思はれず、いくら稽古した處で、愧かしながら、自分には到底出來さうもない。勇夫は、その眞似も出來ないのを怒つて癇を生ずべく、臆病な下僕は、戰きつつ、おこりを煩つて居る樣になる。虎を刺しては、卞莊子の如き奇功をなし、雞聲の惡しきを聞いては、祖逖の如き雄志を感ずる。やがて、しばらく舞の手を停めると、月の影いざよひ、すでに一曲を舞ひ畢れば、天も寂寂として、すべて靜まりかへつて居る。この長劍だにあらば、必ずしも崆峒に倚るを要せず、そして、滿目の氛祲も、やがて、廓然として掃ひ清めることが出來る。妖を戮るのは、丁度今であるし、佞臣を退治せむとしては、昔人の忠烈を慕はしく思ふ。雷煥の得た兩劍の會合は、もとより期あるべく、季札が劍を懸けたのは、死生ともに、その至情を託すべきである。武庫に災あつた處で、劍にして靈あらば、逃れ去るべきが故に、格別心配するにも當らぬし、どうか、これを佩びて出征して見たいと思ふが故に、凶門を驅たむことを待つて居る。さはれ、慷慨の餘り、悲歌するは宜しくないので、それよりも、十分に酒を飲むが宜しからうと思ふ。

【餘論】もと劍舞を詠じたのであるが、これに關する材料は、いくらも無い處から、主として劍に關する典故を蒐集して臚列した。中には、多少無理と思はれるのもあるが、運旋の結果、略ぼ落ち付いて、先づ大抵には出來て居る。そして、二人、才力相敵することは、さながら當日の韓孟の如く、又これだけの聯句は、城南以後、あまり見ないと云つても善からう。

劍池聯句

與張憲・金起・王隅同賦

飛梁上當空。憲直壁下插水。
兩樹交古陰。啓孤亭倒清泚。
初至意已愜。憲再陟神亦靡。
氣消淵龍藏。起骨朽山虎死。
蒼崖出仙詩。隅金藏閟僧史。
伯圖渺何在。憲世事倏如此。
佳游信難遭。啓壯志良未已。
凭欄瞰神州。起樹羽訝軍壘。
未覩煙塵清。隅且耽林壑美。
臨風揮一觥。憲憩石脫雙履。
鶯啄朱果殘。啓蜂抱黃英委。

劍池聯句

張憲・金起・王隅と同じく賦す

飛梁、上、空に當り、直壁、下、水に插む。
兩樹、古陰を交へ、孤亭、清泚に倒る。
初め至つて、意、已に愜ひ、再び陟つて、神亦た靡く。
氣消えて淵龍藏し、骨朽ちて山虎死す。
蒼崖、仙詩を出し、金藏、僧史を閟づ。
伯圖、渺として何にか在る、世事、倏ち此の如し。
佳游、信に遭ひ難く、壯志、良に未だ已まず。
欄に凭つて神州を瞰、羽を樹てて軍壘と訝る。
未だ煙塵の清むを覩ず、且つ林壑の美に耽る。
風に臨んで一觥を揮ひ、石に憩うて雙履を脫す。
鶯は啄んで朱果殘し、蜂は抱いて黃英委す。

琴咽斜陽蟬。憲棋戰欲雨蟻。琴は咽ぶ斜陽の蟬、棋は戰ふ雨ふらむと欲するの蟻。
溽暑避松筵。啓輕涼透藤椅。溽暑、松筵に避け、輕涼、藤椅に透る。
瞑目思黑甜。憲潛心翫玄旨。瞑目、黑甜を思ひ、潛心、玄旨を翫ぶ。
籟響破虛寂。啓香飄聞旖旎。籟響いて虛寂を破り、香飄つて、旖旎を聞く。
飯鐘隔煙來。憲樵笛呼月起。飯鐘、煙を隔てて來り、樵笛、月を呼んで起る。
整轡戒僕夫。啓揖鞭謝釋子。轡を整へて僕夫を戒め、鞭を揖して釋子に謝す。
厖聲吠喧呵。起騎影歸迤邐。厖聲、吠えて喧呵、騎影、歸つて迤邐。
餘戀尙眷然。隅重來那復爾。餘戀、尙ほ眷然、重來、那ぞ復た爾る。
明發抗塵容。何由繼芳趾。憲明發、塵容を抗ぐ、何に由つて芳趾を繼がむ。

【字解】【一】飛梁　橋を云ふ。【二】直壁　絕壁に同じ。【三】清泚　清き流。【四】山戊　吳越春秋に「闔閭、ここに葬り、扁諸魚腸の劍、各三千を以て殉と爲す。越えて三日、金精、結んで白虎となり、その上に踞す」とある。【五】仙詩　前に卷五、弔三幽獨君」の題下に、引いて置いたが、姑蘇志に「大曆十二年、虎邱寺に鬼あり、詩二章を題す、云云、姓氏を詳にするなし、故に稱して幽獨君となす」とある。【六】金藏　銅を張つた經藏、陸游の詩に補三成僧史一可レ夢レ山とある。【七】神州　中原の地。【八】樹羽　羽旗を建てる、杜甫の詩に樹レ羽臨三九州一とある。【九】欲雨蟻　雨降る前の蟻、李商隱の詩に聞若三雨前蟻一とある。【一〇】溽暑　蒸し暑いこと。【一一】松筵　松の樹皮で編んだ扇、掲子方言に「扇、關より東、これを筵といひ、關より西、これを扇といふ」とある。

【一二】藤椅　藤蔓で編んだ椅子。【一三】黑甜　闇黑で味が甘いといふ義で、卽ち睡眠を云ふ。東坡の詩に一枕黑甜餘とある。【一四】玄旨　老莊の深旨。【一五】籟響　籟は風の吹き入る竅穴。【一六】飯鐘　飯を報ずる鐘。【一七】樵笛　樵夫の吹く笛。【一八】整轡　手綱を整へる。【一九】厖聲　犬の聲。【一〇】迤邐　路の曲がること。【一一】明發　明日に同じ。【一二】抗塵容　塵にまみれたる顏をあげる。【一三】芳趾　趾は足跡。

【題義】劍池は、前に卷五、虎邱の題下に注して置いたが、姑蘇志に　その最も著はるるものを劍池と爲す、兩崖劃開、中に石泉を涵し、深さ測るべからず。相傳ふ、秦の始皇、闔閭の墓を發き、山を鑿つて劍を求む、得るところなし。その鑿つ處、遂に深澗を成す、今劍池と名づく。顏眞卿、虎邱劍池の四字を書し、石刻、猶ほ存す」とある。青邱は、ある時、張憲等、兩三輩と其地に游び、仍つて聯句を試みたのである。張憲は、前詩の題下にも詳述して置いたし、王隅は、前に卷六に其死を哭する詩があつて、その題下に詳述して置いたが、金起だけは、不詳である。

【詩意】橋は高く上に在つて、大空に當り、絕壁の脚部は、下、水に插んで居る。二本の木は、古りたる樹陰を交へ、一つの亭子は、清流に其影を倒映して居る。はじめ往つたばかりで、すでに氣に入つたが、再び登れば、精神も亦た靡くばかり。龍は深く淵底に匿れて、その氣、すでに銷えむとし、虎は山中に死して、その骨さへ、腐つて仕舞つた。蒼崖は、むかし、幽獨君が詩を記した處であるし、銅で張つた經藏には、僧史の原稿が入れてある。闔閭の霸圖は、渺として何處に在るか、人世の事は、

盛衰遞變、大抵さうしたものである。佳游は、滅多に出合ひ惡いものであつて、わが壯心は、良に未だ已まず。そこで、欄に凭つて中原の地を眺め下し、羽旗の建てるを見ると、軍壘かと訝つた。今しも、煙塵の消えたるを覩ざれども、ここに來つて林壑の美に耽るを得たるは、知らず是れ何の幸ぞ。そこで、風に臨んで、一杯を傾け、石上で坐憩して、兩方の靴を脱ぎ棄てた。鶯が啄む爲に、朱果は無くなり、蜂が抱いて、黄花は凋んで仕舞つた。琴の音は咽んで、夕日に嘶く蟬の如く、圍碁の鬪がしきは、雨の前の蟻の樣である。蒸し暑いのを防ぐ爲に、松皮の團扇を揮ひ、そよ吹く涼氣は、藤製の椅子に透るを覺えた。目を閉ぢては、黑甜の滋味を思ひ、心を潛めては、老莊の深旨を翫んで居る。樹の竅は響を發して、虚寂を破り、香は飄つて、たをやかに聞こえる。兎角する内に、飯時を報ずる鐘は、暮煙を隔てて來り、樵夫の笛は、月を呼んで吹き起つた。そこで、手綱を整へて、僕夫に出發を注意し、鞭を擧げて、住僧どもに會釋した。犬の聲は、やかましく、騎馬の影は、曲れる小路をたどつて行く。流石に名殘の惜まれて、眷戀の情、禁じ難く、再び來游するのは、何日とも豫期することが出來ない。これから、城内に歸れば、明日又ぞろ塵にまみれた顔を上げる外なく、如何にして游跡を繼ぐべきか、まことに、殘り惜しいことである。

病柏聯句

病柏聯句

與青城杜寅・鄭郡徐賁游白蓮寺見病柏而作

青城の杜寅・鄭郡の徐賁と白蓮寺に游び、病柏を見て作る

抱質雖輪囷。託根何坎坷。寅　質を抱く、輪囷と雖も、根を託す、何ぞ坎坷。
死色見已深。生意存猶頗。啓　死色、見て已に深し、生意、存するも猶ほ頗。
老枿焦半身。餘葉禿偏髻。賁　老枿、半身を焦し、餘葉、偏髻を禿にす。
恩謝漢陵春。災非陸渾火。寅　恩は謝す漢陵の春、災は陸渾の火に非ず。
柯傾痺待扶。節漏瘡思裹。啓　柯傾いて、痺、扶を待ち、節漏れて、瘡、裹まむを思ふ。
下窾封蚍蜉。上穴綴蜾蠃。賁　下窾、蚍蜉を封じ、上穴、蜾蠃を綴る。
風欺聲告哀。雨冒汗憎顆。寅　風欺いて、聲、哀を告げ、雨冒して、汗、顆を憎む。
蟄空虺喜容。攀脆猿愁墮。啓　空に蟄して虺容るるを喜び、脆を攀ぢ猿墮つるを愁ふ。
將斲豈中梁。欲刳詎宜舸。賁　將に斲らむとす豈に梁に中らむや、刳らむと欲す詎ぞ舸に宜しからむや。
蓋瘁缺青葱。梢枯辭猗儺。寅　蓋は瘁して青葱を缺き、梢は枯れて猗儺を辭す。
乏子供爐焚。無陰庇牀坐。啓　子の爐焚に供するに乏しく、陰の牀坐を庇するなし。

蠹盡啄鳥飢。巢傾躓雛跛。貧
臞形慘若、尫。突腹腫如果。寅
藤纏偶假、妝。蘚剝每慙、裸。啓
主惜覬匠顧。樵窺避僧邏。貧
土瘠力易、衰。巖危勢難、妥。寅
殺懼苦霜仍。醫期甘露可。啓
成器未、爲、福。不材反逃、禍。貧
依林尙支撐。亞石猶磊砢。寅
閱歲失貞姿。承陽愧纖朶。啓
操辜孔語稱。名負杜吟播。貧
敢要泰樹封。孰效禹梅鎖。寅
蟠深漫欲、踞。架重寧堪、荷。啓
氣同生固均。數異測誠叵。貧

蠹盡き鳥の飢ゑたるを啄ましめ、巢傾き雛の跛なるを躓かしむ。
臞形慘として尫の若く、突腹腫れて果の如し。
藤纏うて偶ま妝を假り、蘚剝げて每に裸を慙づ。
主は惜んで匠の顧るを覬ひ、樵は窺うて僧の邏するを避く。
土瘠せて力衰へ易く、巖危くして勢妥なり難し。
殺は苦霜に仍るを懼れ、醫は甘露の可なるを期す。
成器未だ福と爲さず、不材、反つて禍を逃る。
林に依つて尙ほ支撐、石に亞れて猶ほ磊砢。
歲を閱して貞姿を失ひ、陽を承けて纖朶を愧づ。
操は孔語の稱するに辜き、名は杜吟の播くを負ふ。
敢て泰樹の封を要せむや、孰れか禹梅の鎖に效はむ。
蟠深く漫に踞せむと欲す、架重く寧ろ荷ふに堪へむや。
氣同じくして生固より均しく、數異にして測る誠に叵し。

膏乾燃不、明。屑墜掃還夥。寅
客憐弔賦悲。童棄培功惰。啓
終護竟煩、誰。今看幸遭、我。貧

膏乾いて燃ゆること明かならず、屑墜ちて掃ふ還た夥し。
客は憐んで弔賦悲み、童は棄てて、培功惰る。
終護、竟に誰をか煩はす、今看る、幸にして我に遭ふを。

【字解】【一】輪囷　節くれ立つて居る貌、鄱陽の上二梁王二書に蟠木根柢、輪囷離奇とある。【二】坎坷　坎軻に同じ、不遇の貌、播堆の河東賦に淺南巢之坎坷兮とある。【三】死色　枯死せむとする氣色。【四】存猶顛　餘程殘つて居る。【五】老枿　枿は切り株、伐木の殘餘。【六】倔髯　髯はきりがみ、小兒の剪髮、禮記內則に「髮を屑つて髯となす」とあつて、その注に「髯は小兒遣すところの髮なり」とある。【七】漢陵春　後漢書光武帝紀の注に、高祖の長陵より平帝の康陵に至るまで、凡そ十一陵を算してあつて、これ等の諸陵には、柏樹を植ゑたのであらう。【八】陰渾火　尋愈に陸渾山火詩がある。【九】柯傾　柯は幹。【一〇】痺荇扶　痺はしびれる、感覺作用を失ふ。【一一】節漏　節はふし、漏は穴があく。【一二】下嶽　嶽は穴。【一三】蚍蜉　爾雅に「蚍蜉は大螘」とあつて、その注に「俗呼んで馬蚍蜉となす」とある、卽ち大蟻。【一四】蟈蟆　詩經に蟈蟆有子、蝌蟆負之とあり、爾雅注に細腰蜂とある、卽ち似我蜂。【一五】憎顆　說文に「顆は小頭なり」とあつて、粒をなすこと。【一六】怠喜容　怠は蝮蛇、まむし。【一七】豈中樂　莊子に「大木を見る、仰いで、その細枝を視れば、拳曲にして以て棟梁と爲すべからず」とあり、三輔黃圖に「漢の武帝、柏梁臺を建つ、香柏を以て梁となすなり」とある。【一八】欲刳　刳は刳ぐる、けづる。易に「木を刳つて舟となす」とあり、又柏で造つた舟は、詩經に汎彼柏舟とある。【一九】蓋瘁　天蓋の樣になつて居た葉が凋む。【二〇】猗儺　光澤ある貌、詩經に隰有萇楚、猗儺其枝とある。【二一】乏子　子は柏の實。【二二】慘若尫　尫は弱弱しきこと。【二三】匪如果　莊子に「腹、猶ほ果然たり」とあつて、膨れて居ること。【二四】戲匠顧　莊子に匠石が櫟社の樹を見て、不材の木として顧みなかつたといふことがあるし、陸龜蒙の詩に從遭三匠石顧、とある。【二五】憎邏　邏は說文に「巡なり」とあつて、見廻はること。【二六】罹妥　妥は安穩。【二七】苦霜　ひどい霜、春秋に「定

癸亥年冬十月、隕霜、菽を殺す」とある。【二六】 甘露　昭明太子の唇に甘露入レ頂、慧水灑レ心とある。【二九】 不材　荘子に「山中の木、不材を以て、その天年を終るを得たり」とある。【三〇】 支撐　二字ともに支へる、范成大の詩に椎楯共突兀、鬼神相支撐とある。【三一】 磊砢　節くれ立つ、世説に「和嶠、少にして風格あり。裴頠、見て嘆じて曰く、嶠ほ森森として、千丈の松の若く、磊砢・節目多しと雖も、これを大厦に施さば、棟梁の用あり」と見ゆ。【三二】 真姿　冬も凋まぬ姿。【三三】 承陽　太陽の光を受ける。【三四】 纍纍　こまかい小枝。【三五】 孔語猶　論語に「歳寒しうして松柏の凋むに後るるを知る」とあり、杜甫の病柏に歳寒忽無レ憑、日夜柯葉改とある。【三六】 杜吟播　杜甫の詩が世に播布する、杜甫の古柏行に孔明廟前有二老柏一、柯如二青銅一根似レ石、霜皮溜レ雨四十圍、黛色參レ天三千尺とある。【三七】 泰樹封　史記始皇本紀に「泰山に上つて、封祀す、風雨暴に至る、樹下に休ひ、因つて、その樹を封じて五大夫と爵す」とある。【三八】 禹梅鎮　四明圖經に「鄞縣大梅山頂に梅木あり、伐つて、會稽禹廟の梁となす。張僧繇、龍を其上に畫く、夜、或は風雨、飛んで鏡湖に入り、龍と鬬ふ。後、人、梁上水淋漓たるを見、はじめて之を駭異し、鐵索を以て柱に鎖す、然れども、今存するところは、乃ち蝕木、猶ほ絆するに鐵索を以てするは、故事を存するのみ」とある。

【題義】 白蓮寺は、前に巻六、次韻内弟周思敬、秋夜同飲二白蓮寺池上一の題下に注して置いたが、姑蘇志に「白蓮講寺は、長洲縣二十都甫里に在り、卽ち陸龜蒙の別業、祠堂あり」と記して居た。柏は、前にも述べたことがあつたが、邦名かしはといふのは、太だ相當らず、かやといふのが、稍や近いと思はれる。その病柏は、火難の爲に痛められて、弱つて居るものと見える。この首は、杜寅・徐賁の二人とともに、長洲の白蓮寺に游び、病柏を見て作つたのである。この中、徐賁は、數ば前に見えたが、杜寅は、如何なる人か、分からぬ。

【詩意】 この柏樹は、本來の特質として、節くれ立つて、輪囷として居るが、根を託す處が宜しくなかつたので、何分不遇である。されば、瀕死の氣色は、十分に見えて居るが、流石に、生意は餘程殘つて居る。その物古りたる切り株は、半身焦げて仕舞ひ、殘れる葉は、小兒の切り髪の片方が禿げたの山火事ではなかつた。今見るところ、幹は傾いて、その麻痺したる樣は、扶けを待つが如く、節には、穴が明いて居て、その創は繃帶でもして貰はなければならぬ樣である。下の穴には、大蟻が巣を構へて居るし、上の孔には、似我蜂が行列をなして居る。風に壓倒されると、その聲、哀を告ぐるが如く、雨に冒されると、汗が粒をなして見える。その空洞に蟄居して、蝮蛇は其身を容れられしを喜び、脆い枝を攀ぢて、猿は落ちむことを心配して居る。これを削つた處で、棟梁の用には中らず、ゑぐつて見ても、到底舟にはならない。天蓋の如き葉は萎んで、青葱の色を缺き、梢は枯れて、光澤が無くなつて仕舞つた。拾つて爐爐裏で燒く樣な實も結ばず、人の坐する時、牀を庇護する樣な木かげもない。それに寄生して居る蟲を食ひ盡しても、飢ゑた鳥は、なほ之を啄み、巣が傾くと、跛足の雛鳥は、氣の毒にも、躓いて轉げ落ちさうである。瘦せたる形は、慘然として、如何にも弱弱しく、突き出た腹は、腫れ上つて、膨れて居る。藤蔓が卷き付いて居るから、それを假りて、敗を爲して居るものの、苔が剝げると、樹身を露はして、全く裸である。この木の持主は、なほ惜んで、大工が顧みて欲しいと云ひはせぬかと思ひ煩ひ、木こりは、伐らうとしても、傍から窺つて、寺僧の見巡り

を避けて居る。何分土は瘠せて居て、力衰へ易く、巖は危くして、勢落ち付いて居られない。嚴しい霜に遭つて殺されるのは、心配であるが、甘露が下れば、なほ醫することが出來る。伐つて器具に造られた處で、幸福といふ譯でもなく、不材の爲に却つて禍を逃れた方が、善いに違ひない。今も相變らず、林に依つて支へられ、石に垂れかかつて、磊砢の態を爲して居る。だんだん年を閲した爲に、貞固の委を失ひ、太陽の光を受けては、小枝の餘り細かいことを愧づるばかり。その後凋の節操は、孔子の御言葉に褒められたのに反く樣であるが、古柏の名は、杜甫の詩に見えて、世に播布して居る。敢て泰山の松の如く、秦の始皇から大夫に封せられることを望んでも居ないが、馮廟の梁とせられた梅樹の如く、自然靈異があつて、鐵の鎖で嚴重に繫がれることもあらう。根は深く蟠まつて、踞み氣昧であるし、枝幹は重く架せられて、なかなか脊負ひ切れぬ樣である。天地の氣を受けたことは同じであつて、生は固より均しきも、命數は異にして、豫め測ることは六つかしい。大分古くなつて、膏が拔けて居るから、伐つて燃やした處で、明るくはなく、枝葉の屑は、常に落ちて居て、掃ふと隨分夥しい。今、われ等は、まことに氣の毒に思つて、これを弔うて詩を作つた位であるが、寺童は、棄てて顧みず、これを培植することも忘り勝である。永久に保護することは、遂に何人を煩はすか知らぬが、今日、吾等に遭つたのは、まことに、汝の爲に幸福である。

風雨聯句

與會稽張憲在報恩佛寺遇風雨而作

會稽の張憲と報恩佛寺に在り、風雨に遇うて作る

盲風簸天興。憲凍雨翻海瀉。　盲風、天を簸つて興り、凍雨、海を翻へして瀉ぐ。
魚蝦落半空。啓蛟龍鬬中野。　魚蝦、半空より落ち、蛟龍、中野に鬬ふ。
蟄呑九河黃。憲功潤千里赭。　蟄は九河の黃なるを呑み、功は千里の赭なるを潤す。
怒疑決沙囊。啓振訝摧屋瓦。　怒つては、沙囊を決するを疑ひ、振つては、屋瓦を摧く。
橫行天兵駃。憲大笑電母哆。　橫行、天兵駃せ、大笑、電母哆る。
乾坤發生多。啓道路喝死寡。　乾坤、發生多く、道路、喝死寡し。
潦漲濤涌川。憲旱去煙滅冶。　潦漲つて、濤、川に涌き、旱去つて、煙、冶を滅す。
谷號竟誰噓。啓木撼不自把。　谷は號んで竟に誰か噓く、木撼いて自ら把らず。
神靈眞恍惚。憲造化非苟且。　神靈、眞に恍惚、造化、苟且に非ず。
初占月離畢。啓又駭泗沒社。　初め占して、月、畢に離り、又駭く、泗の社を沒するを。

必變其聖乎。憲弗迷唯舜也。
陰岑氣如炊。啓高葉聲若打。
陽烏韜不見。憲乾鵲噤皆啞。
重翳晦復明。啓餘點歇還灑。
雖悅灌園人。憲應愁渡江者。
侍王笑楚賦。啓及我慙周雅。
避思泰山顚。憲戰憶昆陽下。
雄夫匕易失。啓吝士蓋難假。
既霑想大田。憲廣庇思巨厦。
桔槔向晩停。啓紈扇未秋捨。
亂號官私蛙。憲莫辨去來馬。
臥驚浪喧耳。啓歸恐泥沒踝。
勿憂卷茅屋。憲且喜憩蘭若。
民期歲有登。啓國荷天錫暇。
沛澤宜載歌。憲新篇試姑寫。啓

必ず變ずるは其れ聖か、迷はざるは唯だ舜なり。
陰岑、氣、炊ぐが如く、高葉、聲、打つが若し。
陽烏、韜んで見えず、乾鵲、噤皆啞す。
重翳、晦復た明、餘點、歇んで還た灑ぐ。
灌園の人を悅ばすと雖も、應に渡江の者を愁へしむべし。
王に侍して楚賦を笑ひ、我に及びて周雅を慙づ。
避は泰山の顚を思ひ、戰は昆陽の下を憶ふ。
雄夫、匕、失ひ易く、吝士、蓋、假し難し。
すでに霑うて大田を想ひ、廣く庇して巨厦を思ふ。
桔槔、晩に向つて停まり、紈扇、未だ秋ならざるに捨つ。
亂號す官私の蛙、辨ずるなし去來の馬。
臥して驚く、浪の耳に喧しきを、歸つて恐る、泥の踝を沒するを。
憂ふる勿れ、茅屋を卷くを、且つ喜ぶ蘭若に憩ふを。
民は期す歲に登ることを、國は荷ふ天の暇を錫ふを。
沛澤、宜しく載ち歌ふべし、新篇、試みに姑く寫す。

【字解】【一】 盲風　晴き空を吹く風、禮記に「仲秋、盲風至る」とある。【二】 凍雨　強い雨、詩雅に「暴雨、これを凍といふ」とあつて、その注に「今江東、夏月の暴雨を呼んで凍雨となす、離騷に云ふ、令飄風兮先驅、使凍雨兮灑塵と、是れなり」とある。【三】 魚蝦落半空　東坡の詩に龍卷魚蝦井雨落とある。【四】 蛟龍鬪中野　杜甫の雨の詩に牛馬行無色、蛟龍鬪不開とある。【五】 九河黃　九は大義で多くの河。但し、河は黃河に注ぐものないふ。【六】 決沙囊　史記淮陰侯傳に「龍且、信と濰水を挾んで陣す。韓信、乃ち、夜、人をして萬餘の囊を爲つて、沙を滿盛せしめ、水の上流を壅ぎ、軍を引いて半ば渡るとき、龍且を擊つ」とある。【七】 摧屋瓦　史記趙奢傳に「秦軍、鼓噪して兵を勵す、武安の屋瓦、盡く振ふ」とある。【八】 電母哆　神異經に「東荒山中、大石室あり、東王公居る、玉女と投壺す。もし入つて、出でざるものあらば、天、これが爲に笑ひ、口を開いて光を流す、今の電是れなり」とあり、東坡の詩に「挫雷車呵電母」とあり、廣韻に「哆は、脣の下垂の貌」とあつて、口を開くこと。【九】 喝死　日射病に罹つて死ぬこと。【一〇】 潦漲　潦は雨後の出水、にはたづみ。【一一】 煙滅冶　冶は鍛冶。【一二】 月離畢　月が畢といふ宿にかかると雨が降る。詩經に月離于畢、俾滂沱矣とある。離はかかる。【一三】 泗沒社　史記封禪書に「宋の太邱の社、亡びて、鼎、泗水彭城の下に沒す」とある。【一四】 必變其聖乎　論語に「迅雷風烈、必ず變ず」とある。【一五】 弗迷唯舜也　書經に「これを大澤に入る、烈風雷雨にも迷はず」とある。【一六】 陰岑　くもりたる山。【一七】 高葉聲若打　詩話に「王禹錫の賀春雨の詩に云ふ、打葉雨拳隨手重」とある。【一八】 陽烏　太陽を云ふ。【一九】 乾鵲　本草釋名に「鵲、性、濕を惡む、故に之を乾といふ」とある。【二〇】 灌園人　高士傳に「於陵仲子、人の爲に園に灌す」とある。【二一】 渡江者　世說に「衞洗馬、初め江を渡らむと欲す、左右に語つて曰く、この茫茫に對して、覺えず百端交も集まる」とあり、郭玗の復愁の詩に江雨舟無渡とある。【二二】 侍王笑楚賦　宋玉が楚の襄王に侍し、巫山神女の事を聞いて、高唐の賦を作りしこと、前に卷十三、詠夢の結末、陽臺莫三重問二千古笑一巫娥一の項にも見ゆ。【二三】 及我慙周雅　詩經の大雅に

爾ニ我公田一、遂及ニ我私一とある。【二四】 避思泰山頌　秦の始皇が泰山に登りし時、雨を松樹の下に避け、仍つて、これを大夫に封ぜしこと、前の病柏聯句の中にも見ゆ。【二五】 戰憶昆陽下　後漢書光武本紀に「光武、莽と昆陽に戰ひ、莽の兵、大に敗る。會ま大雷風、屋瓦皆飛び、雨下ること注ぐが如し」とある。【二六】 匕鳥失　蜀志先主傳に「曹公、從容として、先主に謂つて曰く、今、天下の英雄、惟だ使君と操とのみ、と。先主、方に食うて、匕箸を失ふ」とある。【二七】 蓋藤假　家語に「孔子、將に出でむとして、天雨ふる。門人曰く、商に蓋あり、請ふ假らむ、と。孔子曰く、商、人と爲り財に短。吾聞く、人と交はるものは、長を推して短に遜ふ、故に久し。吾、商に蓋あるを知らざるに非ず、借さずして、その過を彰はすを惡るるなり」とある。【二八】 既霑想大田　詩經の大田に既霑既足とある。【二九】 廣庇思巨厦　杜甫の茅屋爲ニ秋風所一破歌に安得廣厦千萬間、風雨不レ動屹如レ山、大庇ニ天下窮士一共歡顏とある。【三〇】 官私蛙　前に卷十三、聞蛙の中にも引いて置いたが、晉書に「惠帝、華林園に在つて、蛙聲を聞き、左右に問うて曰く、この鳴くもの、官の爲めか、私の爲めか。賈胤對へて曰く、官地に在るものは官の爲めにし、私地に在るものは私の爲にす」とある。【三一】 去來馬　杜甫の秋雨歎に去馬來牛不ニ復辨一とある。【三二】 卷茅屋　杜甫の茅屋爲ニ秋風所一破歌に八月秋高風怒號、卷ニ我屋上三重茅一とある。【三三】 歲有登　この秋の豐年なること。【三四】 鍋蝦　蝦は鰕蝦。【三五】 沛澤　雨の潤澤を云ふ。

【題義】 報恩寺は、前に卷十二、報恩寺逢ニ蔣主簿就一、送レ還ニ如皐一の題下に注して置いた。蘇州城の北陲に在つて、俗に北寺と稱するので、今も、十一級の高塔が依然として殘つて居る。この首は、張憲と共に、報恩寺に游び、そこで、風雨に遇つて作つたのである。

【詩意】 黑風は、天を簸つて吹き起り、暴雨は、丸で海水を翻して注ぐ樣であつて、魚蝦は半空より落ち、蛟龍は野中に鬪ふを疑ふばかり。雨の勢は、九河の黃なるを呑み盡すが如く、その功は、連日天旱、丸で赤くなつた千里の土を潤すに足る位。怒つては、濰水の戰に、川を壅いだ沙囊を切つて落すが如く、その振動の劇しきは、屋根の瓦を摧くかと疑ふばかり。橫行しては、天兵の疾驅する如く、大笑しては電母が口を明く樣である。風雨一たび到りし後は、天地の間、萬物新に發生し、道路にのたれ死にをするものも、少く成らう。行潦は漲つて、波濤川に涌くが如く、旱も忽ち去つて、鍛冶屋の煙が消えた樣である。谷の叫ぶのは、誰が氣を吹くのか、木の撼くのは、自分で把住して居ることも出來ず、恍惚として、神靈の出現を疑ひ、そして、造化の決して苟且ならぬことが分かつた。月が畢の宿に掛つたのを見て、さては雨かと占つたのは、見ん事的中したが、泗水が社を沒するばかりなるは、全く豫想外で、大に駭かされた。かかる迅雷風烈に際して、色を變ずるは、孔子の聖人たる所以、そして、大澤に入つても道に迷はなかつたのは、唯だ舜のみで、何は兎もあれ、聖人は違つたものである。曇れる山山は、雲が涌き出でて、さながら炊ぐが如く、高處の木葉の鳴るは、丸で打蘿がれた樣である。太陽は匿れて見えず、乾を喜ぶ鵲は、默して啞の樣である。重れる雲翳は、晦かつたのが、どうやら、再び明かならむとし、殘れる雨は、一たび歇んで又注いで來る。園に灌ぐ人は、大たすかりで、喜んで居るであらうが、江を渡る人は、舟が出ないので、困まつて居るに相違ない。宋玉が楚王に侍して、朝雲暮雨、巫山の神女を賦したといふのは、取り立てて言ふべき程の事でもなく、初めに公田に雨らし、遂に我が私田にも及ぶといふ小雅の詩の意味は、まことに有り難い。

雨を避けたことに就いては、秦の始皇が泰山の巓に於けるを思ひ、風雨に乘じて戰つたことに關しては、後漢の光武が昆陽の下に於て、王莽の大軍を破りしを憶はしめる。風雨の甚しきに當つては、劉玄德の如き雄夫でも、匕箸を失つたといふし、吝嗇な者から、車蓋を借りるのは、その人の過を彰はす樣なものだといつて、孔子は、わざと差し控へられた。すでに、我が田の露ひたるに就いては、大田の詩を想ひ、廣く天下の窮士を庇護する爲には、かういふ場合に、大きな家の必要をつくづく感じた。はね釣瓶も、この日暮には、全く用なく、素紈で張つた團扇も、未だ秋ならざるに棄てる位。官私を問はず、隨處の青田には、蛙が亂れ叫び、漲れる水の彼方に去來するものは、馬か、何か、一寸分からない。臥しては、浪聲の耳に喧しきに驚き、歸らむとしては、泥の蹄を沒するを恐れる。わが茅屋を吹き飛ばした位は、何でもないことで、今しも、御寺に休憩して居るから、先づ安心である。ただ一雨の爲に、民は今秋の豐年を豫期すべく、國を擧げて、天より福祉を賜はつたことを感謝して居る。この潤澤は、宜しく歌ふべきもので、そこで、新篇を草して、試みに之を寫して見たのである。

虎邱聯句

與潯陽張羽・太原王行・郟郡徐賁游虎阜、用壁間顏魯公韻作

潯陽の張羽・太原の王行・郟郡の徐賁と虎阜に游び、壁間顏魯公の韻を用ひて作る

山游期屢阻。風雨過今春。羽　山游、期、屢ば阻み、風雨、今春を過ぐ。
偶遂林泉賞。仍同里閈親。行　偶ま林泉の賞を遂げ、仍ほ里閈の親を同じうす。
樹重迷卓午。花盡謝芳辰。啓　樹重つて卓午に迷ひ、花盡きて芳辰を謝す。
事往非前代。僧逢是故人。賁　事往いて、前代に非ず、僧逢ふ、是れ故人。
金精銷虎氣。寶藏衞龍神。羽　金精、虎氣を銷し、寶藏、龍神を衞る。
妖魄憐埋玉。仙詩看勒珉。行　妖魄、埋玉を憐み、仙詩、勒珉を看る。
年登廚有供。村遠寺無鄰。啓　年登つて廚に供あり、村遠くして寺に鄰なし。
池古寒泉定。林喧夏果新。賁　池は古くして寒泉定まり、林喧にして夏果新なり。
井名猶記羽。樓姓尙題陳。羽　井名、猶ほ羽を記し、樓姓、尙ほ陳を題す。
步策方循澗。廻橈已待津。行　策に步して、方に澗に循ひ、橈を廻して、已に津を待つ。
緣雖喧寂異。妄本去來均。啓　緣は喧寂異なりと雖も、妄、本と去來均し。

摩壁追高韻。應慙繼後塵。賁壁を摩して高韻を追ひ、應に後塵を繼ぐを慙づなるべし。

【字解】【一】山游　游山に同じ。【二】里閭親　閭は里門、閭に同じ、同里に居る親友。【三】卓午　亭午、眞壹・李白の詩に飯顆山頭逢杜甫頭戴笠子日卓午とある。【四】虎氣　前に數ば見ゆ、吳越春秋に「闔閭、ここに葬る、越えて三日、金精、結んで白虎となつて、その上に踞す、故に名づく」とある。【五】寶藏衞龍神　幽怪錄に「開元中、葉天師、經を明州奉化縣に講ず、忽ち一老翁來り禮す、自ら云ふ、守藏の龍、ここを守る千歲、方に炎河の罰を免る、今胡僧の呪水に殺されむと欲す、天師、符を以て之を救へ」とある。【六】妖魂　美人の魂魄、即ち眞娘を云ふ。その詳は、前に卷六、眞娘墓の題下に注して置いた。【七】仙詩看勒珉　仙詩は清遠道士の詩、前に卷五、虎邱の題下に注して置いた。勒珉とは、石に刻すること。【八】井名猶記羽　前に卷十三、石井泉の題下に注して置いた、虎邱志に「陸羽の石井は、劍池の旁、經藏の後に在り」と記してある。【九】年登　豐年を云ふ。【一〇】樓姓御題陳　虎邱志に「はじめ、寺僧、水を劍池に取り、登降甚だ勞す。宋の隆興二年、陳數文、錢二十萬を出し、兩崖に跨つて樓を建て、その上に井幹を爲り、以て汲むに便す、因つて、陳公樓と名づく」とある。【一一】步筇　杖に縋つて歩く。

【題義】張羽・王行・徐賁、ともに北郭十才子に列した人人で、前に春日懷二十友一詩にも見えて居た。虎阜は虎邱。顏魯公、名は眞卿。その詩は、刻二清遠道士詩一、因而繼作と題して、全篇は左の通りである。

不レ到二東西寺一。于レ今五十春。竭來從二騖賞一。林壑宛相親。吳子多藏日。秦皇厭勝辰。劍池穿二萬仞一。盤石坐二千人一。金氣騰爲レ虎。琴臺化若レ神。登レ壇仰二生壹一。捨レ宅歎二珣珉一。中嶺分二雙樹一。廻巒絕二四鄰一。窺臨江海接。崇飾歲時新。客有二神仙者一。於レ茲雅麗陳。名高清遠峽。文聚斗牛津。跡異心寧閒。聲同質豈均。悠然千載後。知我抱二光塵一。

この首は、青邱が張羽・王行・徐賁の三詩友とともに、虎邱に游び、壁間に掲げたる顏眞卿の詩の韻を用ひて、聯句を試みたのである。

【詩意】虎邱に游ばうと約束したものの、今春は、風雨の中に過ぎて、數ば其期を妨げられたが、今日は、偶然にも、林泉の勝賞を遂げ、そして、同里の親友と一處に遣つて來た。木木は重なり合つて、その影は、眞晝に迷ひ、花は落ち盡して、最早、春を送つて仕舞つた。事往いて、すでに前代に非ず、逢つた坊さんは、騖知の者であつた。山頭なる金鐵の精は、かつて化して白虎と爲つたといふが、その氣、すでに銷え、寶藏は、龍神が猶ほ守護して居るとのことである。眞娘は、此に葬つて、さながら玉を埋めたると一般、清遠道士の詩は、石に刻されて、今でも殘つて居る。豐年の後とて、寺でも、なかなか御馳走があるし、ここは、村にも遠くて、鄰家といふものがない。劍池は古くして、寒泉流れ靜に、林には、風日暖にして、夏の木の實が熟しかかつて居る。井は、陸羽の石井と稱し、樓は、人の姓を其儘、陳公樓と號して居る。杖に縋つて歩を移しつつ、溪澗に循ひ、歸途は、舟を移さしめて、渡しを待つて居る。身は猶ほ俗界に在つて、喧寂、緣各一異なれども、妄念は、もとより去來ともに均しく消えて居る。されば、寺壁を撫でて、顏魯公の高韻を追ひ、この聯句を物したのであるが、到底、後塵を繼ぐに足らぬのは、まことに愧ぢ入る外はない。

蓮房聯句

與金華宋璲・張孟兼作

蓮房聯句　金華の宋璲・張孟兼と作る

露冷鏡(一)湖秋。璲　波涼練(二)塘曉。　露は冷かに鏡湖の秋、波は涼し練塘の曉。
盤(三)翻綠雲稠。兼　錦(四)破朱霞少。　盤は翻へつて綠雲稠く、錦は破れて朱霞少し。
新苞(五)顆(六)微綻。啓　餘葩(七)莖(八)尚嫋。　新苞、顆、微に綻び、餘葩、莖、尚ほ嫋。
瘦繭(九)綴寒蠶(一〇)。璲　尖喙啄(一一)青鳥。　瘦繭、寒蠶を綴り、尖喙、青鳥を啄ましむ。
下惟玉(一二)龍眠。兼　中有瓊(一三)絲裊。　下、惟だ玉龍眠り、中に瓊絲の裊たるあり。
擎重柄欲折。啓　含深晴(一四)尚窅。璲　重きを擎げて柄折れむと欲す、深きを含んで晴尚ほ窅。
孤懸類覆杯。兼　雙立疑擢(一五)表。啓　孤懸、覆杯に類し、雙立、擢表を疑ふ。
初成欣雨滋。兼　漸老怯風掉。啓　初め成つて雨の滋ふを欣び、漸く老いて風の掉ふを怯る。
多子同根榮。啓　獨婦專房悄。璲　多子、同根榮え、獨婦、專房悄たり。
妝(一七)卸失嬣婷。啓　歌來逢窈窕。璲　妝卸して嬣婷を失ひ、歌、來つて窈窕に逢ふ。
剖(一八)心效諫忠。兼　竝(一九)頭呈瑞兆。啓　剖心、諫忠に效ひ、竝頭、瑞兆を呈す。
裏(二〇)蹄密竅剜。璲　魚目微光皎。啓　裏蹄、密竅剜り、魚目、微光皎たり。
珠珥(二一)落槃多。啓　瑤軫(二二)貯囊小。璲　珠珥、槃に落つること多く、瑤軫、囊に貯へて小なり。
空實外莫辨。　甘苦中自了。　空實、外、辨ずるなし、甘苦、中に自ら了る。
剝殘星滿地。　采盡香餘沼。啓　剝殘して、星、地に滿ち、采り盡して、香、沼に餘る。
雕筵(二三)飣(二四)戢戢。　玉蟲(二五)攢擾擾。　雕筵、飣へて戢戢たり、玉蟲、攢まつて擾擾たり。
送看出小艇。　薦喜對清醥(二六)。兼　送つて、小艇を出し、喜を薦めて、清醥に對す。
新嘗勝江茨(二七)。　遠覓迷水蓼(二八)。　新に嘗めては江茨に勝れり、遠く覓めては水蓼に迷ふ。
褰(二九)芳想夏初。啓　感物傷秋杪。　芳を褰げて夏初を想ひ、物に感じて秋杪を傷む。
聊茲發吳(三〇)詠。啓　一覽煙水渺。璲　聊か茲に吳詠を發し、一覽す煙水の渺たるを。

【字解】【一】鏡湖　浙江紹興縣の南に在つて、一名鑑湖、又の名長湖、唐の玄宗が祕書監賀知章に鏡湖一曲を賜はつたから、又賀監湖とも名づける。宋の熙寧の後、次第に廢して田となつて仕舞つた。【二】練塘　前に卷五、練潰の題下に注して置いたが、その原注に「太湖に在り、葑傳、吳王闔閭以て兵を練るところ」とある。【三】盤翻　蓮の葉の形、盤に似たるより云ふ。【四】錦破　蓮の花の開え間を云ふ。【五】新苞　苞はつと、つつみ、蓮の實の新に出來たのを云ふ。【六】顆　蓮の實の塊まり。【七】餘葩　殘れる花。【八】莖尚嫋　嫋はしなやかなる貌。【九】瘦繭　陳高の詩に結實吐三秋繭一とある。【一〇】寒蠶　齊民要術に「永嘉に八蠶蠶あり、九月、寒蠶を績む」とある。【一一】青鳥　漢武故事に「七月七日、忽ち青鳥あり、殿前に飛集す。東方朔曰く、これ西王母

来らむと欲す、と。しばらくあつて、王母至る、三青鳥、王母の旁に侍す」とある。【二二】玉龍眠　清異録に「崔遠の家墅、長安城南に在り、就中、蓮池に巨蘭を産し、一時に貴重せられ、相傳へて蘭寶となし、又玉臂龍といふ」とある。【二三】瓊絲蟲　朱超道の詩に「摘二除蓮上葉一、拖二出蘭中絲一」とある。【二四】請倚育　蓮の實の穴が人の目に似て居て、目玉は、まだ暗く、はつきりとせぬといふ意。【二五】擢表　日かげ柱、時を計る爲に日を盛りし柱。史記司馬穰苴傳に「表を立て、漏を下す」とある。【二六】多子　實の粒の多いこと、張籍の采蓮曲に秋江孝逸蓮子多とある。【二七】散卸　紅妝を取り去る。【二八】剖心效諫忠　史記殷本紀に「紂、淫虐甚し。庶兄微子、數ば諫むれども聴はず、これを去る。比干諫む、三日去らず、紂、怒つて曰く、吾聞く、聖人の心に七竅あり、と。剖いて其心を觀る」とある。【二九】並頭　蓮の花は一莖に一花が普通であるが、二花を生ぜしものを並頭といひ、瑞蓮として珍重する。邵堯夫の雙頭蓮の詩に、漢殿嬋娟雙姉妹、天台縹緲兩神仙、當時儘有二風流格一、謂向二人間一作二瑞蓮一とある。【三〇】裏蹄　馬蹄に金を當てること、即ち蹄鐵、韻會に「裏蹄は金の名」とあり、漢書武帝紀に「太始二年、白麟を獲、以て宗廟に饋る、渥洼水、天馬を出し、泰山、黄金を見る、故に黄金を名づけて麟趾裏蹄となし、以て瑞に協ふ」とある。【三一】珠珥　珥は耳飾り。【三二】落槃　槃は盤に同じ。【三三】璃鈔　鈔は、琴の下に在つて絃を轉ずる用を爲すもの、即ちこま。【三四】聽鐘　立派な寞席。【三五】釘鈸鈸　用意して淨山あること。【三六】玉蟲　蓮の實を形容して云ふ。【三七】清隙　隙は澄み酒。【三八】江茨　茨は水ふき、本草に「花は蓮頂に在り、亦た雞喉及び蛸喉の如し、剝開すれば、内に斑殿の軟肉あり、裏の子、累累として珠璣の如く、殼内の白米、狀、魚目の如く、取收して食ふ」とある。【三九】水藻　水たで。【三〇】襲芳　蓮の花を采る。【三一】吳詠　吳地の歌。

【題義】蓮房は蓮の實、杜甫の秋興に露冷二蓮房一墜粉紅とあり、本草に「花穠せて、蓮房、菊を成す、菊房に在つて、蜂子、窠に在るの狀の如し、六七月、嫩なるものを采つて生食すれば脆美なり、秋に至つて、房枯る、子黑くして、その堅きこと石の如し、八九月、これを收め、黑殼を斫り去る、これを蓮肉といふ」とある。宋璟・張孟兼の二人、ともに金華の人、金檀の按に「璟は學士濂の子、中書舍人、孟兼は禮部主事」とある。この詩は、宋・張二人と共に、蓮の實を詠ずる爲に、聯句を試みたので、多分、青邱の滯京中に係るだらうと思はれる。

【詩意】鏡湖秋至つて、白露冷かに、練塘曉早く、碧波涼しく、兩地、ともに蓮の名所である。眺むれば、盤の如き葉は、翻つて、綠雲稠きが如く、錦の如き花は中斷して、朱霞も少げに見える。その間には、蓮の實もちらほら見え、新に苞を爲せしものは、その塊が、心持綻び裂けむとし、殘れる花の莖は、尙ほたをやかである。時とすると、寒蠶が、その處に瘦せた繭を結んで、ぶら下つて居ることもあるし、青鳥は、尖つた嘴を以て、これを啄んで居る。下には、玉龍と稱せらるる蓮根が、泥中に潛んで居るし、中には、莖を通じて、奇麗な絲が裊裊として居る。その實は、隨分重いから、これを擎げて居る柄は、折れさうであるし、一寸見ると、人の目の如く、深く窪んで居て、晴に相當する處は暗くて、はつきりとは分からぬ。その實が一つ懸つて居る處は、杯を覆した樣であるし、並び立つて居る時は、日かげ柱を衝き立てたかと疑ふばかり。はじめて實を成した時は、雨に滋ふを喜び、次第に成熟しかかると、風に搖すられることを怯れる。その粒は多くして、同根の繁殖を期すべく、そして、各粒は、一人の女が悄然として閨房を專有して居る樣である。蓮の花は落ちて、すでに紅妝を卸したから、娉婷の姿、復た見るべからず、そして、相變らず、歌を唱へつつ來る少女は、窈窕にして、なまめかしい。その實を取つて、中心から剖くと、丁度、比干が極諫して胸を裂かれた